

神田ムク入道遺跡

— 宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2005.3

高知市教育委員会

神田ムク入道遺跡

— 宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2005.3

高知市教育委員会



1. 遺構完堀状況



2. SD2遺物出土状況

序

神田地区は高知市の西部に位置しており、北側の鴨田地区や西側の朝倉地区などとともに、市内でも早くから鏡川の沖積作用による陸地化が進み、人々の居住が広がった地域で、奈良時代の文献にもすでに神田地区を示すと考えられる地名が登場しています。それ以前の先史・原始時代においても遺跡が形成されており、朝倉地区に所在する柳田遺跡では平成4年に、鴨田地区に所在する鴨部遺跡では平成13年にそれぞれ発掘調査が行われ、縄文時代には人間が居住していたことがわかっており、また、周辺の山沿いには古墳も点在しています。

今回調査を行った神田ムク入道遺跡は、上に述べたような先史・原始時代の遺跡ではなく、中世前半の鎌倉時代頃を中心時期とする遺跡です。高知市内で、この時代の遺跡について本格的な発掘調査が行われたのは、この遺跡が初めてです。調査面積は約300m²と小規模でしたが、発掘調査では井戸跡や溝跡をはじめとする、この時代の多くの遺構が検出され、また、当時の人々が使用した土器や陶磁器などの遺物も多く出土しました。この報告書が文献資料の比較的乏しいこの時期の高知市、とりわけ神田地区の歴史についての研究や理解を深め、文化財保護の取り組みを更に深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に関わられた方々にお礼を申し上げるとともに、関係各機関のご理解とご協力に感謝いたします。

平成17年3月 高知市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は高知県高知市神田に所在する「神田ムク入道遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力をうけ、高知市教育委員会を主体として、1995年9月11日から10月14日まで行った。調査面積は約323平米である。また、重機掘削については共運工業有限会社の協力を得た。
3. 発掘調査においては調査対象地の形状に合わせた任意座標を設定し使用した。
4. 整理作業は現場終了後2005年2月まで行った。遺物及び諸記録は高知市教育委員会で保管している。遺物の注記は95-16-KMである（試掘調査2の注記は95-25-KM）。
5. 現地調査においては、多くの方々の協力をえて調査を進めることができた。記して感謝したい。
6. 整理作業においては、下記の方々の協力を得た。（順不同・敬称略）

大賀幸子、樋尾洋子、松本安紀彦、森岡亜衣子

7. 本書の編集は田上浩が行った。執筆は、第1章第2節を梶原瑞司が、それ以外を田上が分担した。また、編集に際して岩崎佐枝、大賀幸子の協力を得た。また、遺物写真撮影は梶原、遺物観察表の作成は田上・梶原が共同で行った。
8. 本書内の遺物実測図については縮尺を1/3で統一した。また、遺構図についてはS E 1のものを除き1/100に統一した。
9. 本書内の中世の酸化焰焼成の素焼き土器については回転台土師器や（須恵系）土師質土器等の名称は使用せず、単に土師器の名称を用いた。
須恵質焼成の遺物についても古墳時代～古代、中世ともに単に須恵器の名称を用いた。
10. 出土渡来銭のX線写真については、高知県工業技術センターの協力を得た。記して感謝したい。
11. 発掘調査及び報告書作成にあたり、高知県教育委員会及び高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から多くの助言、教示を賜った。記して感謝したい。

本文目次

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過及び周囲の環境	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 遺跡の立地及び付近の遺跡	
(1)立地環境	1
(2)歴史的環境	2
第3節 調査の方法	
(1)試掘調査1(今時対象地)	6
(2)試掘調査2(今時対象地の北隣)	6
(3)本発掘調査	9
第2章 調査の成果	
第1節 基本層序	13
第2節 検出遺構と出土遺物	
(1)井戸跡	13
(2)掘立柱建物跡	14
(3)壠列	17
(4)土坑	19
(5)ピット出土遺物	21
(6)溝跡	26
第3節 包含層出土遺物	
(1)2層出土及び表採遺物	32
(2)3層出土遺物	33
第4節 試掘調査出土遺物	
(1)試掘調査1	36
(2)試掘調査2	36
第3章 まとめ	
第1節 弥生時代	51
第2節 古墳時代から古代	51
第3節 中世	
(1)遺物	51
(2)遺構	56
第4節 近世以降	57
第5節 終わりに	57

図版目次

図1	周辺の遺跡及び今回の調査対象地位置図	3
図2	試掘調査1 試掘坑配置図及び遺構検出状況図	7
図3	試掘調査1 試掘坑配置図及び遺構検出状況図	8
図4	本調査検出遺構平面図	11
図5	東壁土層断面図	13
図6	SE1 出土遺物実測図	13
図7	SE1 平面図・断面図	13
図8	SB1 平面図・断面図	14
図9	SB2 平面図・断面図	14
図10	SB3 平面図・断面図	14
図11	SB4 平面図・断面図	15
図12	SB5 平面図・断面図	
図13	SB6 平面図・断面図	
図14	SB7 平面図・断面図	16
図15	SB8 平面図・断面図	
図16	SB9 平面図・断面図	
図17	SB10 平面図・断面図	17
図18	SB11 平面図・断面図	
図19	SA1 平面図・断面図	
図20	SB・SA出土遺物実測図及び拓影	18
図21	SA2 平面図・断面図	19
図22	SA3 平面図・断面図	
図23	SK1 平面図・断面図	
図24	SK2 平面図・断面図	20
図25	SK3 平面図・断面図	
図26	SK4 平面図・断面図	
図27	SK出土遺物実測図及び拓影	21
図28	P1～P22 出土遺物実測図及び拓影	24
図29	P23～P30 出土遺物実測図及び拓影	25
図30	SD 平面図・断面図	27
図31	SD1 出土遺物実測図及び拓影	28
図32	SD2 南半部出土遺物実測図及び拓影	30
図33	SD2 北半部出土遺物実測図及び拓影	31
図34	SD3 出土遺物実測図及び拓影	
図35	2層出土及び表採遺物実測図及び拓影	32
図36	3層出土土師器実測図及び拓影	34
図37	3層出土遺物（土師器以外）実測図	35
図38	試掘調査1 出土遺物実測図及び拓影	36
図39	試掘調査2 出土遺物実測図及び拓影1	37
図40	試掘調査2 出土遺物実測図及び拓影2	38
	土師器坏・小皿法量分布図	55

表 目 次

周辺の遺跡	3
ピット計測表	22
遺物観察表 1 (1~23)	39
遺物観察表 2 (24~46)	40
遺物観察表 3 (47~69)	41
遺物観察表 4 (70~91)	42
遺物観察表 5 (92~111)	43
遺物観察表 6 (112~136)	44
遺物観察表 7 (137~158)	45
遺物観察表 8 (159~180)	46
遺物観察表 9 (181~203)	47
遺物観察表 10 (204~224)	48
遺物観察表 11 (225~245)	49
遺物観察表 12 (246~264)	50
土器小皿・坏集計表	54

写真図版目次

巻頭カラー	巻頭
1. 遺構完掘状況	
2. S D 2 遺物出土状況	
写真図版 1	61
1. 試掘 1 及び本調査対象地全景 (南から)	
2. 試掘 2 調査対象地全景 (南から)	
写真図版 2	62
3. 溝跡完掘状況 (南から)	
4. S E 1 完掘状況 (北から)	
写真図版 3	63
5. 遺物出土状況	
6. 遺物出土状況	
写真図版 4	64
7. 遺物出土状況	
8. 遺物出土状況	
写真図版 5	65
9. 遺物出土状況	
10. 遺物出土状況	
写真図版 6	66
11. 遺物出土状況	
12. 遺物出土状況 (試掘 2)	
写真図版 7 出土遺物 1 (1~24)	67

写真図版8	出土遺物2(25~47)	68
写真図版9	出土遺物3(48~71)	69
写真図版10	出土遺物4(72~93)	70
写真図版11	出土遺物5(94~117)	71
写真図版12	出土遺物6(118~140)	72
写真図版13	出土遺物7(141~164)	73
写真図版14	出土遺物8(165~188)	74
写真図版15	出土遺物9(189~212)	75
写真図版16	出土遺物10(213~232、234)	76
写真図版17	出土遺物11(233、235~249)	77
写真図版18	出土土器12(250~264、渡来鏡)	78

神田ムク入道遺跡

- 宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

第1章 調査に至る経緯と経過及び周囲の環境

第1節 調査に至る経過

神田ムク入道遺跡は高知市神田地区に所在する遺跡で、中世の遺跡として周知されている。

1995(平成7)年5月、周知の埋蔵文化財包蔵地(神田ムク入道遺跡)の範囲内において「埋蔵文化財の所在の有無」についての照会が、統いて7月に「埋蔵文化財発掘の届出」が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対して提出された。これを受けて市教育委員会では8月21日~25日にかけて試掘調査を行った。その結果、設定した4箇所の試掘坑全てにおいて土器・陶磁器等多くの遺物が出土するとともに遺構も確認された。

試掘調査の結果を受けて地権者・県教育委員会・市教育委員会の三者で協議が行われた。当該地は、造成後に事務所用地として賃貸の予定であることから、当該地のうち駐車場予定地部分を除いた建物予定地部分の約300平米について緊急の発掘調査を行うということで意見の一致をみた。発掘調査は以下の体制で行われた。

調査主体 高知市教育委員会

事務全般 依光桃子(高知市教育委員会社会教育課主事)

調査協力 財團法人高知県文化財团埋蔵文化財センター

現地調査 田上浩・田坂京子(埋蔵文化財センター主任調査員)

現地調査期間 1995(平成7)年9月11日~10月14日

第2節 遺跡の立地及び付近の遺跡

(1)立地環境

神田ムク入道遺跡の立地する高知市の平野部は、北部と南部を東西に延びる小起伏山系によって挟まれた地溝状の盆地である。この平野部の基盤地質は秩父累帯中帶と南帯に属しており、その上は沖積層により広く覆われている。この平野の堆積には、秩父累帯北帯に源を発する鏡川が多くの役割を担いつつ、さらに周囲の山々より流れ込む久万川、神田川、吉野川らの小河川がそれを部分的に補ったものとみられる。この進行について参考となる資料に、約6,300年前に降下した九州南西沖の鬼界カルデラから噴出したアカホヤ火山灰層がある。この層が、鏡川沖積扇頂部に近い高知市の「朝倉付近(海拔)0m付近、上町付近で-10m以上、最深部は(浦戸湾)深奥部の弘化台付近で-30m以上」とされており、鏡川沖積扇状地の基盤地形が急な傾斜で扇端部に至る状態を窺うことができる。

鏡川は多くの支流を集め、高知市鏡・川口付近より水量を増して南流後、蛇行しつつ深い谷を刻

み河岸段丘を発達させるが、同市尾立辺りから川幅を広げ扇状地を形成する。当遺跡周辺にもこの扇状地は広がっているが、典型的な扇状にはならず、東側により長く発達している。鏡川は現在堤防により流れを固定されているが、かつては低湿地を何度も河道を変えつつ様々に流路を形成していたものと思われ、神田地区周辺には蛇行河道跡らしい地形が幾筋ものこっている。

当遺跡は、市街地南部を東西に連なる宇津野山・烏帽子山・柏尾山を含む、鷲尾山脈の北側丘陵先端付近の微高地に立地している。その北方には鏡川の一支流神田川が東流しているが、その河道は、水源の高知市西部の小丘陵、針木の谷を発した後、現在の高知市朝倉、鴨部、神田地区を鏡川と同様一定せずに流れ、度々氾濫を繰り返したものとみられている。

(2)歴史的環境

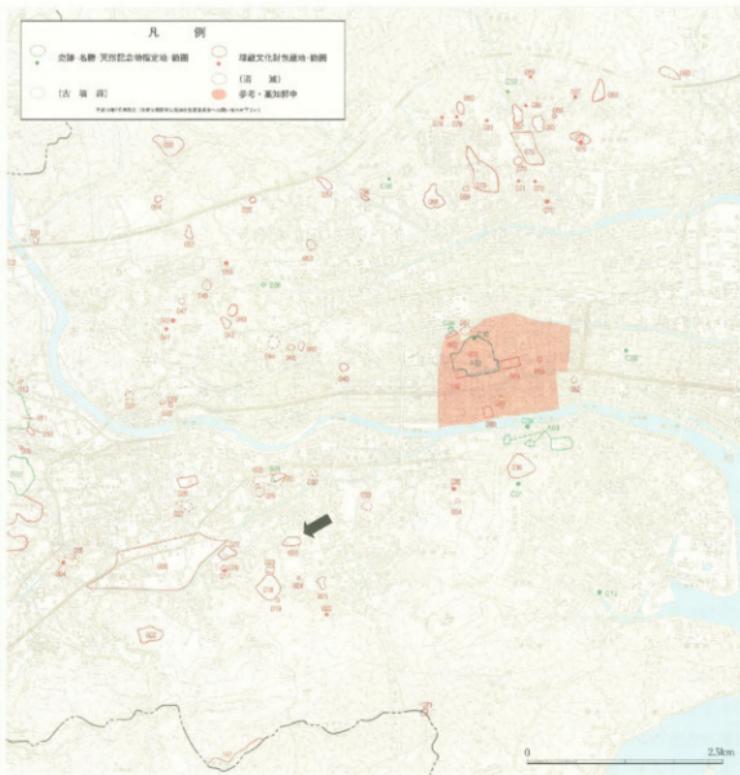
高知市内の縄文時代の遺跡としては、浦戸湾を望む小高い段丘上に立地するチドノ遺跡の地下5mから前期初頭の羽島下層式土器の深鉢が出土しており、また北部山系に属する正蓮寺不動堂前遺跡からは、中期初頭の船元I式土器や砾石錐、後・晚期の条痕土器や磨研土器が発見されているが、他にこれを遡る遺跡は未確認である。

神田ムク入道遺跡周辺の平野部には、神田川を隔てて約1km西に柳田遺跡があり、縄文時代後期の包含層から有文深鉢や外面条痕深鉢及びサヌカイトの大型剥片が出土している。また、晚期の包含層からは深鉢、浅鉢のほか磨製石斧、叩石、勾玉といった石器も出土している。柳田遺跡ではこの他にも弥生から古墳時代に至る土坑や流路の遺構、大量の土器をはじめ、木製の農具、建築材、琴柱、梯子さらに馬骨も発見されており、高知市内最古・最大級の遺跡として注目される。さらに当遺跡の約0.6km北の鴨部遺跡でも、縄文時代晚期から弥生後期までの土器・石器が出土し、市内平野部では初の堅穴式住居跡も検出されている。

古墳は近くの独立丘陵や山腹に散在しており、いずれも後期に属する舟岡山古墳、高座古墳、ウグルス山古墳などである。古代の遺跡としては、先にふれた鴨部遺跡で検出された掘立柱建物跡、柵列、溝跡に集落の存在が推定されるほか、この約750m西方の加治屋敷遺跡からは、須恵器高杯脚部が表採されている。当地には延喜式内社の都頭神社があり、これを祀る勢力の存在も想定される。また、鏡川右岸の朝倉、神田地区一帯には良好な条里地割りの遺存が指摘されており、律令制下の開発も広く行われたとみられる。

『和名類聚鈔』によると神田地区は「土佐郡」に属し、「神戸」郷にあたると考えられる。『続日本紀』神護慶雲二(768)年条には「土左国土左郡人神依田公名代等、一人賜姓賀茂」の記事があり、隣接する「鴨部」郷の地名からも、古代豪族「賀茂氏」との強い関わりが想定される。『東大寺東南院文書』によると、鴨部郷は天平勝宝四(752)年「造寺司牒」の封戸施入記事で「土左郡鴨部郷五十戸」とあり、東大寺の封戸として中央との関わりを有していた。後に、この「五十戸」は香美郡に移っており、久安四(1148)年に「土左国百畠 同代米二百六十四石六斗二升以色代如形辨之」とあるのは鴨部郷ではないものの、平安時代末期まで長きにわたり土左に東大寺封戸が存在したことは注目される。

中世の神田地区は、土佐一国の検地の結果を記した『長宗我部地検帳』によると、表題に「土佐



上図の範囲は、『国土本部発行の1/25000 地形図に第17 号高知市街地地図』(平成24年版)を基に
1/50000の縮尺に複製。〔実測地図原図 1/4万 (63.31 11-23) こうち (高知 7号 - 41)〕

番号	地名	種類	時代	番号	地名	種類	時代
001	内田山城跡	城壁跡	古墳	002	シルクの墓	古墳跡	神代・平安
003	伊佐山城跡	城壁跡	古墳	004	古井山遺跡	遺跡地	古墳・平安
005	佐野山城跡	城壁跡	古墳	006	白川遺跡	遺跡地	古墳・平安
007	ウラヌス山遺跡	(古墳)	古墳	008	仲間ふく入山遺跡	遺跡地	平安・鎌倉
009	西家里山城跡	城壁跡	古墳	009	西山城跡	城壁跡	中世
010	御所山城跡	城壁跡	古墳	010	御所山城跡	城壁跡	中世
011	日吉山城跡	城壁跡	古墳	011	日吉山城跡	城壁跡	中世
012	伊佐山城跡	城壁跡	古墳	012	伊佐山城跡	城壁跡	中世
013	伊佐山城跡	城壁跡	古墳	013	八幡山城跡	城壁跡	平安
014	伊佐山城跡	城壁跡	古墳	014	八幡山城跡	城壁跡	平安
015	伊佐山城跡	城壁跡	古墳	015	今村木戸跡	遺跡地	鎌倉
016	トヅキ山城跡	城壁跡	古墳	016	今内山・古内山	山城	平安
017	高知大城跡	城壁跡	古墳	017	高知城跡	城壁跡	中世
018	高知城跡	城壁跡	古墳	018	高知城跡	城壁跡	中世
019	高知城跡	城壁跡	古墳	019	高知城跡	城壁跡	中世
020	高知城跡	城壁跡	古墳	020	高知城跡	城壁跡	中世
021	高知城跡	城壁跡	古墳	021	内山城跡	城壁跡	中世
022	高知城跡	城壁跡	古墳	022	内山城跡	城壁跡	中世



図1 周辺の遺跡及び今回の調査対象地位置図

「郡神田之庄地検帳」〔天正拾六(1588)年成立〕とあり、領主は不明ながらそれ以前に莊園化されていたことを窺わせる。併せて『地検帳』の中には「マトコロヤシキ」(政所屋敷)の小字が記され、莊園支配者の居住地を思わせることもそれを裏付けている。また検地高を記した際の土地の所有者をみると、大半は「地頭分」で他は「八名分」とあり長宗我部氏家臣の給地で、両者は明白に二分されている。これを莊園制下の下地中分の名残りとみて、「八名分」が領家分にあたるとの見方もある(『高知市史 上巻』)。検地面積は神田庄全体で八十七町七段余となっている。宅地化の進んだ今、ここで当遺跡の所在地を『地検帳』に記載された土地と厳密に照合することは難しいが、当地及びその周辺とみられる地名をあげていくと、先にふれた「マトコロヤシキ」をはじめ、「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土みヤシキ」「シウケンヤシキ」など在地有力者の居宅を思わせるものが遺り、重要な地域であったことが推察される。

この『地検帳』を瀕る時代に当地に住んだ有力者やその支配の様子を具体的に知ることは、資料的な制約から難しい。中世城跡では北東約750mに石立城跡、北方約600mに神田旧城跡、南西約500mに神田南城跡、西北約1.2kmに鴨部城跡がある。これらに囲まれる地勢から、戦国時代に『土佐物語』など軍記物に語られるような激しい合戦場となったことも頷ける。城主も変遷を遂げたようで確実なことは不明である。ただ鏡川を隔てて約2.3km北西の杓田の地には、この地域を広く領した有力地頭・大黒氏が居り、朝倉・鴨部・神田といった高知市西部にも少なからぬ努力を及ぼしていたことが推測される。『佐伯文書』(『土佐国齋簡集拾遺』・所引)によると、南北朝期に大黒氏は北朝方に属し、大高坂松王丸ら南朝方と、今の高知城の場所にあたる大高坂城周辺を主戦場に戦闘を繰り返していたらしい。最終的に勝利し、引き続き有力守護・細川氏との関係を維持しつつ、当地を支配していたものと考えられる。

その他当地に勢力を及ぼしていたらしい有力土豪としては、仁淀川を隔てた高岡郡東部・蓮池を本拠地とした大平氏がある。「土左都鴨部社棟札」(『土佐国齋簡集』卷四所引)には「鴨部御社大槇那大平山城守國雄永正元年甲子九月十日」の文字があった。この史料から大平氏の支配の様子まで導きだせないが、永正元(1504)年頃に一定の勢力を当地に有していたことは認められよう。

しかしだ永七(1527)年には「朝倉庄池内天神社」棟札(『土佐国齋簡集拾遺』卷三所引)に、後に本山氏となる「八木実茂」の棟上げが記されており、この時期には四国山地の懷・嶺北地方から台頭してきた強力な本山氏の勢力が、高知市の平野部に拡大しつつあったことがみてとれる。そして後には土佐唯一の規模をもつ朝倉城を築き、浦戸湾以西の土佐中央部に広く支配を及ぼしている。よってこの城から3km圏にある在来の神田の土豪たちは戦って敗れたか、配下に属し、何とか生き延びる道を選んだものとみられる。

とはいえた本山氏の支配も長くは続かず、永禄三(1560)年には、長岡郡岡豊の地より興隆した長宗我部氏との、土佐中央部の霸権をかけての戦いが始まり、神田の地はその主戦場となった。その結果、長宗我部氏が勝利し、本山方に属していた神田の在地土豪達は再び退転を余儀なくされ、多くは滅び去ったようである。そして本山方に属し敗れた者たちの土地は接収され、『地検帳』にみる長宗我部家臣の所領と化したものとみられる。

このような激しい変転の中、先にあげた大黒氏は強かに生き残った一族である。元来、大黒氏は

長宗我部氏の古い一族との伝承があり、同じ先祖の「秦氏」を名乗ったこともある（『南路志』巻十六所引「杓田村本宮大明神棟札」）。大黒氏は一時、本山氏の支配を受けながらも、長宗我部氏の挙兵に伴い参軍し、本山方と戦っている（『土佐国藏簡集』巻九所引「大黒彈正忠寛 長宗我部元親書状」）。その英断と戦功により『地検帳』に記載されるような本貫の杓田をはじめ、鴨部・大高坂などの所領も無事安堵されている。これに伴い長宗我部氏の土佐平定は大いに進展するが、同時に自らの家臣を占領地に配しての在地有力者の牽制も忘れてはいない。新たに入城した神田城主の細川宗桃、石立城主の吉田三郎左衛門などの厳しい監視下に、大黒氏や神田の在地武士たちも置かれたのであった。

長宗我部氏は土佐一国の統一後、四国全土をほぼ平定しているが、専門化された秀吉軍の来襲にはあっけなく敗れ去り、土佐のみを安堵された。そしてこの後、秀吉の様々な要請に応えつつ新たな時代の領国経営に力を注ぐ必要があった。その一つが検地であり、また天正十六（1588年）と伝えられる、岡豊城から大高坂城への移転とそれに伴う本格的な城下町建設であった。これは兵農分離のための家臣団の集住を目的としており、神田からは「吉野殿」と称される有力者が移住したこと『大高坂郷地検帳』が伝えている。また新たな都市の建設に必要な商業地・市場町の移転もすすめており、「朝倉市」が石立村に広い敷地を構え開かれている。しかし大高坂城下町建設は不調に終わり、僅か二年余りで中断され、太平洋に臨む浦戸への再移転となる。治水の困難さが要因とはされるが、やはり在地有力者たちの強制移住や城下町建設への多大な負担から予想以上の抵抗にあり、困難の打開が図られた結果ではなかろうか。そして当面の中心地として、交易に有利でまた秀吉からの水軍派遣要請にも迅速に応じられる浦戸を選択したものと考えられよう。結局長宗我部氏はこの地で終焉を迎へ、新たな支配者・山内氏の入国となる。

このような時代の流れのなか、中世の上佐で注目すべきは、海上交通の発達とそれに伴う経済の進展である。15世紀に始まる勘合貿易のルートは、当初兵庫から瀬戸内海を経由して関門海峡から東シナ海を渡り、明に向かっていた。しかし応仁の乱以降、貿易船を出していた細川氏が、瀬戸内海西部を制する大内氏と対立するようになると、新たな海路の開拓に迫られた。その結果、細川氏は自らの勢力圏である摂津から四国東部を経て、土佐湾に至り、浦戸から日向の油津を通り、九州南部から東シナ海を渡るルートを利用するようになった。この結果、大陸の産物を扱う堺商人との取引も増え、上佐の人々も少なからず関与し同船商人として各地に渡ったと推測される。その傍証に、日本最古の海事法として著名な『廻船大法』の奥書にある「土佐浦戸篠原孫左衛門」の名があげられる。兵庫や薩摩坊津の商人と共にその制定者として記された事実は、貞応二（1223年）という『廻船大法』の成立年代や連名者の実在性に疑問は残るとしても、条文が極めて具体性に富むことから全くの虚構とは断じきれない。やはり何らかの歴史的事実や伝承に基づき、遙くとも近世初頭には中世以来の海の慣習法をまとめて成文化されたとみられ、かつて浦戸商人の果した重要な役割を垣間見せているようである。なお神田地区は神田川・鏡川を利用して浦戸湾に出ると、浦戸の外港には至便であり、神田の人々もその通商圈にあったものとみられる。そのことは当遺跡から少なからず出土する中国の同安窯、龍泉窯からの輸入陶磁器からも窺えるであろう。

山内氏の入国後、新たな政治拠点となった大高坂では新しい城郭の建設が行われ、神田からも石

材が運ばれた。そして慶長八(1603)年新藩主・山内一豊の入城後、高知城下町は土佐藩の政治・経済の中心地として発展する。長宗我部氏を支えていた一領具足とよばれる在地の武士たちの多くは農民に戻り、藩の経済を支えることになる。またその一部は庄屋となり、あるいは郷士となって各地で一定の支配体制に組み入れられていった。

神田村は元禄の『地払帳』によると総地高は一千三四石余で、うち本田高八七八石余・新田高一五五石余である。本田は蔵入地が百六石余で、他は桐間将監ら22名の知行地であり、新田は貢物地七二石余、残りは久万彦兵衛及び1名の役地と三橋源五良他2名の領地となっている。寛保の『郷村帳』には家数一二九、人数六三八とある。なお当地から南西に道をとり標高231mの白土峠を越えると、中世には隆盛を誇った觀正寺(観音正寺)跡を経て、吾南平野に至る古道が通じており、かつては城下町と豊かな農業地帯・現春野町とを結ぶ幹道となっていた。

参考文献

- 『日本の地質8—四国地方』(日本の地質 四国地方編集委員会編 1991年)
『高知県の地名』(日本歴史地名大系40 平凡社 1983年)
『高知市史 上巻』(高知市史編纂委員会編 1958年)
『高知県史 古代中世編』(高知県編 1971年)
『高知県の歴史』(荻慎一郎・森公章・市村高男・下村公彦・田村安興 山川出版2001年)
大脇保彦「土佐の条里—その復元再考と補説」(『高知の研究 第2巻』 清文堂 1982年)
『柳田遺跡』高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第17集(高知県埋蔵文化財センター 1994年)
『鶴部遺跡』高知市文化財調査報告書第23集(高知市教育委員会 2002年)

第3節 調査の方法

神田ムク入道遺跡においては、本発掘調査には至らなかったものの、同じ年度に今時対象地の北隣の土地においても試掘調査を行った。出土遺物は少ないが、今時対象地とは傾向の異なる遺物が出土しているため、併せて報告する。

(1) 試掘調査1(今時対象地)

試掘調査においては、 $3\text{ m} \times 4\text{ m}$ もしくは $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ の大きさの試掘坑(テスティット=TP)を対象地の4箇所に設定して調査を行った。調査においては主に機械力を用いて掘削を行い、遺構を検出したところで人力に切り替えた。4箇所の試掘坑のうち、TP-3については本発掘調査対象地と重なっている。

(2) 試掘調査2(今時対象地の北隣)

同年12月11日～15日に今時対象地の北隣の土地において、宅地開発に伴う事前調査として試掘調査を行った。調査にあたっては、 $3 \times 3\text{ m} \sim 6 \times 6\text{ m}$ の試掘坑を対象地の4隅と中央部に設定した。

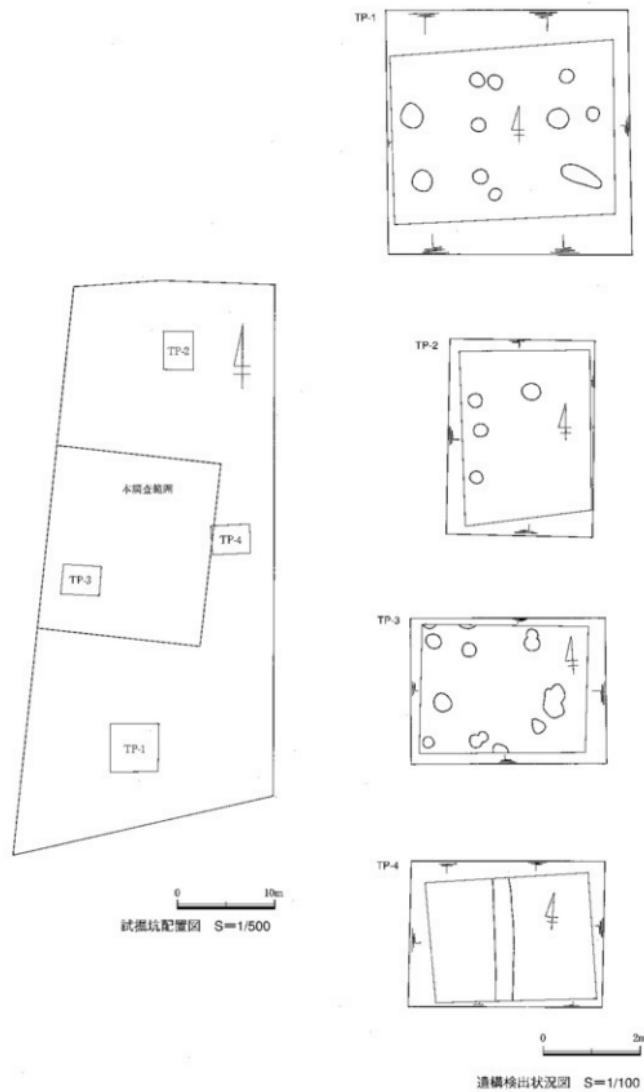


図2 試掘調査1 試掘坑配置図及び造構検出状況図

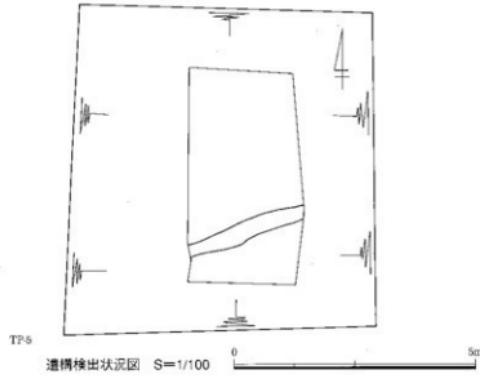
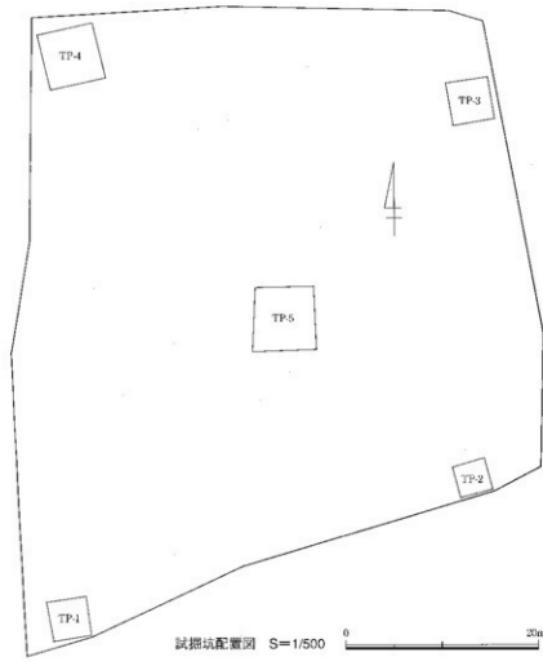


図3 試掘調査2 試掘坑配置図及び遺構検出状況図

対象地の大部分にはすでに厚さ2m程度の盛土がされており、4隅のTP-1～TP-4迄はもとの水田表土の露出している部分からの掘削であるため、場所によって試掘坑の大きさに差が出来ている。また、中央部のTP-5については盛土の上からの掘削となっており、表面の広さに比べて実際に調査できた面積はかなり小さくなっている。

(3)本発掘調査

本調査については建物の予定地を対象にした関係で、形状がほぼ長方形であったため、その形状に合わせて任意の座標を設定し、その座標に基づいて4m間隔のグリッドを設置して、遺構・遺物の記録を行った。ただし、本報告書内では磁北に合わせた座標に変換して、平面図・文章等の記述・表記を行っている。

調査の手順については、基本的には遺構検出面までは機械力を利用して掘削した。その後、人力を用いて遺構・包含層の掘削、遺物の取り上げ等を行った。

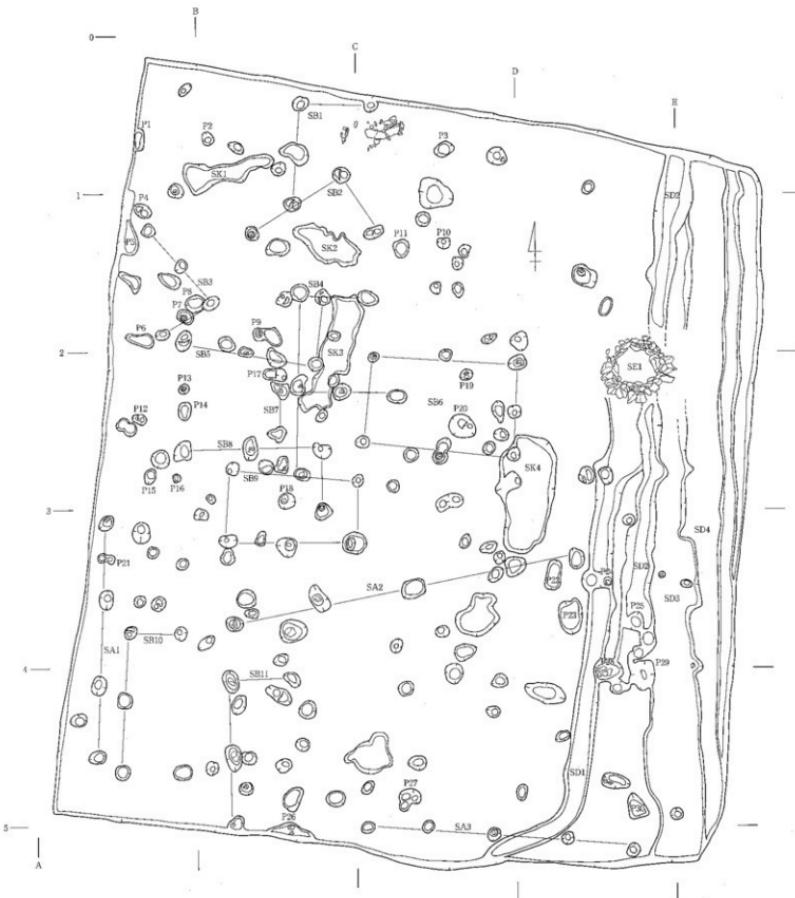


図4 本調査検出造構平面図 ($S=1/100$)

第2章 調査の成果

第1節 基本層序

対象地付近は浦戸湾にそそぐ鏡川の三角州の南辺部にあたり、亜円碟が多く混じり比較的よくしまった土層が主体をなしている。遺物包含層は、最上層の水田耕作土及び床土層がおわったすぐ下の層から始まっているため、最上部は後世の削平を受けている可能性が高い。遺物包含層は暗褐色粘質土であり亜円碟を比較的多く含み、シルト・砂を若干含む。

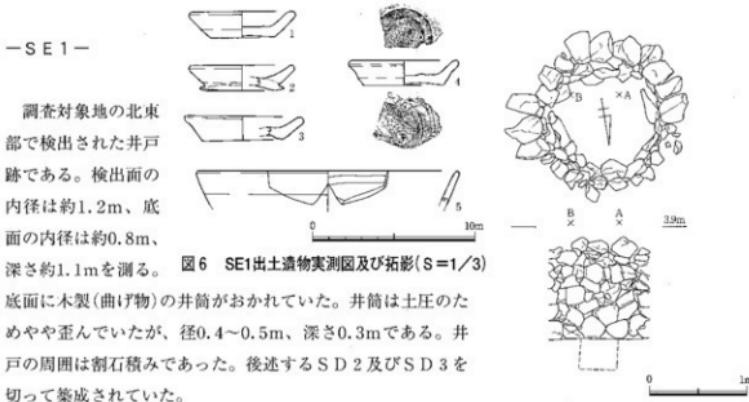
表土下0.5m程度より下層には、洪水碟層と見られる砂碟層が存在しており、試掘調査の際に最大で2.5mの深さまで掘削したが、同様の堆積が続いている。



図5 東壁土層断面図 ($S=1/100$)

第2節 検出遺構と出土遺物

(1)井戸跡



—SE1—
調査対象地の北東部で検出された井戸跡である。検出面の内径は約1.2m、底面の内径は約0.8m、深さ約1.1mを測る。底面に木製(曲げ物)の井筒がおかれていた。井筒は土圧のためにやや歪んでいたが、径0.4~0.5m、深さ0.3mである。井戸の周囲は割石積みであった。後述するSD2及びSD3を切って築成されていた。

出土遺物のうち図化したものは5点である。1~4は上部

図7 SE1平面図・断面図 ($S=1/50$)

器の小皿であり、底部は回転糸切り、しっかりとした底部から直線的な短い口縁が上外方に開き、端部は丸く収める。口径は6.1~6.9cmの範囲におさまり、やや小さめである。5は青磁碗の口縁部小片で、器壁は薄く、釉薬の厚みも薄い。端部内面に二条の界線を施す。

(2) 挖立柱建物跡

合計で11棟の建物跡を検出した。全体的に規模は小さめである。

-SB1-

調査対象地の北端やや西よりで検出した梁間1間(1.8m)・桁行2間(2.6m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.8m、桁行1.3mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN 0° EWである。

図化した出土遺物は2点で、口径は8.4cmと大きいが、口縁の非常に短い土師器小皿(6)と、口径が12.9cmと、やや小さめの土師器壺(7)である。

-SB2-

調査対象地の北西部、SB1の南側で検出した梁間1間(1.7m)・桁行2間(2.8m)の建物である。平均の柱間寸法は梁間1.7m、桁行1.4mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN 56° Eである。

図化した出土遺物は2点で、口径が7.6cmの土師器小皿(8)と、口径が14.5cmとやや大きめで微かな円盤状の高台を持ち、端反りの土師器壺(9)である。

-SB3-

調査対象地の西端北より、SB2の西側で検出した梁間1間(1.6m)・桁行2間(2.4m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.6m、桁行1.2mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN 36° Wである。

図化した出土遺物は2点で、口径が7.7cmの土師器小

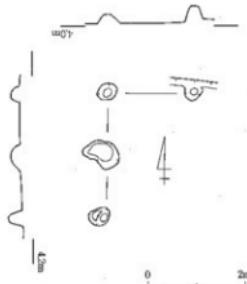


図8 SB1平面図・断面図(S=1/100)

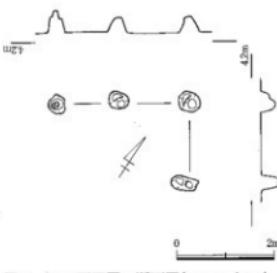


図9 SB2平面図・断面図(S=1/100)

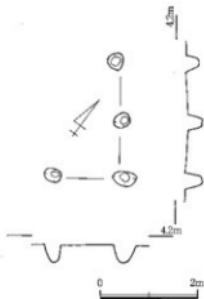


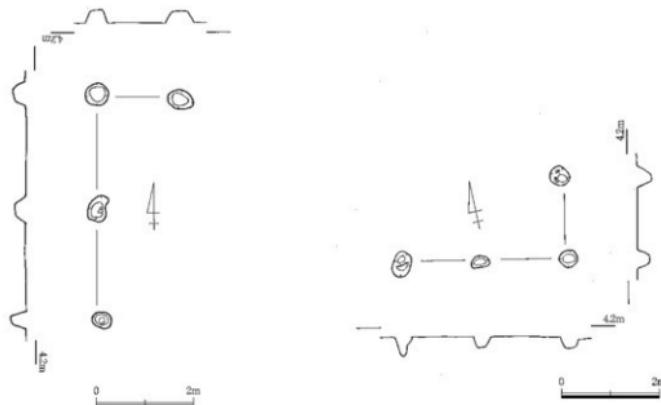
図10 SB3平面図・断面図(S=1/100)

図(10)と、内縁気味に体部が立ち上がる土師器壺の底部(11)である。

- S B 4 -

調査対象地の中央やや北東寄り、S B 2 の南側で検出した梁間 1 間(1.7m)・桁行 2 間(4.6m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.7m、桁行2.3mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN1° Eである。

図化した遺物は12の土師器小皿 1 点のみである。



- S B 5 -

調査対象地の中央やや北東寄り、S B 4 と重なって検出した梁間 1 間(1.6m)・桁行 2 間(3.4m)の東西棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.6m、桁行1.7mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN79° Wである。出土遺物に図化できるものはなかった。

- S B 6 -

S B 4 の東側、対象地のほぼ中央部で検出した梁間 2 間(2.3m)・桁行 2 間(3.7m)の東

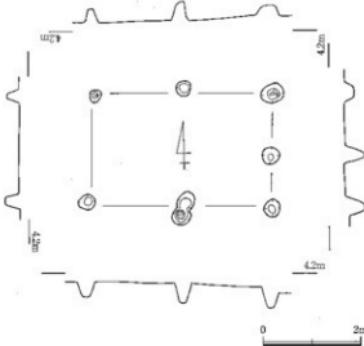


図13 SB6平面図・断面図(S=1/100)

西棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.15m、桁行1.65mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN87°Wである。出土遺物に図化できるものはなかった。

—SB7—

対象地のはば中央、SB4及びSB6と重なって検出した梁間1間(1.2m)・桁行2間(3.0m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.2m、桁行1.5mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN88°Eである。出土遺物に図化できるものはなかった。

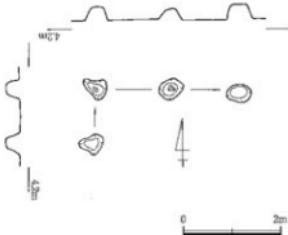


図14 SB7平面図・断面図(S=1/100)

—SB8—

調査対象地のはば中央、SB7の南側でSB4と重なって検出した梁間1間(1.5m)・桁行2間(3.4m)の東西棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.5m、桁行1.7mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN88°Eである。出土遺物に図化できるものはなかった。

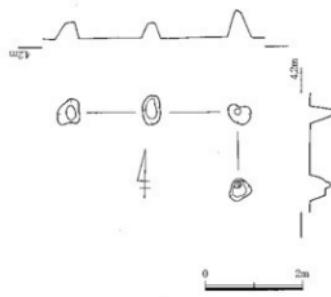


図15 SB8平面図・断面図(S=1/100)

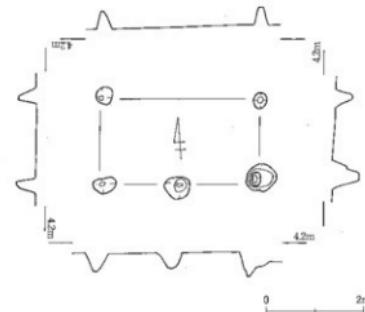


図16 SB9平面図・断面図(S=1/100)

—SB9—

調査対象地のはば中央、SB4及びSB8と重なって検出した梁間1間(1.7m)・桁行2間(3.2m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.7m、桁行1.6mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN85°Wである。

図化した出土遺物は、外面に鎬蓮弁文の入った13の龍泉窯系青磁碗の体部片1点のみである。

-SB10-

調査対象地の東南部で検出した梁間1間(1.3m)・桁行2間(3.6m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.3m、桁行1.8mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN 1°Eである。

図化した出土遺物は4点である。14の土師器小皿は口径が7.4cmで、口縁が内彎して開く。15の土師器坏底部片は立ち上がりの開きが大きい。16は口径が8.8cmと小さいため、瓦器皿に分類したが、他の皿に比べて器高が高く、薄手で、椀に近い作りである。17は肥前系と見られる陶器椀で、見込み蛇の日袖ハギ、削りだし高台を持つ。

-SB11-

調査対象地の南端やや西より、SB10の東側で検出した梁間1間(1.5m)・桁行2間(3.8m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.5m、桁行1.9mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN 0°EWである。

図化した出土遺物は6点である。18~20は土師器小皿で、口径は6.9~7.8cmの範囲であるが、20は焼成時の歪みが大きい。19は他の小皿に比べて口縁が長めで、広く開く。21~23は土師器坏で、口径は13.7~14.9cmの範囲である。いずれも口縁はほぼ直線的に開く。23は他よりやや体部の開きが大きい。

(3)構列

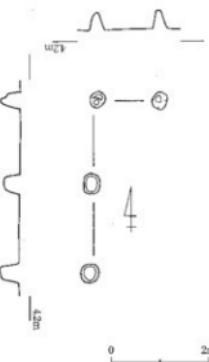


図17 SB10平面図・断面図
(S=1/100)

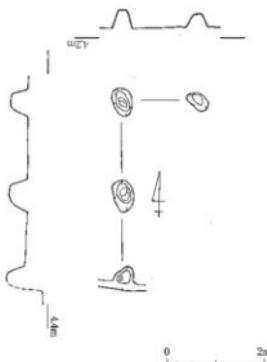


図18 SB11平面図・断面図(S=1/100)

-SA1-

調査対象地の南半部西端で検出された南北方向の構列である。検出された柱穴は計4個で、平均の柱間寸法は2.0mを測る。軸線方向の偏角はN5°Eである。

図化した出土遺物は1点のみで、口径が7.7cmで口縁が内彎して開く土師器小皿(24)である。

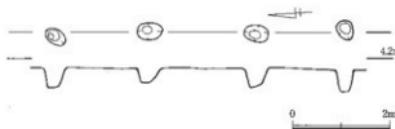


図19 SA1平面図・断面図(S=1/100)

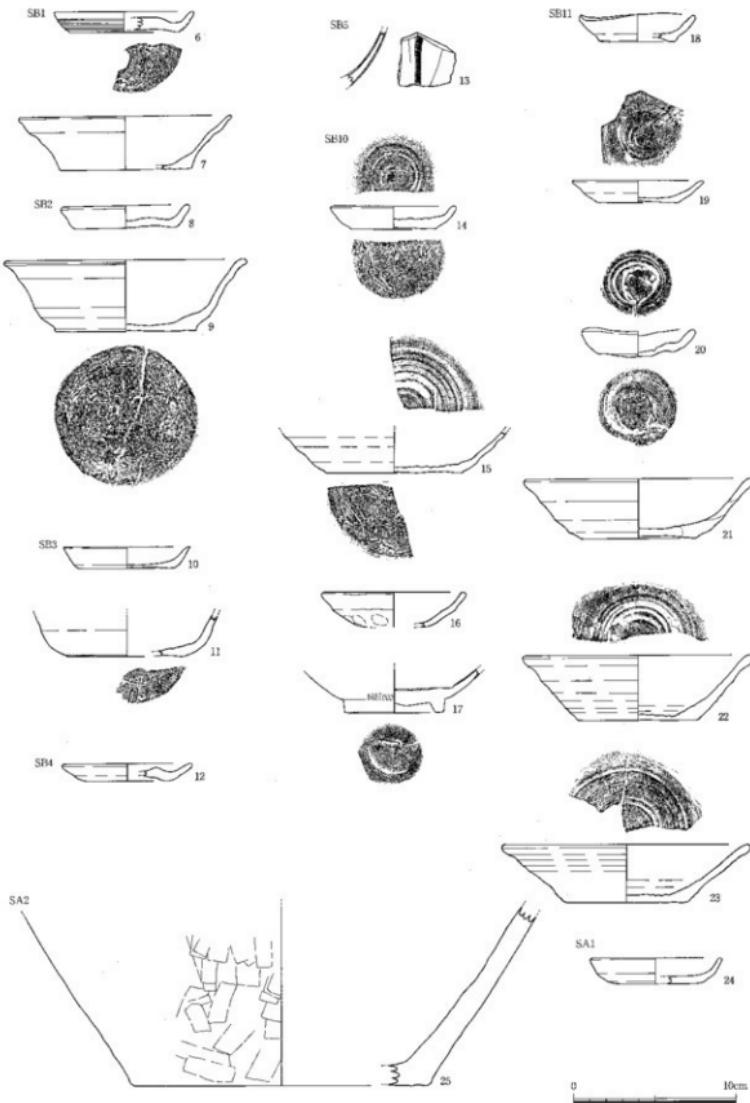


図20 SB・SA出土遺物実測図及び拓影 (S=1/3)

—SA 2—

調査対象地の中央やや南寄りで検出された東西方向の構列である。検出された柱穴は計5個で、平均の柱間寸法は1.6mを測る。軸線方向の偏角はN79°Eである。

図化した出土遺物は1点のみで、内面全体に自然釉のかかった陶器壺の底部片(25)で、常滑産と見られる。

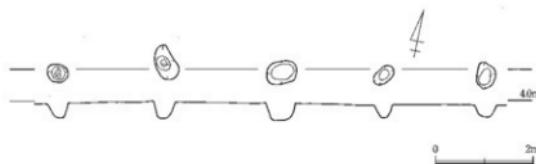


図21 SA2平面図・断面図(S=1/100)

—SA 3—

調査対象地の西半部南端で検出された東西方向の構列である。検出された柱穴は計5個で、平均の柱間寸法は1.7mを測る。軸線方向の偏角はN84°Wである。出土遺物に図化できるものはなかった。

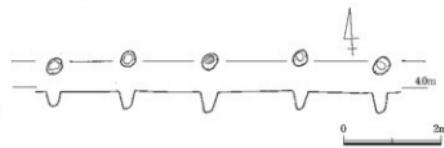


図22 SA3平面図・断面図(S=1/100)

(4)土坑

—SK 1—

調査対象地の北西隅、SB 1の西側で検出した不整形の土坑で、最大径は2.3m、長軸方向の磁北からの偏角はN78°Eを測る。

図化した出土遺物は1点のみで、小さめの土師器壺底部片(26)である。

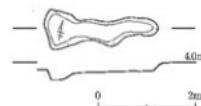


図23 SK1平面図・断面図(S=1/100)

-SK 2-

調査対象地の北西部、SB 2と重なって検出した不整形の土坑で、最大径は1.8m、長軸方向の磁北からの偏角はN67°Wを測る。

図化した出土遺物は27の1点のみである。口径が14.8cmで、底部に低い円盤状高台をもつ土師器壺である。



図24 SK2平面図・断面図
(S=1/100)

-SK 3-

調査対象地の中央やや北東、SB 4と重なって検出した不整形の土坑で、最大径は2.8m、長軸方向の磁北からの偏角はN23°Eを測る。

図化した出土遺物は13点で、全て土師器である。28~35は皿で、口径は、最も小さい29が7.2cm、最も大きい34が7.9cmを測る。器高は最も低い31が1.1cm、最も高い29が1.7cmを測る。また、28は口縁が内彎して立ち上がり、器壁の厚みがほぼ均一なタイプ、35は口縁部の器壁を薄く仕上げるタイプである。36~40は壺で、口径は、最も小さい39が12.4cm、最も大きい40が14.0cmを測る。口縁は何れも外反、もしくは外反気味である。また、37と49は器高が口縁の1/4以下と低めである。

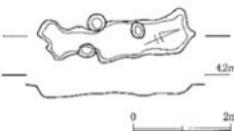


図25 SK3平面図・断面図(S=1/100)

-SK 4-

調査対象地の中央やや西より、SB 6と重なって検出した不整形の土坑で、最大径は3.1m、長軸方向の磁北からの偏角はN6°Eを測る。

図化した出土遺物は10点である。土師器は41と42の皿のみで、口径はやや大きく(8.7及び8.9cm)、42には低い円盤状高台がつく。43は和泉系瓦器碗で、高台がやや退化するものの、口径は16.5cmと比較的大きい。炭素の吸着は不十分で、在地産の可能性も考慮に入れる必要がある。44は龍泉窯系の鎬蓮弁文を持つ青磁碗である。45~48は白磁で、45と46は玉縁の口縁を持つ碗で、47の碗と48の皿は口禿の口縁を持ち、48は内面に一条の界線を巡らし、外端下端は無釉である。49と50は須恵器で、49は古墳時代末の壺身、50は東播系と見られる須恵器鉢であるが、やや作りは稚であり、在地産の可能性もある。

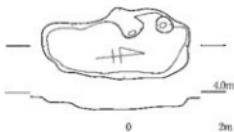


図26 SK4平面図・断面図(S=1/100)

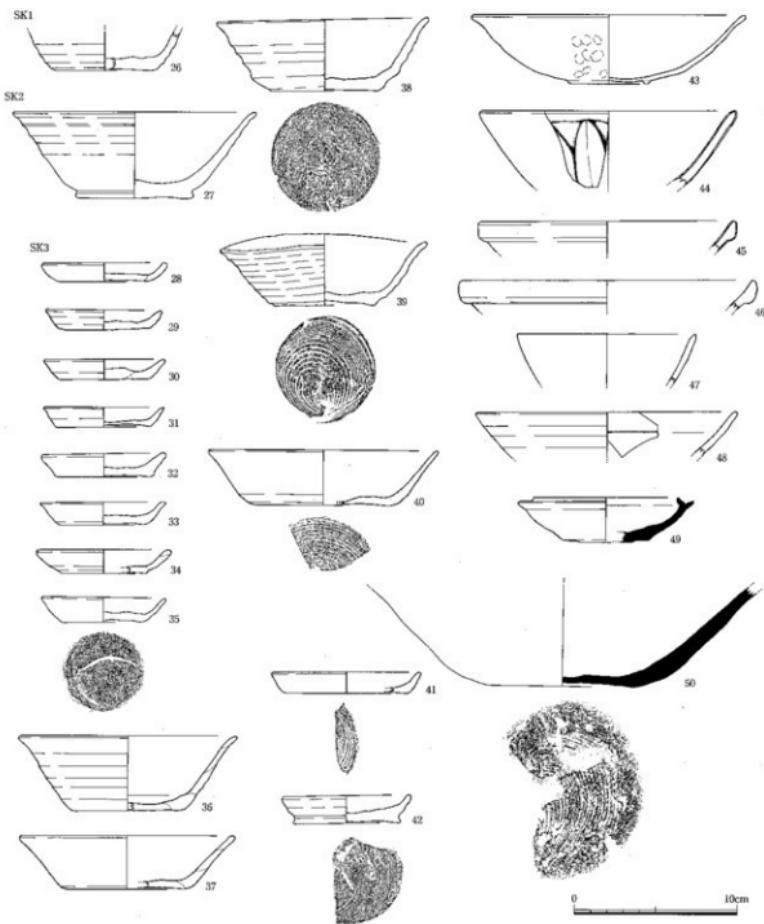


図27 SK出土遺物実測図及び拓影 ($S=1/3$)

(5) ピット出土遺物

今回の調査では多くのピットを検出したが、建物跡や構列に含まれるピット以外からも多くの遺物が出土した。ここでは、それらについてまとめて述べる。なお、遺物は殆どのピットから出土しているが、図化できた遺物が出土したのは以下のP 1～P 30までの30箇所である。計測表を以下に

示す。

-ピット計測表-

番号	位置	最大幅(cm)	底出唇高(m)	最深唇高(m)	底さ(cm)	番号	位置	最大幅(cm)	底出唇高(m)	最深唇高(m)	底さ(cm)
P1	A0	48	3.98	3.84	14	P16	A2	24	4.03	3.79	24
P2	B0	38	4.01	3.74	27	P17	B2	64	3.93	3.56	37
P3	C0	45	3.95	3.64	31	P18	B2	41	3.99	3.61	38
P4	A1	48	4.05	3.67	38	P19	C2	32	3.85	3.59	26
P5	A1	94	4.05	3.76	29	P20	C2	71	3.95	3.64	31
P6	A1	69	4.02	3.71	30	P21	A3	44	4.01	3.62	39
P7	A1	59	4.03	3.71	32	P22	D3	72	3.93	3.65	28
P8	A1	51	4.02	3.77	25	P23	D3	96	3.92	3.64	28
P9	B1	79	4.02	3.86	16	P24	D3	40	3.81	3.57	24
P10	C1	37	3.96	3.60	36	P25	D3	54	3.70	3.27	43
P11	C1	40	3.91	3.70	21	P26	B4	114	3.93	3.79	14
P12	A2	36	4.02	3.64	38	P27	C4	63	3.95	3.63	32
P13	A2	27	4.01	3.70	31	P28	D4	72	3.75	3.41	34
P14	A2	48	4.02	3.70	32	P29	D4	80	3.74	3.35	39
P15	A2	38	4.02	3.76	26	P30	D4	69	3.89	3.65	24

- ・ P 1 口禿の口縁を持つ小振りの白磁碗(51)が出土した。
- ・ P 2 古代の須恵器坏身の底部(52)が出土した。断面逆台形の輪高台を貼付する。
- ・ P 3 口径が7.2~7.4cmの土師器小皿(53~55)が出土した。53、54の口縁は若干外反し細くまとめる。その他にやや大きめの土師器坏の底部(56)も出土した。
- ・ P 4 口径が6.9~7.0cmと小さめで、底部の厚い土師器小皿(57、58)が出土した。
- ・ P 5 口径が8.4cm(59)及び7.4cm(60)の土師器小皿が出土した。59は底部を円盤状高台状に成型する。
- ・ P 6 口径が6.9~7.3まで(61~63)と、やや大きめの8.0cm(64)の土師器小皿が出土した。うちで61は口縁が内脣気味に立ち上がるタイプである。その他に、やや小振りの土師器坏(65、66)が出土した。65はやや低いが円盤状の高台を持つ。
- ・ P 7 白磁碗の底部(67)が出土した。下部まで施釉し、一部は高台上部にまで釉薬がかかる。

- ・ P 8 白磁碗の底部(68)が出土した。高台径は小さく、高い。残存部の外面には施釉していない。
- ・ P 9 土師器小皿(69)が出土した。口径は7.6cmで比較的口縁部が長く薄い。
- ・ P 10 口径が11.0cmと小振りな坏(70)が出土した。
- ・ P 11 鎏蓮弁文を施した龍泉窯系の青磁碗(71)が出土した。
- ・ P 12 見込みに櫛描き文を施した同安窯系の青磁皿(72)が出土した。
- ・ P 13 鎏蓮弁文を施した龍泉窯系の青磁碗(73)が出土した。
- ・ P 14 土師器坏(74)が出土した。口径は10.2cmと小さい。
- ・ P 15 土師器小皿(75)が出土した。口径は7.9cmで、軽く内彎し、薄い。
- ・ P 16 土師器坏(76)が出土した。口径が大きく(14.7cm)、器高が低い(3.1cm)。皿に近い形態である。
- ・ P 17 口径が6.5cmと小さく、口縁の器肉が薄い土師器小皿(77)、及び肥前産と見られる石鍋(78)が出土した。石鍋については、口縁部破損後再加工したと見られる工具痕があり、皿として再利用した可能性がある。
- ・ P 18 古代の須恵器鉢(79)が出土した。器壁は薄く、口縁は丸く仕上げる。
- ・ P 19 口径が11.4cmと小さめの土師器坏(80)、及び瓦質三足釜(81)が出土した。足釜の胴部最大径は下方寄りで、口縁は内傾する。脚の最下部は欠損する。内面横ハケ、外面に鏽を貼付する。
- ・ P 20 木鍤(82)が出土した。表面にヒビ割れが入り、風化が進む。
- ・ P 21 土師器小皿(83)が出土した。口径は7.2cmである。
- ・ P 22 口径7.7cmの土師器小皿(84)、及び口径7.5cmの瓦器小皿(85)が出土した。瓦器の底部は内彎し、口縁の横ナデはあまり強く見られない。炭素の吸着はあまりよくない。

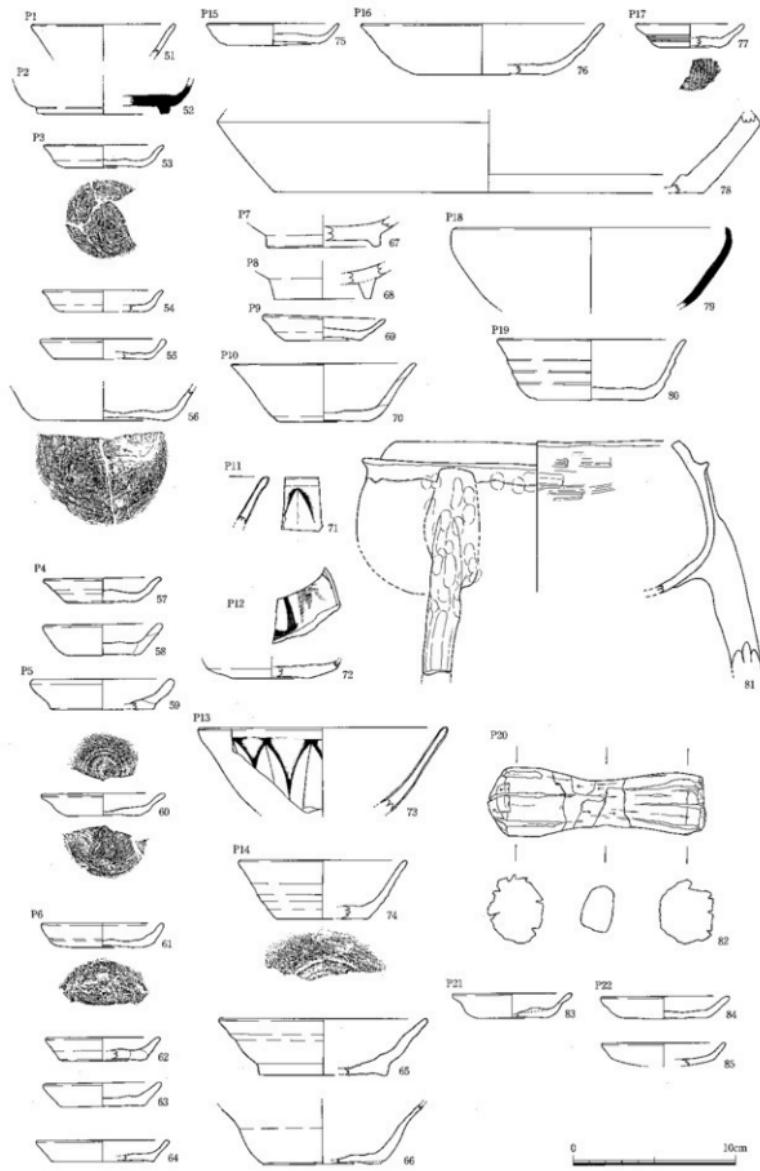


図28 P1~P22出土遺物実測図及び拓影 (S=1/3)

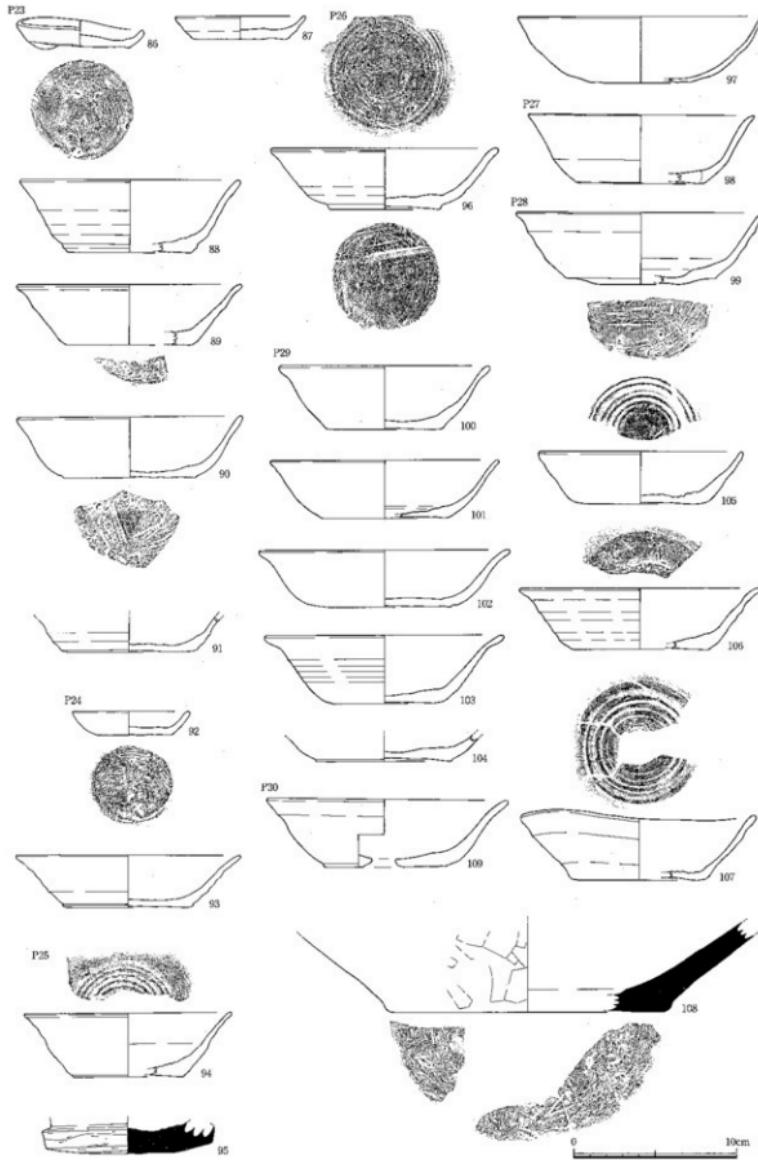


図29 P23～P30出土遺物実測図及び拓影 (S=1/3)

- ・ P23 土師器小皿(86、87)及び、土師器坏(88~91)が出土した。小皿の口径は7.6cm及び7.9cmで、底部に比べて口縁の器壁が薄いタイプである。坏は口径が13.3cm~13.8cmで僅かに端反り気味である。
- ・ P24 口径が7.1cmの土師器小皿(92)、及び口径が13.8cm、器高が3.2cmと非常に低い土師器坏(93)が出土した。
- ・ P25 口径が12.7cmで口縁端部を薄く仕上げた土師器坏(94)、及び古代の擂鉢底部と見られる須恵器片(95)が出土した。須恵器は底部のみほぼ完全に残存し、体部は欠損する。
- ・ P26 器高が3.8cmと低く、円盤状高台を持つ土師器坏(96)、及び和泉系瓦器椀(97)が出土した。瓦器椀については炭素の吸着が不充分であり、暗文も見られないため、在地産の可能性がある。口径が比較的大きい(14.9cm)が高台は観察の限りでは剥落した痕跡は見られず退化したものと見られる。
- ・ P27 口径が13.6cm、器高が4.2cmの土師器坏(98)が出土した。
- ・ P28 口径が15.2cmと大きめの土師器坏(99)が出土した。口縁端部は若干端反り気味である。
- ・ P29 土師器坏(100~107)が出土した。口径は12.4cm~15.1cm、器高は3.2cm~4.2cmである。底部のみ出土の104、及び最も小さい105を除き、口縁は外反するものが多い。また、もっとも口径の大きい102は器高が低く(3.5cm)皿に近い形態である。その他に須恵器壺底部(108)が出土した。成型・焼成ともしっかりとしており、搬入品と見られる。外面は底部をしっかりと成形するが、内面では体部との境界がはっきりしない。見込み部に凹みを形成する。底径は16.8cmと通常の東播系鉢に比べて大きいため壺に分類したが、底部のみの出土であるため、それ以外の器種である可能性もある。
- ・ P30 つぶれた円盤状高台を持つ土師器坏(109)が出土した。内彎して立ち上がり口縁は外反する。口径は14.6cm、器高は4.3cmである。

(6)溝跡

今回の調査では計4条の溝跡を検出した。いずれも南北方向の溝跡で、調査対象地の東側に集中しており、ほぼ並行して検出された。

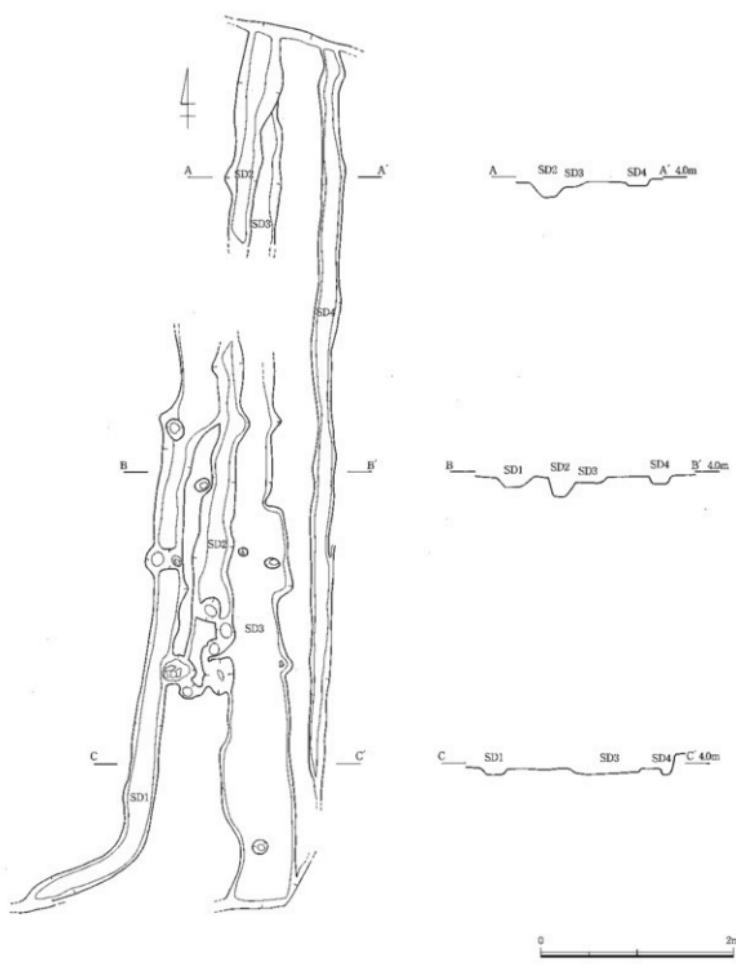


図30 SD平面図・断面図 ($S=1/100$)

S E 1 の南側から調査対象地の南端にかけて検出した南北方向の溝跡である。中軸線の方向は N 8° E であり、対象地南端付近で西方に曲がり、N 68° E の角度で対象地外へ続いている。確認できた長さは12.5mである。

図化した出土遺物は110～130までの21点である。

110～122は土師器小皿である。口径は7.3～8.5cmの範囲が11点で、例外的な大きさの6.5cm(120)と9.5cm(119)が1点ずつ存在する。110～113は底部と口縁部の境界が明瞭で口縁を薄く作るタイプ、114～116は底部と口縁部の境界は比較的明瞭だが腰部が丸みを持つタイプ、117は口縁端部が外反するタイプ、118と119は口縁端部がすぼまるタイプ、120～122は口縁が内彎するタイプである。

123、124は土師器壺の底部である。底径は9.0及び10.2cmと比較的大きく、口径は15cm内外になるものと思われる。

125の瓦器椀は口径が15.0cmだが、器高が3.6cmと低い。高台は比較的しっかりしている。炭素の吸着が不充分で在地産の可能性もある。126は瓦質の足釜で口縁は内傾、外面に鉤、脚を貼付する。

127～130は須恵器で、127、128は古墳時代末の坏身で127は立ち上がりが比較的長い。129、130は中世の束播系鉢である。129は腰部が若干内彎して立ち上がり、130は口縁端部を少し上下に拡張する。

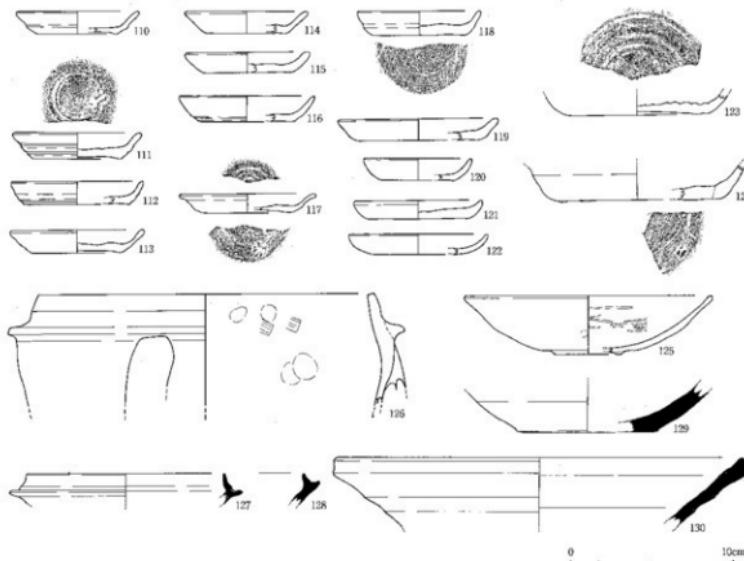


図31 SD1出土遺物実測図及び拓影 (S=1/3)

- S D 2 -

調査対象地の南東部から北端にかけて、S D 1 のすぐ東側で検出した南北方向の溝跡である。途中 S E 1 によって切られ、北端は対象地外へ続いている。中軸線の方向は N5° E であり、確認できた長さは 12.5m である。

図化した出土遺物は 131～164 までの 34 点である。連続した遺構であるが、途中を S E 1 によって切られているため、S E 1 を境にして北半部と南半部に分けて記述する。

・ S D 2 南半部の遺物

131～145 は土師器小皿である。口径は 6.3～8.4cm と範囲が広い。概ね底部に比べて口縁部の器壁は薄く、端部ほど薄くなる傾向にある。131～135 は底部を高台状に形成するタイプ、136～143 は高台の形成は見られないが、底部と口縁部との境界が比較的明瞭なタイプで口縁は概ね内彎して開く。144、145 は器高が非常に低いタイプである。

146～150 は土師器壺で、底径は 7.8～9.4cm と範囲が広い。口縁部まで残存しているのは 2 個体で、そのうち 149 は口縁部の器壁を薄く作り、口径は 13.7cm である。端反りの 150 は口径が 15.3cm と大きいが器高が 3.6cm と非常に低く皿に近い形態である。

151～153 は瓦器である。151 の皿は器壁の厚みが均一で、底部から口縁にかけて内彎して開く。見込みにジグザグの暗文が残る。152、153 の碗は全体の内面に横方向を基調とする暗文が残る。口径が 11.4cm と小振りの 152 は炭素の吸着が大変に良好で、逆に 153 は吸着が非常に悪い。

154 は須恵器鉢で内外面ともに腰部は丸みをもって立ち上がる。

・ S D 2 北半部の遺物

155 は土師器小皿である。口径は 8.4cm で、底部と口縁部とで厚みがあまり変わらず、丸みを持って立ち上がるタイプである。

156～160 は土師器壺で、そのうち 156～158 の口径は 11.6～14.0cm の範囲で何れも若干端反り気味である。また 159、160 は口径がそれぞれ 15.2cm 及び 14.8cm と大きいが、器高が低く皿に近い形態で、特に 160 は口径の 1/5 以下の 2.9cm しかない。何れも口縁部を薄く仕上げた端反りの器形である。

161 は龍泉窯系の青磁碗で、内面に櫛描き文及びヘラ描文を施す。162 は同安窯系の青磁碗で、内面にはジグザグ、外面は縱方向の櫛描文を施す。

163 は和泉系瓦器碗で内側面に円周方向、見込みに平行な暗文が残る。高台は剥落、口径 14.7cm、器高 3.9cm である。164 は瓦質羽釜で、口縁は内傾する。調整は丁寧であり、胎土から見ても鍛入品であろう。残存部からは足釜であるかどうか不明である。

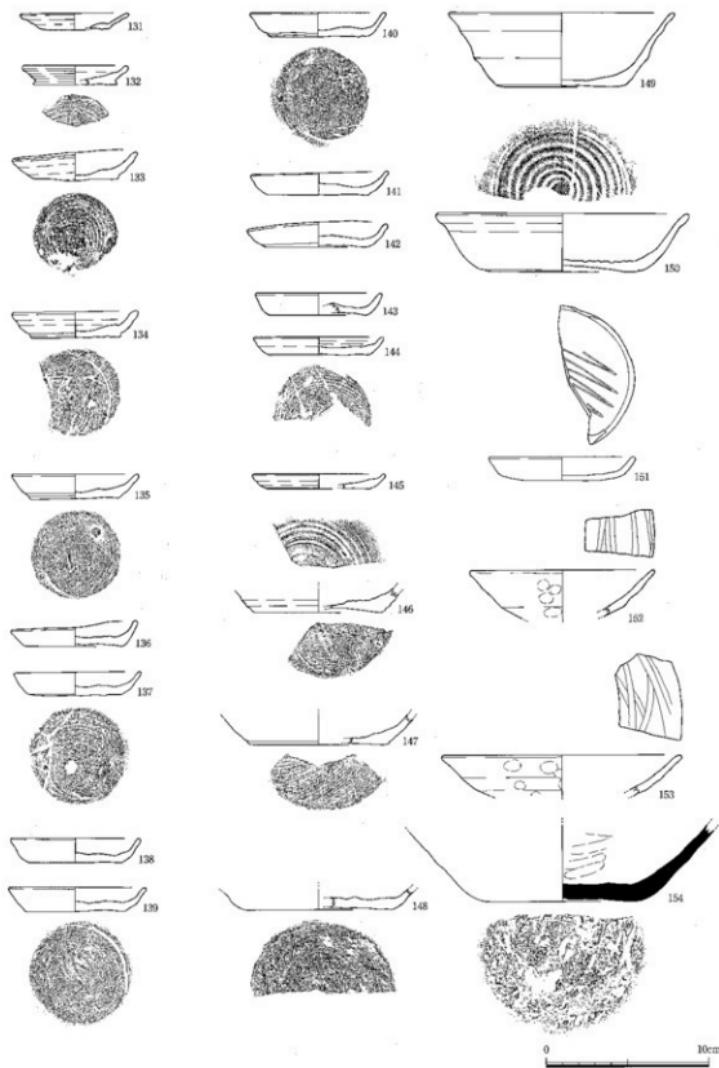


図32 SD2南半部出土遺物実測図及び拓影 (S=1/3)

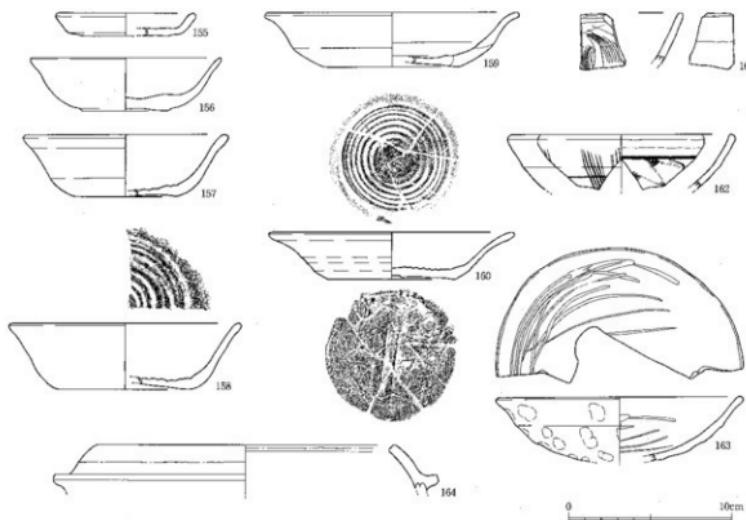


図33 SD2北半部出土遺物実測図及び拓影 ($S=1/3$)

—SD 3—

SD 2 のすぐ東側で、重なって検出した南北方向の溝跡である。南北端とも対象地外へ続いている。中軸線の方向は $N1^{\circ}W$ であり、確認できた長さは 18.5m である。

図化した出土遺物は 165～169 の 6 点である。

165～167 は上師器小皿である。口径は 6.9～8.0 cm であり、何れも口縁は直線的に開く。166 は厚ぼったい口縁、他の 2 点は端部を薄く仕上げる。

168 は口禿の白磁小皿で、腰部の屈曲点が僅かに残る。169 は白磁碗の底部で疊付け部分の削り出しが少ない。残存部の外面は全て無釉である。

—SD 4—

SD 3 のすぐ西側で、調査対象地北端から東端にかけて検出した南北方向の溝跡である。南北端とも対象地外へ続いている。中軸線の方向は $N1^{\circ}E$ であり、確認できた長さは 19.5m である。出土遺物に図化できるものはなかった。

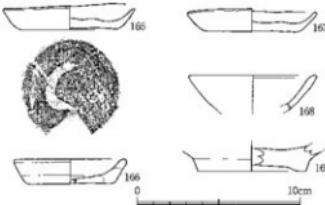


図34 SD3出土遺物実測図及び拓影 ($S=1/3$)

第3節 包含層出土遺物

(1) 2層出土及び表探遺物

水田表土と検出面の間の上層出土の遺物をまとめた。170～177及び179～184の14点である。178の青磁片のみは表探遺物であるが、一緒に記述した。

170は古代の須恵器環蓋で平らな天井部から屈曲して下がり、後外反する。口縁端部は下方に屈曲する。

171は土師器小皿で、平らな底部から口縁が直線的に聞く。底部と口縁部の厚みにはあまり差が見られない。

172は瓦器皿で、成型は椀と同様に口縁端部に円周方向の強い指押さえが認められる。173は瓦器椀で、口径は14.7cm、断面三角形の輪高台を貼付する。炭素の吸着はやや不充分である。174は瓦質の羽釜で、残存部からは足釜であるかどうかの判別はできない。また、残存部から見る限り口縁はほぼ直立している。外面とも炭素の吸着が殆ど見られず、土師質に近い焼成である。

175、176は白磁四耳壺で同一個体の可能性が高い。175は頸部片で、内面屈曲点に凹線があり、肩部外面には耳の剥落した跡が残る。176は下胴部片で、内面にロクロ成型時の工具痕が明瞭に残る。177は白磁碗で、内面見込み及び体部下部は無釉である。また、内面見込みと体部との境界に界線が入る。

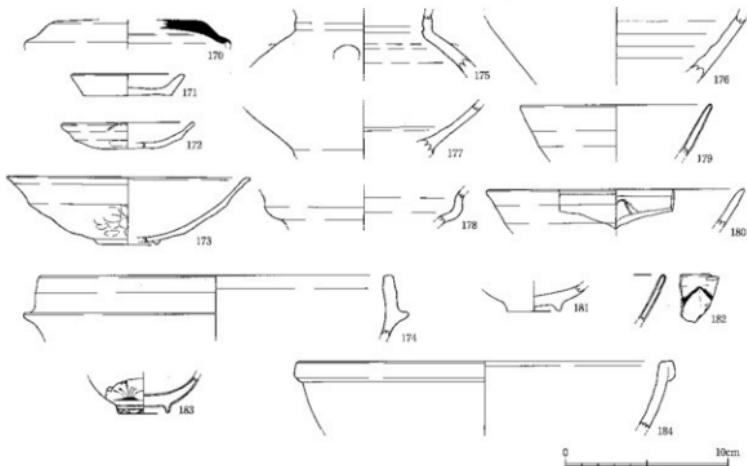


図35 2層出土及び表探遺物実測図 (S=1/3)

178は青磁皿に分類したが、特殊な器形で外方に2回、内方に1回の合計3回大きく屈曲する。細片であり皿以外の器形である可能性もある。179～182は青磁碗である。179の残存部は無文、180は内面に薄い文様を施す。及び182は龍泉窯系の籠蓮弁文が入る。181は断面三角形の小さい高台を削り出す小碗である。

183は青花小碗で、外面に草花文を施す。184は陶器鉢で、内外面とも灰釉がかかり、口縁を肥厚させる。

(2) 3層出土遺物

重機による表土掘削後、検出面をそろえるために人力によって掘削した、遺構埋土とほぼ同じ土層から出土した遺物をここにまとめた。主に対象地の北側1/3程度の部分である。185～211までの27点が土師器、212～235までの24点が土師器以外の合計51点である。

185～194は土師器小皿である。口径は6.3cmの185を除けば、6.9cm～8.3cmの範囲に収まる。185は底部と口縁部との境界が明瞭で、口縁がやや外反するタイプ、186は底部と口縁部との境界が比較的明瞭で口縁が厚ぼったいタイプである。188～190は厚くて平らな底部に薄い口縁がほぼ直線上に開くタイプである。187、191～194は口縁が内側気味に立ち上がるタイプである。

195、196は土師器小壺である。口径、器高は195が6.0cmおよび1.9cm、196が6.4cmおよび1.8cmである。他の小皿に比べると口径に対する器高の割合が高いため別に分類した。195は若干端反り気味で、196は直線的に開く。

197～211は土師器壺である。その内、197～200は低い円盤状高台のような底部を持つタイプである。いずれも内側して立ち上がり、後に外反する形態である。口縁の残存しているものの口径は、13.3cm(199)及び15.0cm(200)である。そのうち200は器高が3.9cmと低く、壺または皿に分類されよう。201～211は底部が平らで高台のないタイプである。202は口径が11.2cmで小振りで、口縁は直線上に平開く。203は口径は12.3cmで器高は4.6cmと比較的高く、口縁が大きく外反する。204は口径が13.2cmで、器高が2.9cmと低く皿に近い。206は口径が13.1cmで口縁が直線的に開く。208は口径が13.1cmで口縁部の器壁を薄く仕上げ、口縁が外反する。209は口径が13.6cmで口縁が直線的に開く。210は口径が13.7cmで口縁部の器壁を薄くつくる。211は口径が14.2cm、器高が3.6cmで皿に近い器形である。

212～215は須恵器である。212は古墳時代末の壺身で立ち上がりは内傾し、端部は丸く仕上げる。焼成は土師質で不良である。213は古代の壺身で、小さい輪高台を貼付する。214は東播系の片口鉢で口縁端部を上方に拡張する。215は口縁端部を上方につまみ上げる、残存部から判断する限り、口縁部の外傾が大きいため盤として分類した。

216、217は瓦器皿である。ともに口縁部外面の円周方向に強い指押さえが残る。炭素の吸着も良好で、特に216内面には光沢が見られる。

218～224は瓦器椀である。218は側面に円周方向、見込みには平行な暗文を施す。外面下部の炭素吸着は不充分だが、他は概ね良好である。219も218と同様の暗文が入るが、外面には炭素の吸着

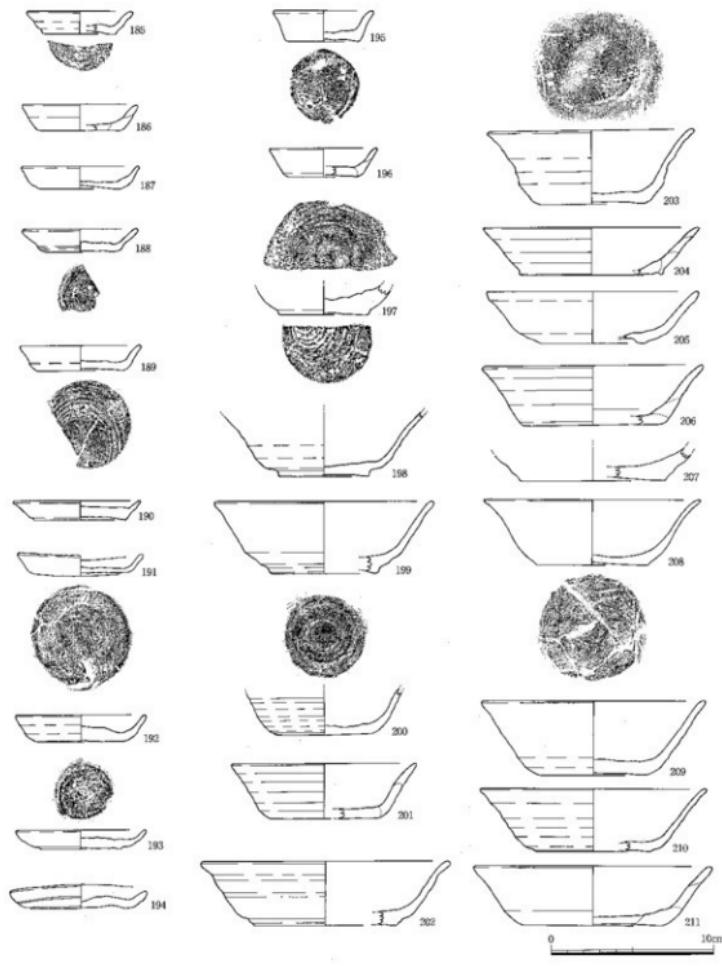


図36 3層出土土器実測図及び拓影 ($S=1/3$)

が殆ど見られない。220、222は内外面とも炭素の吸着が不充分である。223は残存部に炭素の吸着が全く見られず、断面三角形の形骸化した輪高台を貼付する。224は炭素の吸着が良好で内面には光沢が見られる。貼付輪高台もしっかりした作りで、ほぼ断面逆台形である。互いに接合しない2片であるが、調整も似通っており、出土位置も近いため同一個体として扱った。

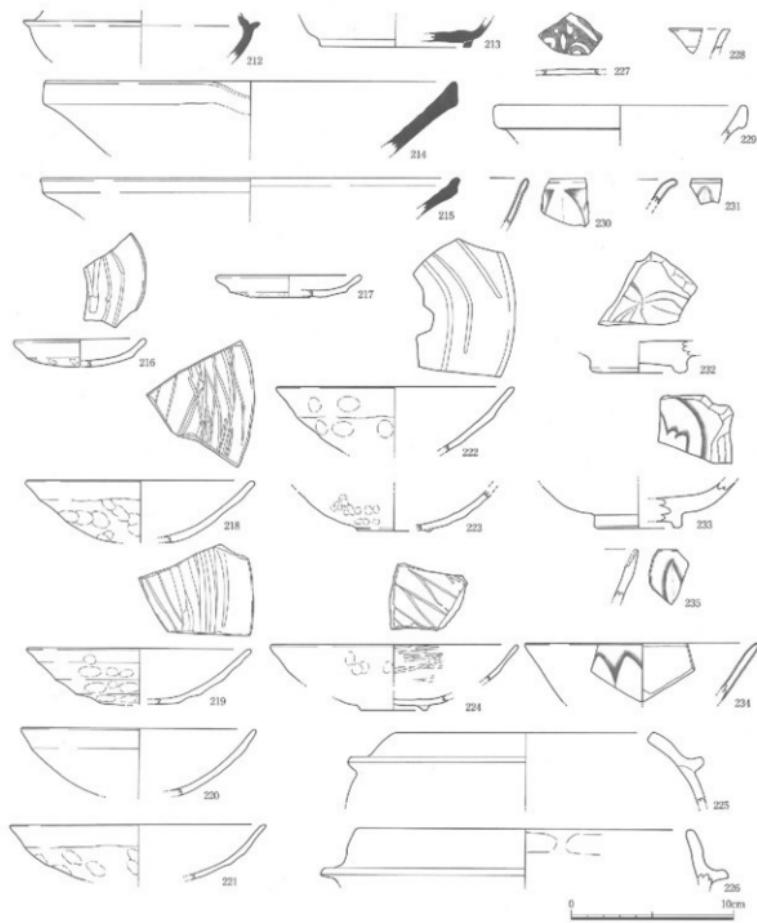


図37 3層出土遺物(土師器以外)実測図 ($S=1/3$)

225、226は瓦質羽釜である。ともに口縁は内彎、内傾し口唇は軽く面取り、外面に鏽を貼付する。225は内外面とも丁寧な調整で、炭素の吸着も比較的良好である。また、胎土に雲母が見られるところから搬入品である可能性が高い。

227は扁平であるが器肉が非常に薄い破片で、青白磁皿の見込み部である可能性が高い。両面とも施釉される。片面(見込み部)のみに施され、緑がかかった釉の中に灰白色の浮文が浮かび上がる。

両面に細かい砂が付着する。

228、229は白磁碗である。228は口縁端部を軽く外側につまみ出し、229は玉縁の口縁を持つ。

230～235は青磁碗である。230、231、234、235は外面に鎬蓮弁を施すが、234は蓮弁内の鎬が弱い。また231は口縁端部が大きく外反する。232、233は底部で、ともに高台外面まで施釉し、豊付部の削り出しが弱い。見込みにヘラ状のもので文様を描く。232は幅広の高台で、233の高台幅は狭い。

また、3層からは渡来銭も1点出土している。腐食がはげしいため、実測図、探査等はできなかったため、X線写真をP.78に掲載した。開元通宝(開通元宝)とみられる。

第4節 試掘調査出土遺物

(1) 試掘調査1

試掘調査1は本調査に先だって行った試掘調査である。大部分を遺構の検出までとどめたため、出土遺物はあまり多くない。

236～238は須恵器である。236はTP-2出土の古墳時代末の壺身で、立ち上がり・受け部とともに小さい。237はTP-1出土の壺で、頸部で大きく屈曲し内面に粘土を重ねる。細片であるため口径を復元していないが、ほぼ40cm内外はあると見られる大型品で、古代末もしくは中世のものと思われる。238はTP-1出土の古代の壺身で底部に輪高台を貼付する。

239、240はTP-3出土の土師器小皿である。239は口径が8.1cmで口縁が内彎気味に開き、端部を薄く仕上げる。240は口径が9.2cmで、直線的に立ち上がる。

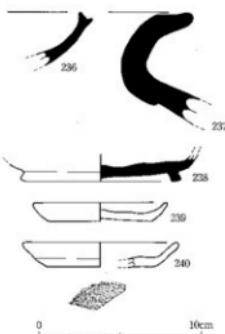


図38 試掘調査1出土遺物実測図
及び拓影 (S=1/3)

(2) 試掘調査2

試掘調査2は今回の本調査対象地の北東に隣接する敷地である。TP-5において比較的新しい時代のものと思われる小さな溝跡を検出したが、遺物は出土しなかった。各試掘坑とも、明確な遺物包含層は存在せず、図化した遺物は大部分が流れ込みによるものである。

一弥生土器一

試掘調査2ではTP-2及びTP-3から弥生土器が出土した。図化した遺物は15点で、その内TP-2からは表土下標高約3m(表土下約1.2m)程度の洪水疊層と見られる砂疊層中の粘土ブロックから245、251の2点が出土した。他は全てTP-3からの出土で、標高3m程度のシルト・粘土層中に薄い砂層が挟まっており、その砂層中から出土した。共に流れ込みと見られる。

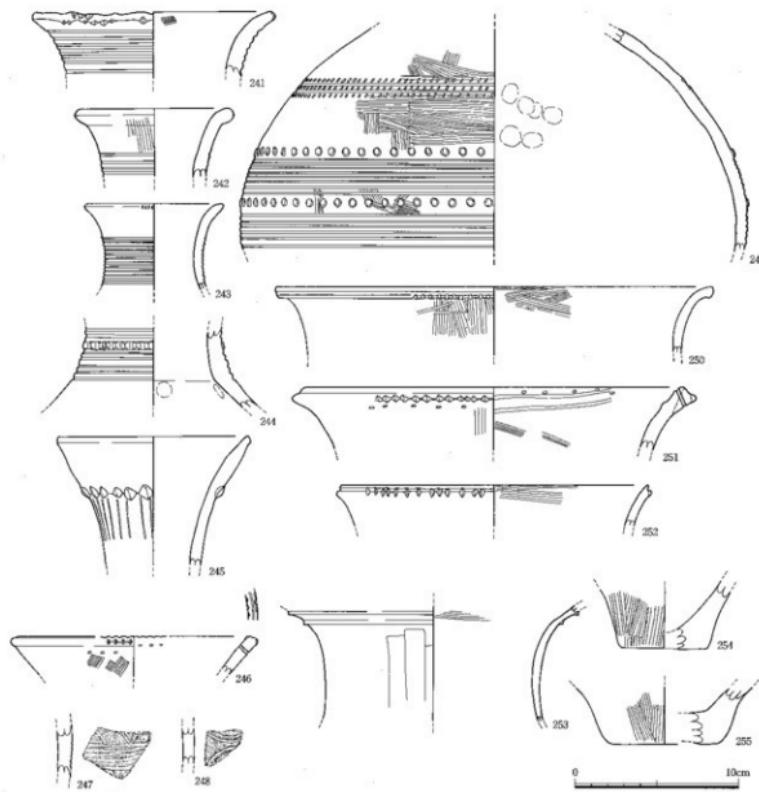


図39 試掘調査2出土遺物実測図及び拓影1 (S=1/3)

241～244は口縁部もしくは頸部に多条沈線を施す壺で、241は口唇部内外縁に刻み目を施し、244は沈線の間に扁平な刻目帯を配する。245は口縁部全体を肥厚させ、その下の頸部に縱方向に摘んだ浮文と縱方向のヘラ描き沈線を配する長頸壺である。246は口縁端部に穿孔し、口唇部内外縁に刻み目を施し、口唇は強い横ナデによって凹線状に凹む。247、248は細片で、247は多条沈線の両側に二重沈線の山形文を配し、248は二重沈線の円形文が残るが、細片であるため木葉文の一部である可能性もある。249は壺の胴部片で、実測図は同一個体と思われる二点の合成である。肩部付近に沈線及び列点文、胴部に多条沈線と円形浮文を配する。

250～252は壺の口縁部で、いずれも口唇部外縁に刻み目を施す。251は口縁部を肥厚させ、穿孔列を配し、内面に断面三角形の小さな突帯を貼付する。また、251、252の口唇は強い横ナデにより

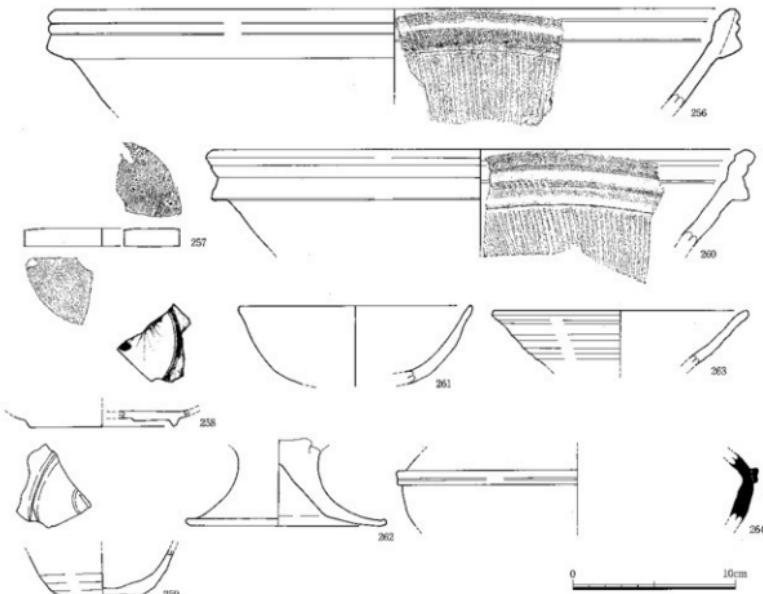


図40 試掘調査2出土遺物実測図及び拓影2 (S=1/3)

四線状に凹む。253は薄手の壺で245と同様の黒っぽく砂粒の多い胎土である。内面に横ハケのある側を口縁として図示した。口縁部外面に小さい断面三角形の突帯を二条貼付する。

254、255は壺の可能性が高い底部片で、小さい底部から急激に立ち上がり、後に外反する。

—古墳時代以降の遺物—

256～259はTP-1からの出土である。いずれも耕作土直下の層からの出土で近世の遺物と考えられる。256は擂鉢で口縁部を外側に肥厚させる。257は窯道具で能茶山窯で使用されたものであると思われる。258は染付皿で疊付の中央を凹ませて中央に施文し周囲の袖を搔き取る。上面は見込みに草花文、周囲は全体に着色する。259は土師質であるが、外面を鉄分により黒く着色する。また、外面にタール状のスヌが付着する。260～262はTP-2からの出土である。289の擂鉢は耕作土直下の層からの出土で、口径は違うが237とはほぼ同様の作りである。261の鉢は弥生土器の出土した土層とほぼ同様の層から出土したが、古墳時代の土師器として扱った。262の高杯は弥生土器の出土した土層の直上の砂礫層からの出土である。263の土師器環はTP-3からの出土で、弥生土器の出土した砂層の直上の層から出土した。264の須恵器壺は砂礫層中の粘土ブロックからの出土で、肩部に扁平な突帯を貼付する。突帯を除いた肩部の形態から見て古代の遺物と見られる。

遺物観察表1(1~23)

No.	出土 部	基盤 種類	基盤(cm)	形態・表面	調整(外側) (内面)	色調(外側) (内面)	分析		参考 書	参考 写真
							口径	底面		
1	SE1	土師器 小瓶	(6.3)	1.6 3.9	口縁は近く上外方へ直線的に延びる。 底面はつぶれて外にはみ出る。	ナデ ナデ	暗2.5VR6/6 暗2.5VR6/3	微細、微砂を含む。 良	1/3	遺物系切9
2	SE1	土師器 小瓶	(6.1)	1.5 (5.1)	口縁は近く上外方へ直線的に延びる。底面はつぶれて外にはみ出る。	ナデ ナデ	暗2.5VR6/6 暗2.5VR6/6	微細、微砂を含む。 良	1/3	遺物系切9
3	SE1	土師器 小瓶	6.9	1.4 4.9	口縁は近く上外方へ少し外反して延びる。底面は少しつぶれる。	ナデ ナデ	にぶい黄褐色10YR7/3 にぶい黄褐色10YR7/4	微細、微砂を含む。 良	1/2	遺物系切9
4	SE1	土師器 小瓶	(6.6)	1.5 (4.4)	見込みに渦巻状成形痕。中心部は外側へ向けてすり削じ。口縁は近く上外方へ延びる。	同軸ナデ 同軸ナデ	にぶい黄褐色10YR7/3 にぶい暗2.5VR7/3	微 良好。	1/4	遺物系切9
5	SE1	青磁 灰	(16.6)	2.1	内面口縁直下に舞葉二条。		断面:灰白2N7/ 輪:オーリーブ灰2.5GV6/1	微 良	1/10	
6	SB1	土師器 小瓶	(8.4)	1.3 (6.6)	薄い口縁は近く上外方に近く、外側面に工具痕が認められる。	同軸ナデ 同軸ナデ	暗2.5VR7/6 暗2.5VR7/8	微 良好。	1/4	遺物系切9
7	SH1	土師器 灰	(12.9)	3.3 (8.1)	口縁は近く上外方に近く。	同軸ナデ 同軸ナデ	灰黄褐色2.5VR8/3 淡黃褐色10YR6/3	微 良好。	1/4	遺物系切9
8	SH2	土師器 小瓶	7.6	1.4 6.2	見込みに渦巻状成形痕。口縁は近く上外方へ延びる。	同軸ナデ 同軸ナデ	暗2.5VR7/6 暗2.5VR7/6	微 良好。	1/2	遺物系切9
9	SG2	土師器 灰	(14.5)	4.4 8.7	見込みに渦巻状成形痕を複数。口縁は上外方に開き、堆積物を含む。口縁は上外方に開き、堆積物を含む。	同軸ナデ 同軸ナデ	暗黄褐色2.5VR8/4 暗黄褐色2.5VR8/6	微、微細な良石を若干含む。 やや良好	1/2	遺物系切9
10	SD3	土師器 小瓶	7.7	1.3 5.8	短い口縁は上外方へ延びる。	ナデ ナデ	灰白(10YR8/1) 灰白(10YR7/1)	微砂を多く含む。 不良	1/2	
11	SB3	土師器 灰	(2.6)	7.3	底面から丸みを持って立ち上がる。	同軸ナデ 同軸ナデ	褐色2.5VR6/6 にぶい黄褐色10YR5/4	微、微砂を含む。 良好。	1/4	遺物系切9
12	SB4	土師器 小瓶	(7.0)	1.1 (5.0)	短い口縁は上外方に開く。底面は少しつぶれ。	同軸ナデ 同軸ナデ	にぶい黄褐色10YR7/4 にぶい黄褐色10YR7/4	微、微砂を含む。 良好。	1/4	遺物系切9
13	SB9	青磁 灰	(3.3)	外面に輪縫溝を施す。		灰白N8/ オーリーブ灰2.5GV6/1	微、微砂を含む。 良好。	小片	遺品集録	
14	SH10	土師器 小瓶	7.4	1.4 5.1	見込みに渦巻状成形痕。短い口縁は上外方に開き、若干内傾する。	同軸ナデ 同軸ナデ	暗黄褐色10YR8/4 暗黄褐色10YR8/4	微、微細な良石を若干含む。 良好。	1/3	遺物系切9
15	SH10	土師器 灰	(2.0)	8.3	見込みに渦巻状成形痕。底面から丸みを持って上外方に立ち上がる。	同軸ナデ 同軸ナデ	褐色2.5VR6/6 暗2.5VR6/6	微、小さい良石を含む。 良好。	1/4	遺物系切9
16	SH10	瓦器 灰	(8.0)	2.2	厚子の作付で、口縁に内側にする。	ナデ ナデ	灰(N4/4) 灰(N4/4)	微 良	1/5	外面上に指擦圧痕
17	SH10	瓦器 灰	(2.7)	6.1	断面手台付の高台を削り出す。見込み内側へフタ附ける。	ヘラ削り、ナデ ヘラ削り、ナデ	断面:灰2.5VR8/2 粗粒灰10GVR6/1	微、微砂を含む。 良好	束ね 3/4	内面の目袖ひざ 肥前系
18	SB11	土師器 小瓶	(6.9)	1.7 (4.6)	短い口縁は高台の間に明瞭な堆積を持ち、直線的に上外方に開く。		にぶい黄褐色2.5VR7/4 暗2.5VR6/6	小さい良石・石英を多く含む。 良	1/3	
19	SH11	土師器 小瓶	7.8	1.4 4.9	見込みに渦巻状成形痕。底盤は高く、口縁は大きく上外方に開く。	同軸ナデ 同軸ナデ	にぶい黄褐色2.5VR7/4 暗黄褐色2.5VR8/4	やや微、微細な良石、微砂を含む。 少量含む。	2/3	遺物系切9
20	SH11	土師器 小瓶	6.7~ 7.4	1.2 4.5	見込みに渦巻状成形痕。底盤は高く直立的で、口縁は若干内傾して上外方に開く。器壁は厚く、口縁は内側にして上外方に開く。	山軸ナデ 同軸ナデ	にぶい黄褐色2.5VR8/4 暗黄褐色2.5VR8/4	微 良好	兜形 兜形	遺物系切9, 平面形状は大きめゆがむ。
21	SB11	土師器 灰	15.7	3.7 7.0	見込みに渦巻状成形痕。口縁はほぼ直立的で、口縁に開く。	ナデ ナデ	暗黄褐色(7.5YR8/4) 深褐色 暗2.5VR7/4	粗砂を含む。 不良	1/2	遺物系切9
22	SB11	土師器 灰	13.8	4.0 7.1	見込みに渦巻状成形痕。口縁は若干端より張出しで開く。	同軸ナデ 同軸ナデ	暗2.5VR7/6 暗黄褐色10YR8/4	やや微、微細な良石、微砂を含む。 少量含む。	1/2	遺物系切9
23	SH11	土師器 灰	(14.9)	1.6 (7.7)	見込みに渦巻状成形痕。口縁はやや大きめで、口縁に直線的に開く。	山軸ナデ 同軸ナデ	にぶい黄褐色10YR7/2 暗2.5VR7/6	微、微砂を含む。 良好。	1/3	遺物系切9

() は復元及び残存値

遺物観察表2(24~46)

No.	H. 土	部種	法蓋(cm) 頭蓋	形態・変文	調査(外顎) (内顎)	色調(外顎) (内顎)	胎土 造法	現存 率	備考
24	SA1	土師器	(7.7) 1.6 (5.6)	口縁は内唇しながら外方に開く。 小重	ナゲ ナゲ	淡青褐7.5V8R/6 淡青褐7.5V7/6	やや褐。跡印を含む。 良	1/3	遺部未切引
25	SA2	陶器 甕	(11.0) (18.4)	内面全体に自然縫がさう。平らな底面から、底盤直線的に外方に開く。	板ナゲ ナゲ	赤褐色10R1/3 板オーリーブ3Y8/3	暗、跡印を含む。 良好	1/8	遺清系
26	SK1	土師器 外	(2.0) 6.9	やや小さめの盤面から、上外方に開く。開きはやや小さめ。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	にぶい黄褐7.5V7/4 にぶい黄褐7.5V7/4	青 良好	1/3	
27	SK2	土師器 井(椀)	14.8 5.3 7.2	足込みに渦巻状皮膚痕。低い円錐状底面から上外方に開き、口縁部が外唇反ぞ。縫合は底盤ナゲで隠されて上げる。	板ナゲナゲ	短2.5V6E/8 短3V7/8	やや暗、黒へ傾む。チャートを含む。 良到	1/3	遺部未切引
28	SK3	土師器 小重	7.7 1.2 5.5	短い口縁は、内脇向外に開く。	ナゲ ナゲ	にぶい黄褐10V7/2 にぶい黄褐10V7/2	褐色を多く含む。 不良	1/2	遺部未切引
29	SK3	土師器 小重	7.2 1.7 5.5	平らな底面から、明瞭な縫合を持って、短い口縁が内脇向外に開く。	ナゲ ナゲ	にぶい黄褐10V7/2 にぶい黄褐10V7/2	比較的暗青、中砂を含む。 良	ほぼ 完形	遺部未切引
30	SK3	土師器 小重	7.4 1.2 (5.5)	平らな底面から、明瞭な縫合を持って、短い口縁が立ち上がる。	ナゲ ナゲ	にぶい黄褐10V7/2 にぶい黄褐10V7/2	中砂を僅かに含む。 不良	1/4	
31	SK3	土師器 小重	7.4 1.1 5.7	平らな底面から短い口縁が外方に開く。	ナゲ ナゲ	にぶい黄褐10V7/3 にぶい黄褐10V7/4	中砂を含む。 良	完形	遺部未切引、スズ村 地。打明度か
32	SK3	土師器 小重	7.4 1.6 5.8	平らな底面から、明瞭な縫合を持って、短い口縁が立ち上がる。	ナゲ ナゲ	にぶい黄褐10V7/3 にぶい黄褐10V7/2	褐色、跡印を僅かに含む。 不良	1/3	遺部未切引
33	SK3	土師器 小重	7.6 1.3 6.7	平らな底面から、短い口縁が外方に開く。	ナゲ ナゲ	にぶい黄7.5V7/4 にぶい黄7.5V7/3	褐色、中砂を僅かに含む。 不良	1/2	
34	SK3	土師器 小重	(7.9) 1.5 (5.1)	奥く平らな底面から、明瞭な縫合を持って長めの口縁が内脇向外に開く。	ナゲ ナゲ	にぶい黄褐8V7/6 にぶい黄褐8V7/3	褐色を多く含む。 良	1/3	
35	SK3	土師器 小重	7.3 1.6 4.8	平らな底面から、明瞭な縫合を持って上外方に開く。口縁はやや歪曲。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	灰白10V8R/2 灰白10V8R/2	青、跡印を含む。 良好	完形	遺部未切引
36	SK3	土師器 井	(13.1) 4.6 6.6	底盤から、今や内脇気泡に立ち上がり、縫合で外反する。口縁は底盤は薄い。	ナゲ ナゲ	にぶい黄(5V7/3) 灰白(7.5V8R/2)	中砂を含む。 良	1/3	遺部未切引
37	SK3	土師器	(13.0) 3.2 (7.2)	底盤から、ほほは底盤的に立ち上がり、口縁は歪曲。	ナゲ ナゲ	にぶい黄7.5V7/4 にぶい黄褐10V7/4	中砂を含む。 良	1/3	遺部未切引
38	SK3	土師器 井	12.8 4.4 6.6	口縁は、平らな底面から、外方に開き、縫合で外反する。	板ナゲ 凹輪ナゲ	淡青褐7.5V8R/4 短5V7/6	青、微細な長毛、板砂を少量含む。 やや良。	完形	遺部未切引
39	SK3	土師器 井	12.4 4.4 6.2	底盤から内脇気泡に立ち上がり、縫合で外反する。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	短5V7/6 短5V7/6	青、微細な長毛、板砂を細胞で多少含む。 良好。	1/3	遺部未切引、平面製 は大きいやがむ。内 面にレス付着。
40	SK3	土師器 井	(14.0) 3.4 (8.9)	平らな底盤から、短めで浅い口縁が外方に開く。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	淡青褐7.5V8R/4 淡青褐7.5V8R/4	青 良好	1/4	遺部未切引
41	SK4	土師器 小重	(8.9) 1.3 (7.4)	平らな底盤から短い口縁が外方に開く。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	短5V7/6 短5V7/6	やや青、微細な長毛を含む。 良好	1/4	遺部未切引
42	SK4	土師器 小重	(8.7) 1.7 (6.0)	見込みに渦巻状皮膚痕。平らな円錐状底面から、短い口縁が外方に開く。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	灰白10V8R/2 灰白10V8R/2	青 良好	1/4	遺部未切引
43	SK4	瓦器 瓶	(16.0) 4.3 5.0	底盤から内脇に立ち上がり、縫合で下外反する。高台の断面は造台形の部分と、近三井用の部分があり、小さい。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	灰白/NS 灰白/NS	青、微細な長毛を多く含む。 良好	1/3	素の吸着不 分。
44	SK4	青磁 碗	(15.5)	縫合部文、口縁縫合は若干外反する。	板ナゲ 板ナゲ	青面灰(5V7/3) 青面灰(5V6W/1)	極めて健壮	1/10	建東窯系。
45	SK4	内磁 碗	(15.0) (1.9)	口縁は大きめの平縁で、厚手の作りである。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	青面灰(5V7/3) 青面灰(5V7/2)	青、跡印を含む。 良好。	1/8	
46	SK4	白磁 碗	(17.0) (1.9)	口縁は大きめの玉縁である。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	青面灰(5V7/3) 青面灰(5V7/1)	細密 良		

() は復元及び残存数

遺物観察表3(47~69)

No.	出土 場所	基盤 高さ(cm)	表面・裏面 形状	調整(内面) (外面)	色調(外面) (内面)	新土 微成	残存 率	備考
47	SK4 白樺 樹	(10.9) 7.4	(3.1) 仕上げる。	口窓の面で、薄平の作りで、内壁裏面は斜く 凹凸ナメ。	断面:灰PNN/1 側面:灰白DYY/1	褐色 灰	1/5	
48	SK4 白樺 樹	(15.9) 7.4	(2.6) 下端無地。	口窓の面で、内面に一歩の踏道が造る。外部 凹凸ナメ。	断面:灰GYY/1 側面:オーリープ灰2.5GY/1	褐色 灰		頭片
49	SK4 白樺 樹 环身	(8.0) 2.7	(5.3) 立ち上がりは内傾し、端部は丸く上げる。受 け頭は上方方に開く。	回転ナメ、底部 木調型 凹凸ナメ	青灰B6/1 明青灰B8/1	小さい底石を多く含む。 壁。	1/4	
50	SK4 白樺 樹	(6.0) 9.0	薄く平らな底面から、えみを持ってせち上が り、上外方へ直線的に開く。	回転ナメ、ナメ 山形ナメ、ナメ	灰GDD/6/1 灰H/6	赤、細かい黄石、細砂を含む。 良好。	1/2	共詰糸切り 末研磨系か
51	P1 白樺 樹	(0.5) 2.0	口窓の面で、薄い口縁は端部で外反する。		断面:灰GYY/1 側面:灰白JGGY/1	褐色 灰	1/10	
52	P2 黒志錆 环身	(1.9) (8.1)	断面逆台形の輪郭輪高台の下面は断面上に 凹む。高台内へ側面削り凹ナメ。	回転ナメ	明青灰B6/1 明青灰B9/1	赤、細かな黄石を少含む。 堅厚。	1/4	
53	P3 土師器 小皿	7.3	1.4	短い口縁は内壁気泡に立ち上がり、端部で内 反する。	回転ナメ 横SYT/8 回転ナメ	赤 良好	2/3	
54	P3 土師器 小皿	(7.2)	(1.3)	短い口縁は内壁気泡に立ち上がり、端部で外 反する。	回転ナメ 横SYT/8	赤 良好	1/4	
55	P3 土師器 小皿	(7.4)	(6.1)	平らな底面から、短い口縁が上方方に開く。 端部は薄い。	回転ナメ 回転ナメ	淡青灰SYT/3 灰青SYT/2	赤、細かい黄石、微～細砂を 含む。 良	共詰糸切り 未研磨系
56	P3 土師器 坪	(2.0)	(8.0)	平らな底面から、内壁気泡に立ち上がり。端 部は薄い。	回転ナメ 横青灰SYT/4 回転ナメ	赤 やや良	1/3	底部糸切り
57	P4 土師器 小皿	6.9	1.5	平い底面から上方方に立ち上がり、端部は若 干外反する。	ナメ ナメ	にぶい黄緑10YR7/2 にぶい黄緑10YR6/3	細砂を含む。 小良	ほぼ 近部糸切り
58	P4 土師器 小皿	(7.0)	1.9	短い底面から、上外方へ直線的に開く。小坪 に近い。	ナメ ナメ	淡黄褐7.5YR8/4 淡黄褐10YR6/3	細砂を多く含む。 不良	底部糸切り 近部糸切り
59	P5 土師器 小皿	(8.4)	1.9	(6.3) 円盤状高台に近い底面から内壁気泡に立ち 上がる。	ナメ ナメ	橙SYT/6 橙2.5YR6/6	細砂を含む。 小良	1/4
60	P5 土師器 小皿	7.4	1.3	4.4 見込みに渦巻状成形痕。平らな底面から上外 方へ側面、端部で外反する。端部は薄い。	回転ナメ 回転ナメ	にぶい黄褐10YR7/4 にぶい黄褐10YR7/2	赤 やや良	1/2 底部糸切り
61	P6 土師器 小皿	(7.0)	1.5	(5.6) 短い口縁は内壁気泡に上方方に開く。	回転ナメ 回転ナメ	にぶい黄褐10YR7/4 泰緑10E/6	赤、小さい模様、細砂を含 む。 良好	1/3 底部糸切り
62	P6 土師器 小皿	(6.0)	1.4	(4.0) 底面から明顯に底板を持つ、短い口縁が直 線的に上方方に開く。	ナメ 不規	にぶい黄褐10YR7/4 横SYT/6	細砂を多く含む。 良	1/5 高湯糸切り
63	P6 土師器 小皿	(7.0)	1.4	(3.0) 短い口縁は直線的に上方方に開く。	回転ナメ 回転ナメ	にぶい黄褐10YR6/3 にぶい黄褐10YR7/3	赤 良好	1/4
64	P6 土師器 小皿	(8.0)	1.7	(6.2) 武鉄山の山頂に底板を持つ、短い口縁が直 線的に上方方に開く。器壁は薄い。	ナメ ナメ	淡黄褐7.5YR8/4 にぶい黄褐10YR7/4	細砂を多く含む。 良	1/5 底部糸切り
65	P6 土師器 坪	(12.7)	3.4	(7.0) 見込みに渦巻状成形痕。円盤状の高台から 内壁気泡に立ち上がり、端部付近で若干外反 する。	回転ナメ 回転ナメ	淡黄褐10YR8/3 灰D2.5Y7/1	赤、微～細砂を含む。 やや良	1/2 底部糸切り
66	P6 土師器 坪	(3.6)	(7.2)	内壁気泡に立ち上がり、端部付近で外反す る。器壁は薄い。	回転ナメ 回転ナメ	横SYT/6 横R7/6	赤 良好	1/4
67	P7 白樺 樹	西 古	新古山古形の高台を刳り出す。外曲高台付 (7.0) 近まで薄地。		灰C2.5GY/1 灰D2.5Y8/1	褐色	1/4	底部のみ
68	P8 白樺 樹	高 古	断面逆台形の高い高台を削り出す。 (5.0)		断面:灰G3/8 輪明オーリープ灰2.5GY/1	褐色 良	1/4	
69	P9 土師器 小皿	7.6	1.4	4.5 口縁は内壁気泡に大きく開く。	ナメ ナメ	橙SYT/6 横2.5TR8/8	細砂を保がに含む。 不良	浅井 光形

() は復元及び残存供

遺物觀察表4(70~91)

No.	出土 場所	器種	法量(cm) 内径 外径 高さ	形態-施文	調査(外側) (内面)	色調(外側) (内面)	加工 施文	段合 率
70	P10	二輪器	(11.0) 3.5 5.6	平らな底盤から、外方へ立ち上がり、階級付 近で若干外反する。	円柱ナゲ ナゲ	緑7.SV7/6 緑SVR6/6	緑帶、細卯を含む。 良	1/2 底盤系切り
71	P11	青磁 碗	(2.9)	外曲に施墨彩文。		黒帯:灰口NB/ 緑:オーリヤ灰SV7/1	緑帶 良	緑片 底盤系
72	P12	青磁 皿	(1.1) 4.8	見込みに施墨彩文。平らな底盤から大きく開 き、口縁付近で上方に弧曲する。		黒帯:灰口NB/ 緑:羽ガタ灰SV7/1	黒帯 良	1/10 青白なし。 同余脈系。
73	P13	青磁 碗	(15.0) (6.1)	外曲に施墨彩文。		黒帯:灰口NB/ 緑:羽ガタ灰SV7/1	黒帯 良	1/5 緑系底盤系。
74	P14	土師器 杯	(10.0) 3.6 (3.6)	やや小振りで、平らな底盤から、上方へ直線 的に開く。	円柱ナゲ 凹輪ナゲ	緑2.SV7/6 にぶい緑7.SV7/4	やや密、細かい長石、黄～緑 砂を含む。 良好。	1/3 底盤系切り
75	P15	土師器 小皿	7.9 1.4 5.9	短い口縁は、やや内傾気味に上方方に傾く。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	緑7.SV7/6 緑2.SV7/8	やや密、細かい長石、黄～緑 砂を含む。 良好	3/4 底盤系切り
76	P16	土師器 杯	(14.7) 3.1 (7.8)	底盤から上方へやや大きく開く。口沿に比 して器底がやや低く、器壁も薄め。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	緑7.SV7/6 にぶい緑7.SV7/4	やや密、細かい長石、黄～緑 砂を含む。 良好。	1/6
77	P17	土師器 小皿	(6.0) 1.5 (3.8)	見込みに施墨彩成形底。器底は厚めで、見 い出縁が直線的に上方方に傾く。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	にぶい緑7.VR6/3 にぶい青碧10.VR6/3	青 良好	1/4 底盤系切り
78	P17	石器 (石器)	(4.8) (26.0)	平らな底盤から、上方方に若干内傾して傾く。 現存する上縁端部では調整痕があり、石器被 損傷部とて二次利用したものと考えられる。		灰褐7.SV8/1	滑石質	内外面にスリット留
79	P18	酒器	16.5 (5.0) 腹 底盤	横割れが外側、背筋で内弯する。這割け丸く 仕上げる。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	灰口10.Y7/1 灰口7.SV7/1	やや密、細かい長石、微～緑 砂多く含む。 軟	1/6
80	P19	十輪器 杯	(11.0) 5.8 (7.6)	小振りで、平らな底盤から内壁気味に立ち上 り、開口部で外反する。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	浅黄褐7.SV8/4 浅青褐7.SV8/4	やや密、細かい長石を含む。 微～細砂を少量含む。 良好。	1/3
81	P19	瓦質 三星蓋	11.4 (14.4) 開 鉢	最大径は、開口部下部にひし口格子内收す。中 口部は横に瓦取り、外縁に断面三角形の鉢 と、両性能の三本の脚貼付。	ナゲ、階級灰 ナゲ、ハケ	灰口/ 新面山内NT/	密、細かい長石、微～細砂 多々含む。 やや不良。	1/4
82	P20	木漆 漆	2.2 13.2 幅4.5		即T板不取板			木製品
83	P21	土師器 小皿	7.2 1.5 4.2	内側に立ち上がり、階級付近で強い複習き えため、若干外反する。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	にぶい緑7.SV7/4 にぶい緑7.SV7/1	やや密、微砂を含む。 良好。	1/3
84	P22	土師器 小皿	7.7 1.4 5.4	平らな底盤から、近く薄い口縁が上方へ垂 直に張り出す。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	灰口SV7/1 灰口SV8/1	密、小さい長石、石英、隕石を 含む。 良好。	1/18 完形
85	P22	瓦器	(7.0) 1.0 (6.0)	底盤から縁際に内側傾して括げる。	ナゲ ナゲ	灰口/ 新面成口7.SV8/1	密、微細な長石、微砂を含む。 良	1/3 内側づくり。表面の 吸着不充分。
86	P23	土師器 小皿	7.6 1.9 6.2	見込みに施墨彩成形底。平らな底盤から、見 い出縁が内側して開く。底盤に火跡。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	緑SV7/6 にぶい緑7.SV8/4	密、微細な長石を含む。 良	光形 底盤系切り
87	P23	土師器 小皿	7.9 1.4 5.7	平らな底盤から、近く薄い口縁が上方へ垂 直に張り出す。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	緑2.SV8/6 にぶい緑7.SV8/6	密、微細な長石、石英を含む。 良好。	1/2 底盤系切り
88	P23	土師器 杯	(13.0) 4.3 (7.6)	高台状の底盤から、内側無理に立ち上がり、 底盤付近で外反する。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	にぶい黄褐10.Y7/4 にぶい黄褐10.Y7/4	密 良好。	1/2
89	P23	土師器 杯	(12.7) 3.8 (7.6)	平らな底盤から直進的に上方に開き、縁部 付近で若干外反する。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	明灰口7.SV7/2 灰口7.SV7/2	密、微細を少量含む。 良好。	1/6 底盤系切り
90	P23	土師器 杯	(13.0) 2.7 (8.2)	器底は海みで、平らな底盤から内側氣味にせ り上がり、縁部付近で若干外反する。	凹輪ナゲ 凹輪ナゲ	灰灰口7.SV7/4 にぶい黄7.SV7/4	密 良好	1/4 底盤系切り
91	P23	土師器 杯	(2.2) 8.4	器底は薄めで、平らな底盤から上方へ凹 く。		緑7.VR6/8 緑2.SV5/S/8	密、細かい長石を含む。 良好	1/2 底盤系切り

() = 残元及び残存個

遺物観察表5(92~111)

No	出 土 場 所	器種	基盤(cm)	形態・施文	調査(外因) (内因)	色調(外因) (内因)	地土	保存 状況	備考	
92	P24	土師器	7.1	1.5 4.7	平らな底盤から上方へ内輪気味に聞く。	回転ナデ	褐2.5VR6/8 褐、黒～鉛砂を含む。	ほぼ 底部赤切り		
		小瓶				回転ナデ	良好	完形		
93	P24	土師器 坪	(13.0)	3.2 8.1	見込みに渦巻状成形痕。器壁は高く内輪気味に立ち上がり、端部付近で外反する。器高は低い。	回転ナデ	にぶい褐色5VR7/4	褐	1/2	
94	P25	土師器 坪	12.7	3.9 6.3	見込みに渦巻状成形痕。平らな底盤から内輪気味に立ち上がり、窓附付近で外反する。	回転ナデ	褐3VY7/8 黄褐7.5VY7/8	赤、小さい斑点を含む。 良好	1/4	底部赤切り
95	P25	陶壺 寸切	(1.5)	10.2	平面形(ほぼ正円)上に、外縁する体部がヘラケズリ	褐青灰5B7/1 褐青灰5B7/1	赤、細かい貝殻を多く含む。 型崩	底部		
96	P26	土師器 坪	(13.0)	3.8 6.9	見込みに渦巻状成形痕。低い円盤状高台から内輪して立ち上がり、端部で外反する。器高は薄め。	回転ナデ	赤褐10R6/6 赤褐10R6/6	やや赤、微細な石斑、石灰を 若干、微～鉛砂を含む。	1/3	底部赤切り
97	P26	瓦 桶	14.9	4.0 4.2	器壁は強く内輪して聞く。高台は造りし、小さ い。	回転ナデ、ナデ	灰白5V7/1 灰白5V7/1	やや赤、微細な長石を多く含 む。 良好	1/8	器蓋の吸水不良 分。
98	P27	土師器 坪	(13.6)	4.2 (7.8)	平らな底盤から内輪気味に立ち上がり、直腹	直腹5V7/8	細か～中砂を含む	1/4		
						直青褐7.5VR8/4	不良			
99	P28	土師器 坪	(16.2)	4.4 (9.2)	見込みに渦巻状成形痕。高台から内輪気味に立ち上がり、端部で外反する。	回転ナデ	褐5VY7/6 にぶい褐色5VY7/4	赤、微細な長石、微砂を少 量含む	1/3	底部赤切り、高剣は 端削圧によりゆがむ。
100	P29	土師器 坪	12.7	3.9 7.2	見込みに渦巻状成形痕。平らな底盤から、内 輪気味に立ち上がり、端部で外反する。	回転ナデ	褐3VY7/6 褐3VY6/6	赤、微細な長石、微砂を少 量含む 良好	1/2	
101	P29	土師器 坪	(13.0)	3.6 7.6	見込みに渦巻状成形痕。平らな底盤から内輪 気味に立ち上がり、端部で外反する。	回転ナデ	褐3VY6/6 褐3VY7/8	やや赤、微細な長石、微砂を含む。	1/3	
102	P29	土師器 坪	(15.1)	3.5 9.0	見込みに渦巻状成形痕。平らな底盤から、内 輪気味に立ち上がり、端部で外反する。	回転ナデ	褐3VY6/6	やや赤。	1/3	
103	P29	土師器 坪	(14.4)	4.2 7.0	平らな底盤から、ほぼ直線的に立ち上がり、 端部で外反する。	回転ナデ	赤褐10R6/6 にぶい赤褐10R6/4	やや赤、微細な長石、石灰、微 砂を含む。	1/3	底部赤切り
104	P29	土師器 坪	(2.4)	8.4	平らな底盤から、内輪気味に立ち上がり。	回転ナデ	にぶい褐色2.5VY7/4	赤、微細な長石を若干含む。	1/4	底部赤切り
						にぶい褐色5VY7/4	良好			
105	P29	土師器 坪	(12.4)	3.2 (8.0)	見込みに渦巻状成形痕。小振りで、平らな底 盤からほぼ直線的に向外方に聞く。器壁は薄 め。	回転ナデ	褐3.5VY7/6	赤。	1/3	底部赤切り
106	P29	土師器 坪	14.6	3.8 9.2	見込みに渦巻状成形痕。底盤からは直線 的に立ち上がり、端部で外反する。	回転ナデ	にぶい褐色5VY7/4	赤、小さい長石、鉛砂少量を 含む。	1/4	底部赤切り
						にぶい褐色5VY7/4	良好			
107	P29	土師器 坪	14.3	4.1 8.2	見込みに渦巻状成形痕。平らな底盤からは 直線的に向外方に聞く。	回転ナデ	にぶい黄褐5YR7/4	赤。	2/3	底部赤切り、平面型 は大きくなり。
108	P29	灰 壺	(5.4)	16.8	外面は平高台気味の底盤からほぼ直線的に 向外方に聞く。内面は、底盤と体部の境界が はっきりせず、底面内面に凹凸を形成する。	板ナデ	青灰10R6/1 褐青灰5B7/1	赤、細かい長石、微砂を多 く含む。	1/2	
109	P30	土師器 坪	14.6	4.3 7.4	見込みに渦巻状成形痕。微かな円盤状高台 を持った底盤から、内輪して立ち上がり、端部付 近で外反する。	回転ナデ	にぶい黄褐10YR7/3 淡黄2.5Y6/3	赤、良好	3/4	底部赤切り
110	SD1	土師器 小瓶	(7.4)	1.4 (4.6)	窓口部は若干外反して上方に聞く。器壁 は薄め、運搬時の境界は不明。	回転ナデ	にぶい褐色5VY6/4 褐3.5VY6/6	赤、良好	1/6	
111	SD1	土師器 小瓶	7.7	1.6 5.4	見込みに渦巻状成形痕。窓口部は若干直 線的に上方に聞く。底盤との境界は明確。	回転ナデ	褐3.5VY6/8 褐3.5VY7/4	赤、良好	2/3	

() は復元及び残存値

遺物観察表6(112~136)

No.	出土地	基準	法量(cm)	形態・状況	調整(外側) (内面)	色調(外・面) (内面)	断土 使用	現存 率	備考
112 SD1	上部層	0.60	1.4	(6.5) 短い口縁が、上外方に小さく開く。近部との境 界は明確。	凹輪ナゲ	に深い槽2.5YR7/4 内輪(5YR8/4)	黒、微妙を含む。	1/6	
113 SD1	上部層	(0.1)	1.4	(5.5) 口縁は直線的に大きく開く。近部との境界は 明確で、隔壁は薄め。	凹輪ナゲ	短2.5YR7/6 短2.5YR7/6	黒、微細な長毛を若干含む。	1/3	
114 SD1	上部層	(7.3)	1.4	(4.9) 短い口縁は直線的に向外方に開く。若葉は 薄め。	凹輪ナゲ	灰黄褐10YR6/2 内輪ナゲ	黒	1/4	底部未切り
115 SD1	上部層	(7.5)	1.2	(5.4) 短い口縁は、やや内傾して上方に開く。	ナゲ	短2.5YR7/6 ナゲ	距離を保かに含む。	1/6	
116 SD1	二輪器	(8.3)	1.6	(6.1) 口縁はやや内傾して上方方に開く。	凹輪ナゲ	浅黄褐10YR8/3	黒	1/4	
117 SD1	二輪器	(8.2)	1.2	(5.7) 見込みに済着状況が悪く、平らな底部から、内 輪は底面に立ち上がり、口縁が外傾する。	凹輪ナゲ	にぶつ青褐10YR8/3 灰黄褐10YR8/1	黒、微細な長毛を少含む。 やや不良	1/3	底部未切り
118 SD1	十輪器	(7.0)	1.5	5.9 平らな底部から、短い口縁が直線的に上方方に へ小さく傾く。	凹輪ナゲ	短2.5YR7/6 短2.5YR7/6	黒 良好	1/2	底部未切り
119 SD1	上部層	(9.8)	1.4	(7.0) 短い口縁が直線的に向外方に開く。	凹輪ナゲ	に深い槽2.5YR7/4 内輪ナゲ	黒	1/4	底部未切り
120 SD1	上部層	(6.5)	1.4	(4.6) 短い口縁が内傾して上方方に開く。	凹輪ナゲ	に深い槽2.5YR7/4 内輪ナゲ	黒、微妙を含む。 良好	1/4	
121 SD1	土師器	(7.7)	1.1	(6.2) 草らかな底部から、非常に小さい口縁が内傾し て立ち上がる。	ナゲ	短2.5YR7/4 ナゲ	健康、0.5mm以下の砂粒を 僅かに含む。	1/5	
122 SD1	土師器	(9.5)	1.3	(5.2) 口縁は内傾しながら大きめに開く。	凹輪ナゲ	にぶつ青褐2.5YR7/4 凹輪ナゲ	黒 良好	1/4	
123 SD1	土師器 片	(1.3)	(9.9)	見込みに済着状況が悪く、平らな底部から内輪 は底面に立ち上がる。	凹輪ナゲ	にぶつ青褐2.5YR7/4 凹輪ナゲ	黒、微細な黄石を若干含む。 良好	1/2	底部未切り
124 SD1	土師器 片	(2.1)	(10.2)	底部から、ほぼ直線的に立ち上がる。	凹輪ナゲ	短2.5YR5/1 凹輪ナゲ	黒 やや不良	1/4	底部未切り
125 SD1	瓦器	(15.0)	3.6	4.1 小さな断面逆台形の瓦器を貼付する。全体は 内側に張り出しがあり、縫合は低い。	ナゲ、指輪瓦 ナゲ	暗2.5YR7/3 暗2.5YR7/1	黒、額縁・裏石を多く含む。 良好	1/4	表面の吸水不充分
126 SD1	从質	(20.7)	6.95	外輪は柱筋を削除後、脚を貼付する。口縁は少 し内傾し、網状網目は脚の少し下にある。 口縁は斜め曲がり。	ナゲ、指輪瓦 ナゲ	90%	少物を多く含む。表石が削 つ。	1/10	
127 SD1	直唇器 片	(12.0)	1.60	立ち上がりが少し内傾し、縫合は矢立付上に ある。脚の受け付けはほぼ水平で並んでいる。	凹輪ナゲ	明青10YR8/1 凹輪ナゲ	黒、微細な長毛を含む。	1/12	
128 SD1	直唇器 片	(1.5)		短い立ち上がりが内傾し、縫合は矢立付上に ある。脚の受け付けは水平で並んでいる。	ナゲ	10YR8/1 凹輪ナゲ	黒、微細を多く含む。	難解	
129 SD1	直唇器 片	(3.0)	(8.6)	小さな直唇器の表石が内傾して立ち上がる。	ナゲ	灰白NT/7 内輪NT/7	底部、中筋を多く含む。 良	1/10	底部未切り 裏格差
130 SD1	直唇器 片	(24.7)	4.30	口縁は外傾してほぼ直線的に開く。口縁は圓 形をして少し上下に變化する。	ナゲ	青黄褐3B6/1 青SP9E6/1	やや黒、中筋を含む。	難解	裏格差
131 SD2	土師器	(6.4)	0.6	(4.0) 扇子の作りで、口縁は外傾して大きめに開く。	凹輪ナゲ	短2.5YR7/6 内輪ナゲ	黒 良好	1/4	底部未切り
132 SD2	上部層	(6.3)	1.2	(5.7) 圆筒直台状の底部から、豊い口縁がトマカ ーに大きめに開く。	凹輪ナゲ	に深い槽2.5YR7/2 内輪ナゲ	黒	1/3	底部未切り
133 SD2	上部層	7.5	1.0	3.2 短い口縁は、上外方にほぼ直線的に開く。外 縫合に火燒れ、底部と口縁の境界は明確。	凹輪ナゲ	短2.5YR7/6 内輪ナゲ	黒 良好		火燒
134 SD2	土師器	7.6	1.8	5.4 初めの口縁は上外方にほぼ直線的に開く。 底部と口縁の境界は明確。	凹輪ナゲ	底10YR9/2 底10YR9/2	黒 良好	2/3	底部未切り
135 SD2	上部層	7.7	1.6	5.5 初めの口縁は上外方にほぼ直線的に開く。 底部と口縁の境界は明確。	凹輪ナゲ	灰2.5YR7/1 底2.5YR7/1	やや黒 良好		火燒
136 SD2	土師器	7.6	1.4	5.9 見込みに済着状況が悪く、平らな底部から短い 底部がほぼ直線的に小さく開く。	凹輪ナゲ	浅黄褐10YR8/4 内輪ナゲ	黒 良好		火燒

()は復元及び残存値

遺物觀察表7 (137~158)

No.	出土地	器種	出土量(cm)	形態・施文	調査(外面) (内面)	色調(外面) (内面)	新土 既成	残存 率	備考
137	SD2	土師器	7.7	1.5 小皿	幅広の口縁は、ほぼ直線的に上外方に開く。 口縁の基盤は薄い。	回転ナデ にぶら直線RYR7/1	黒 黒好	ぼか 光形	
138	SD2	土師器	(7.8)	1.5 小皿	平らな底面から、口縁は直線的に上外方に開く。 口縁の基盤は薄め。	回転ナデ にぶら直線RYR7/3	黒、黒～細砂を含む。 良好	3/4	
139	SD2	土師器	8.3	1.5 小皿	平らな底面から、組めの口縁がほぼ直線的に 上外方に開く。口縁の基盤は薄め。	回転ナデ にぶら直線RYR7/3	黒、黒を含む。 良好	3/4	底部系切り
140	SD2	土師器	8.2	1.5 小皿	平らな底面から、口縁が上外へ直線的に開く。 口縁の基盤は薄め。	回転ナデ にぶら直線RYR7/4	黒、直線的な長矢、黒～細砂を 含む。	3/4	底部系切り
141	SD2	土師器	8.3	1.4 小皿	平らな底面から、組めの口縁が内側して立ち 上がる。口縁の基盤は薄め。	回転ナデ にぶら直線RYR7/4	黒 良好	1/4	底部系切り
142	SD2	土師器	8.4	1.4 小皿	足込みに済普状成形義。平らな底面から、内 側気味に薄めの口縁が立ち上がる。	回転ナデ にぶら直線RYR7/8	黒、細かい長矢、黒～細砂を 含む。	3/4	底部系切り
143	SD2	土師器	(7.7)	1.4 小皿	平らな底面から、組めの口縁が内側して立ち 上がる。	回転ナデ にぶら直線RYR7/8	黒、微細な長石を若干含む。	1/3	底部系切り
144	SD2	土師器	(7.8)	1.1 小皿	非常に堅い口縁が、やや内傾気味に大きいく 開く。	回転ナデ にぶら直線RYR7/1	やや直 良好	1/3	底部系切り
145	SD2	土師器	(8.0)	0.9 小皿	非常に細い口縁が、上外へ大きく開く。	回転ナデ にぶら直線RYR7/3	やや直 良好	1/2	底部系切り
146	SD2	土師器	(1.5)	7.8 坪	足込みに済普状成形義。平らな底面から、直 線的に内側に開く。	回転ナデ にぶら直線RYR7/4	黒、黒～細砂を含む。	1/3	底部系切り
147	SD2	土師器	(1.9)	8.7 坪	平らな底面から、明確に異界を持つ直線的 に立ち上がり。	回転ナデ にぶら直線RYR7/1	やや直、直線的な長矢、直矢、黒 ～細砂を多く含む。	1/3	底部系切り
148	SD2	土師器	(1.3)	9.0	平らな底面から、上外方に開く。	回転ナデ にぶら直線RYR7/6	黒 良好	1/2	底部系切り
149	SD2	土師器	13.7	4.6 坪	足込みに済普状成形義。底盤からほぼ直線 的に上外方に開く。口縁の基盤は薄め。	回転ナデ にぶら直線RYR7/4	黒、黒～細砂を含む。	1/3	底部系切り
150	SD2	土師器	(15.0)	3.6 坪	平らな底面から内側気味に立ち上がり、底盤 で少し外反する。	回転ナデ にぶら直線RYR7/8	黒、黒から細砂、直線的な長石 を少量含む。	1/2	底部系切り
151	SD2	瓦	8.8	1.5 小皿	直角から口縁にかけて内側して聞く。基盤は 厚い。足込みにリダクションの壁を入れる。	ナデ ナデ、端文	RIN/ RIN/	黒、直線的な長矢、細砂を含む。 良好	1/2
152	SD2	瓦	(11.0)	3.3	小振りで、小振りで内側気味に開き、壁も低 い。内面に横方向の柱文を入れる。	ナデ ナデ、端文	RIN/ RIN/	直線 良好	
153	SD2	瓦	(14.0)	3.2	基盤は高く、口縁は大きく開いて直い。内 面に横方向を向いた柱文がある。	ナデ、端須 ナデ	RIN/RIN/ RIN/TSYR7/1	直線 良好	
154	SD2	瓦	(4.7)	9.4	底盤から直線的に上外方に延びる。	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	RIN/ RIN/	やや直、直線的な長矢、直矢～細砂を含む。 既成	2/3
155	SD2	土師器	(8.4)	1.4 小皿	平らな底面から、短い口縁が直線的に上外方 へ傾ける。	ナデ ナデ	RIN/TSYR7/2 RIN/SYR7/1	直線、中砂を含む。 不良	1/3
156	SD2	土師器	(11.6)	3.3 坪	非常に低い円筒状突起を持った直角重心、内 壁にして立ち上がり、底面付近で少し外反する。	回転ナデ にぶら直線RYR7/8	黒SYR6/8 RIN/RYR7/8	やや直、黒～細砂を含む。	1/2
157	SD2	土師器	(12.0)	3.8 坪	足込みに済普状成形義。平らな底盤から内 壁にして立ち上がり、底面付近で少し外反す る。	ナデ ナデ	RIN/RYR7/6 RIN/RYR7/8	中砂を多く含む。 不良	1/2
158	SD2	土師器	(14.0)	4.0 坪	足込みに済普状成形義。平らな底盤から内 壁にして立ち上がり、底面にかけて縦や少し外反 する。	回転ナデ 回転ナデ	RIN/RYR7/8 RIN/RYR7/8	やや直、細砂を含む。 良好	1/4

() は復元及び残存値

遺物觀察表B (159~180)

No.	出 土 場 所	基 準 高 度 (cm)	形態・意 義	調整(外側) (内面)	色調(外側) (内面)	胎 土	焼 成	現 存 率	備 考
159	S02 土師器 灰	(15.2) 3.3 (0.2)	丸込みに優美状形成底。さらな泥庇から内側 して立ち上がり、縁部で大きく外反する。器底 は滑めで、器蓋は低い。	ナダ ナダ	浅黄褐10YR8/4 L=4.7 壁2.5YR6/3	中細、粗砂を多く含む。 不齊	1/3		
160	S02 土師器 灰(底)	(14.8) 2.9 (7.9)	見込みに優美状形成底。さらな泥庇から内側 気泡に立ち上がり、口縁で大きく外反する。器 底は非常に低い。	細軽ナダ 内輪ナダ	灰4.7 3.5YR7/4 壁2.5YR7/6	密、小さい長矢、鉄鉢を右下含 む。	1/3	真跡系切り妻口 压屈	
161	S02 青磁 器	(3.1)	わざかに内輪しながら聞く。内面に櫛目文及 びヘラ推文。端部に各脚を施す。	新青灰白9/8 壁2.5YR5/2	微密 良	細片	難観葉系		
162	S02 青磁 碗	13.4 (3.1)	わざかに内輪しながら聞く。内面に櫛目文及 びヘラ推文。端部に縁脚に上 るジテギテ文。端部に縁脚、外面に縱方向の 櫛目文を施す。	断面灰白N7/ 壁2.5YR7/1	微密 良	1/3	同安窯系		
163	S02 豆鉢 灰	11.7 (0.8)	底部から内側で聞く。内面全体には円周方 向、見込みには下行け線文を施す。	ナダ、階級灰 ナダ、縁文	ISG/ ISG/	良 微密	1/2	西山利作、瀬戸町 のものが大きい。	
164	S02 瓦器 羽垂	18.2 (2.8)	口縁は内輪し、端部は極く薄取り、外周にナ ナシ、縁部に貼付する。	ISG/ ナダ	ISG/ ISG/	中秒を多く含む。とりわけ翼部 を多く含む。	1/10	同内系	
165	S03 土器皿 小皿	6.0 (1.5)	平らな表面から短い刃が内肉脇間に開く。 端部の器壁は薄い。	凹軽ナダ 凹軽ナダ	壁2.5YR6/8 壁2.5YR6/6	やや密、小さい長矢、鉄鉢を 含む。 砂を少量含む。	3/4	虎渦系切口 良好	
166	S03 土器皿 小皿	6.9 (1.5)	平らな底から内側に腰部を持って、直筒的に 上方方に開く。	ナダ ナダ	壁2.5YR6/8 壁2.5YR6/8	中秒を多く含む 良	1/3		
167	S03 土器皿 小皿	7.7 (1.4)	平らな底から想い出様がぼぼと直筒的に上 外方に開く。端部の基礎は薄い。	凹軽ナダ 凹軽ナダ	淡黄褐2.5YR8/4 壁2.5YR8/4	やや密、細かい茎石、鉄鉢を 含む。	1/10	虎渦系切口 良好	
168	S03 白磁 豆皿	(7.6) (2.2)	口尖の小切端で、口縁下部で大きく上方へ膨 張する。	新青灰白10YR8/1 壁2.5YR7/1	微密 良	1/10			
169	S03 白磁 器	(1.6) (6.6)	笠置部分のケズ引しが少なくなく、薄青緑は広 い。外腹は、既存器の外腹は全て削除。	新青灰白9/8 壁2.5YR7/1	微密 良	1/10			
170	S03 白磁 2層 灰	(1.6)	扁平な天井模様から上方へ膨張して下がり、後 に外反する。口縁端部は下方に屈曲する。	凹軽ナダ	ISG/6	密	1/6	天井部、口縁部の 一部に自然釉	
171	包含 土師器 小皿	(6.7) 1.4 (5.5)	平らな底から、明確な腰部をもって、開口	ナダ	淡黄褐2.5YR7/4	中軽、粗妙を含む。	1/4	虎渦系切口	
172	包含 瓦器 2層 灰	(8.0) (1.6) (3.2)	斜傾から天井部にかけて、内側ながら開く。 ナダ、階級灰 ナダ	ISG/4 ISG/4	密 良	1/6	貴賤掛、和風型、 引出作り成形		
173	包含 瓦器 2層 灰	(14.7) 4.3 (3.6)	底部から内側で開き、薄影で若干外反す る。底部三角形の輪高台を貼付する。	凹軽ナダ、階級 ナダ	ISG/6 ISG/6	やや密、繊細を含む。 良好	1/8	同 番の 番号不 分。	
174	包含 瓦器 2層 灰	(21.5) 3.8 (0.5)	土器皿と瓦との中间的な形状で、輪はあま り内傾せず、端部は絶く面出する。	ナダ ナダ	淡黄2.5YR3 ISG/N7	やや密、繊細な長矢、良、微 細砂を含む。	1/10	土師質に近い 良好	
175	包含 白磁 2層 白耳器 (0.5)	(3.7)	内側する腰部から底部が直下する。付け根の 端部に凹窓を造す。	凹軽ナダ 凹軽ナダ	新青灰白10YR8/1 壁2.5YR7/1	微密 良	1/12	17と同じ 備考か 長	
176	包含 白磁 2層 白耳器	(4.1)	外側する輪高下作で、内面に丁度痕が残る。	凹軽ナダ 凹軽ナダ	新青灰白10YR8/1 壁2.5YR7/1	微密 良	1/8	17と同じ一個落ち た。	
177	包含 白磁 2層 灰	(3.1) (8.6)	外腹下及び内底込込み施へた。見込み外 施物部分に無理がある。	凹軽ナダ 凹軽ナダ	新青灰白9/8 壁2.5YR7/1	微密 良	1/2		
178	貴探 青磁 体部 (12.2)	(2.2)	体部で大きくびれる。口縁に近い部分と思 われる。	新青灰白9/8 壁2.5YR7/1	微密 良	細片			
179	包含 青磁 2層 灰	(11.6) (3.4)	ほぼ直筒的に上方方に開く。	新青灰白N7/1 壁2.5YR7/1	微密 良	細片			
180	包含 青磁 2層 灰	(15.8) (2.5)	口縁部内外両面に墨跡。内底に落花文を 施す。	新青灰白N7/ 壁2.5YR7/1	微密 良	1/10	難観葉系		

() は復元及び残存値

遺物観察表9(181~203)

No.	出土 箇所	基盤 (cm)	書類・拓文		調査(外面) (内面)	色調(外面) (内面)	出土 造成	現存 半	参考	
			口絞	鋸歯						
181	包合 青磁	(1.6)	3.2	前面三角形の小さい窓内をテスリ出す。	断面:灰NRE/ 地:青灰SDG/1	暗赤 良	1/5			
182	包合 青磁	(2.8)	2.9	外面に経蓮瓣文	灰白N/8 緑灰7.5GY8/1	良、微細を含む。 良好	1/3	現象裏面		
183	包合 青磁	(2.3)	(3.1)	内部英文、体部に草花文、量付を含め3段全面に施釉する。	灰白N/8 灰白GY8/1	良、微細を含む。 良好	1/3	底部		
184	包合 陶器	(22.9)	(4.2)	斜く内側、口唇は直角り、平底に粗厚をせる。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰黒2.5YR8/1 灰黒	1/6	表面 良好		
185	J.御器 小皿	(6.3)	1.4	4.5	直角か円弧に複数を持って巻き、端部で斜手外反する。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰白4.5-5.5GY8/4 灰白4.5-5.5GY8/4	密 やや良	1/3 追跡手切り	
186	包合 土器蓋	(6.9)	1.6	(5.2)	平らな底部から直線的に上方方に傾く。	ナメ ナメ	灰白4.5-5.5GY8/3 灰白4.5-5.5GY8/3	中筋を含む。 良	1/4 底部手切り	
187	包合 土器蓋	(7.1)	1.4	(5.0)	底部が内凹して上方方に開く。周縁の基盤は薄い。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰2.5YR7/8 灰2.5YR7/8	密、無難な黄石、微～細砂を含む。 良好	1/6	
188	包合 土器蓋	(6.9)	1.6	(4.6)	直角かほぼ直線的に上方方に傾く。口縁の研磨は認められる。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰2.5YR7/3 灰2.5YR7/3	密 良好	1/1 追跡手切り	
189	包合 土器蓋	(7.3)	1.6	5.3	平らな底部から丸い口縁が若干外反気味に上方方に開く。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰2.5YR7/3 灰2.5YR7/3	直 良好	2/3 美加水切羽	
190	包合 J.御器	(7.9)	1.1	5.7	平らで丸い底部から、非常に短く丸い縁が、直線的に上方方に開く。	ナメ ナメ	禮2.5YR6/6 禮2.5YR6/6	中筋を含む。 良	ほぼ 完形	
191	包合 土器蓋	7.0	1.4	6.3	短い口縁が直線的に上方方に開く。全体的に縦縫合は無い。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰2.5YR7/3 灰2.5YR7/3	密 良好	ほぼ 完形	
192	包合 土器蓋	(7.9)	1.6	5.6	厚い底部から、薄い口縁がほぼ直線的に上方方に開く。	同軸ナメ 同軸ナメ	西黄褐2.5YR8/4 西黄褐2.5YR8/4	密 良好	1/2 追跡手切り	
193	包合 土器蓋	7.9	1.2	4.8	見込みに曲唇状次元彫痕。短い口縁がやや内凹して大きく開く。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰2.5YR7/2 灰2.5YR7/2	中筋を含む。 良好	1/2 追跡手切り	
194	包合 土器蓋	8.3	1.5	6.6	短い口縁がほぼ直線的に上方方に開く。	同軸ナメ 同軸ナメ	禮2.5YR7/6 禮2.5YR7/6	密、小さい長筋、種々細砂を少量を含む。 中筋	ほぼ 完形	
195	包合 土器蓋	(6.0)	1.9	4.5	底部から、削形して開く、端部で若干外反する。	同軸ナメ 同軸ナメ	禮2.5YR7/6 禮2.5YR7/6	密 中筋	1/2 追跡手切り	
196	包合 土器蓋	6.1	1.8	4.2	平らな底部から、ほほ筋的に上方方に開く。端部の御脚は短い。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰青禮2.5YR8/6 灰青禮2.5YR8/4	粗、中筋を含む。 不良	1/3	
197	包合 土器蓋	(1.0)	6.4	見込みに曲唇状次元彫痕。非常に短い円盤状高台から内壁突出部に開く。	同軸ナメ 同軸ナメ	禮2.5YR6/6 禮2.5YR6/6	密 良好	2/3 追跡手切り		
198	包合 J.御器	(4.0)	5.6	低い円盤状次元彫痕から、内壁突出部に開き、後に内凹する。口縁の御脚は薄い。	同軸ナメ 同軸ナメ	禮2.5YR6/6 禮2.5YR8/4	密 良好	1/2		
199	包合 土器蓋	(13.3)	4.5	6.3	低い円盤状次元彫痕から、内壁突出部に開き、堆積付近で若干外反する。口縁の御脚は薄い。	同軸ナメ 同軸ナメ	禮2.5YR7/8 禮2.5YR7/8	密 ほぼ良	1/3	
200	包合 土器蓋	(15.0)	3.9	6.0	円盤状次元彫痕から、内壁突出部に立ち上り、堆積で外反する。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰白2.5YR7/2 灰白2.5YR7/2	やや密、良石、良好、細砂を含む。	1/1	
201	包合 土器蓋	(2.8)	6.1	見込みに曲唇状次元彫痕。平らな口縁から内壁にして開く。	同軸ナメ 同軸ナメ	灰2.5YR7/4 灰2.5YR7/4	中筋と複数の筋、微細な粗筋、微砂を含む。 少量化	2/3 追跡手切り		
202	包合 土器蓋	(11.2)	3.4	6.7	やや小振りで、平らな底部から上方方に開く。	ナメ ナメ	中筋を多く含む。 不良	1/6		
203	包合 土器蓋	(12.5)	4.6	6.4	見込みの曲唇状次元彫痕をナメ消し。平らな底部から内壁突出部に開き、口縁で外反する。	同軸ナメ 同軸ナメ	禮2.5YR7/4 禮2.5YR7/3	やや良	2/3 追跡手切り	

() は復元及び残存値

遺物観察表10 (204~224)

No.	出土地	基準	法度(cm)	英語・論文	調査(外国) (内面)	色度(外国) (内面)	板土 鐵込	現存 半	備考	
204	包含	上部器	(13.0) 2.9	(8.6)	蓋合部の底面から上方へ直線的に聞く。基 面付近、器壁は済め。	ナゲ ナゲ	褐SYR7/6 褐黃SYR8/6	中砂を含む。鉄石、石英が目 立つ。 不良	1/6 一段目の粘土質の 輪付で蓋台を作成す。	
205	包含	土師器	(12.9) 3.2	(6.3)	外側が凹んだ底部から内壁気泡に立ち上がる り、ほぼ直線的に聞く。	回転ナゲ 回転ナゲ	褐SYR6/8 褐SYR8/8	黒、無艶な朱石を少含む。 良好	1/3	
206	包含	土師器	(12.1) 3.7	(9.4)	透割から声調的に上方方に開き、端部で若干 外反する。	回転ナゲ 回転ナゲ	灰白TSYR8/2 灰白SYR6/1	中砂を含む。黒石、石英が目 立つ。 やや不良	1/5 蓋部を切る。	
207	包含	土師器	(2.1) 1.8	(8.8)	平らな底部から上方方に聞く。	回転ナゲ 回転ナゲ	褐SYR7/6 褐SYR6/6	黒、無艶な朱石を含む。 良好	1/4	
208	包含	土師器	(13.1) 4.0	6.8	底部から内側して聞き、端部付近で外反す る。口縁の基部は済み。	回転ナゲ 回転ナゲ	褐SYR6/5 褐黃7.5SYR8/4	黒、黒～細砂を含む。 やや良	1/2 蓋部を切る。	
209	包含	土師器	(13.0) 4.6	6.4	平らな底面から、直線的に上方方に聞く。	回転ナゲ 回転ナゲ	褐黃7.5SYR8/4 灰黃C5Y7/2	やや黒、細かい長石。微～細 砂を少量含む。 良	1/3	
210	包含	土師器	(13.7) 3.8	(7.1)	底部から内壁気泡に聞き、窪部で若干外反 する。口縁の基部は済み。	回転ナゲ 回転ナゲ	褐SYR7/6 褐SYR7/6	黒 良好	1/3	
211	包含	土師器	(14.2) 3.6	(9.6)	見込みに椎骨形成部。底部から内壁気泡 に立ち上がり、端部付近で若干外反する。	ナゲ	褐SYR7/4	手砂を含む。	1/3	
212	包含	須恵器	(12.2) 3.6	(5.6)	立ち上がりは内側し、端部は厚壁。矧い受け 継ぎはほぼ水平に延びる。	回転ナゲ 回転ナゲ	灰白TSY7/1 灰白TSY7/3	黒、細かい長石、微砂を多く 含む。 良	1/6 土師質	
213	包含	須恵器	(1.7) 0.9	(4.4)	透割に小さい板窓合を貼付する。	回転ナゲ 回転ナゲ	明青B5Y7/1 青灰B5P8T/1	黒、無艶な朱石を少量含む。 堅厚	1/6	
214	包含	須恵器	(25.1) 4.6		口縁は直線的に上方方に開き、口唇は斜め に面取して上方に拡張する。	回転ナゲ、ナ ギ、椎頭圧 回転ナゲ、ナギ	褐、細かい長石、微砂を含 む。 堅厚	1/12		
215	包含	須恵器	25.5	(2.0)	口縁は大きく上方方に開き、端部を上方につ む。	回転ナゲ 回転ナゲ	青灰A9P6/1 青灰A9P6/1	黒、微艶な長石、微～細砂を 少含む。 堅厚。		
216	包含	瓦器	(8.1)	(1.7)	6.4	底部から口縁にかけて内側して聞く。見込み に椎文が残る。	ナゲ、微硝斑 ナゲ	褐N8/ 褐N8/	鐵衛 良	1/6
217	包含	瓦器	(8.7)	(1.0)	(7.2)	直角から口縁にかけて内側して聞く。横ナゲ の跡跡と並ぶとの接糸が非常に明瞭。	ナゲ、微硝斑 ナゲ	褐N4/ 褐N4/	中砂を多く含む。 不良	1/5
218	包含	瓦器	(14.0)	(3.9)		直角から口縁にかけて内側して聞く。内面見 込み部は平行。体部は直角方向に椎文が残る。	横ナゲ、指擦斑 ナゲ	灰白TSY8/2 褐N4/	鐵也 良	1/5 頭頂の吸着がやや 不十分。
219	包含	瓦器	(13.8)	3.5		直角から口縁にかけて内側して聞く。内面見 込み部は平行。体部は直角方向に椎文が残る。	横ナゲ、指擦斑 ナゲ	褐N4/ 褐N4/	鐵也、微砂を含む。 良	1/8 外面は同者の吸着 が助長見られない。
220	包含	瓦器	(14.2)	(1.0)		直角から口縁にかけて内側して聞く。体部横 方向に椎文が残る。	横ナゲ ナゲ	褐N4/ 褐N4/	鐵衛 良	1/6 頭頂の吸着が不十 分。
221	包含	瓦器	(15.4)	(3.9)		直角から口縁にかけて内側して聞く。体部横 方向に椎文が残る。	指擦斑、ナ ギ	褐N4/ 褐N8/	鐵也 良	1/5
222	包含	瓦器	(14.4)	(4.1)		直角から口縁にかけて内側して聞く。体部横 方向に椎文が残る。	指擦斑、横ナゲ ナゲ	褐N8/ 褐N8/	鐵也 良	1/4 頭頂の吸着が不十 分。
223	包含	瓦器	(2.0)	(4.4)		直角から内側して聞く。口唇の追化が進む。 椎文は磨损のため不明。	ナゲ、微硝斑 ナゲ	灰白TSY7/1 灰白TSY8/1	やや黒、細かい長石、微～細 砂を含む。 良。	1/6 透割の吸着がほとんど 見られない。
224	包含	瓦器	15.1	(3.2)	4.2	しつかりした條高台を貼付する。見込みに方 向を変えた平行の椎文。口縁部は横方向に ヘリガタ。	指擦斑、ナ ギ	褐N4/ 褐N4/	鐵也、微砂を多く含む。 良好	3/4 吸着吸着が良好。 和型。

() は復元及び残存値

遺物観察表11(225~245)

No.	出 土 場所	器種	法基(cm)			形態・施文	調査(外面) (内面)	色調(外面) (内面)	始十 度成	現存 半	備考			
			口径	高さ	底径									
225	包含	灰瓦	(16.6)	(4.4)		口縁は内側、内側し縁部を軽く削取り。外面に押付を付す。	ナゲ ナゲ	緑灰N3/ 緑灰N3/	緑密、雲母、長石を含む。 良	1/12	河内系			
226	包含	瓦質	(20.5)	(3.4)		口縁は内側、内側し縁部を軽く削取り。外間に押付を付す。	ナゲ ナゲ	灰白N8/ 灰白N4/	やや老、緑かい長石、薄へ鉛 等を含む。 良	1/16				
227	包含	青白磁				明神灰色の生地に白色の浮文が浮き出る。 風の見込み部に墨いわゆる。	断面:灰白N8/ 外表面:青白M3/	緑密	細片					
228	包含	白磁	3層 瓶	(1.5)		口縁部を軽く外方につまみ出す。	断面:灰白N8/ 外表面:白10W1/	緑密	細片					
229	包含	白磁	3層 瓶	(16.6)	(2.2)	*縁部の口縁を削つ。	断面:灰白N8/ 外表面:白2.5GY8/1	緑密	1/16					
230	包含	青磁	3層 瓶	(3.0)		口縁端沿が大きく外反する。外面に縦擦弁文	灰白N8/ 外表面:オーリーブ2.5GY8/1	粗、鉛跡を含む。 良好	細片	難泉系				
231	内穴	青磁	3層 瓶	(1.5)		外面上に縦擦弁文	断面:灰白1.5Y7/1 外表面:オーリーブ2.5GY8/1	緑密	細片	難泉系				
232	包含	青磁	3層 瓶	(6.0)		縁の広い縦擦弁文が浮き出す。足込みに指掛け文を有す。高台外唇は施釉。蓋付1無釉。	断面:灰白N8/ 外表面:オーリーブ2.5GY8/1	緑密	1/6	難泉系				
233	包含	青磁	3層 瓶	(2.8)	6.1	割りだし高台。高台外唇は施釉。蓋付1無釉。足込みに指掛け文。体部との境界に界溝。	断面:灰白N8/ 外表面:オーリーブ2.5GY8/1	緑密	1/8	難泉系				
234	包含	青磁	3層 瓶	(14.3)	(3.6)	外面上に縦擦弁文	断面:灰白N8/ 外表面:オーリーブ2.5GY8/2	緑密	1/10	難泉系				
235	包含	青磁	3層 瓶	(3.1)		外面上に縦擦弁文	断面:灰白N8/ 外表面:オーリーブ2.5GY8/1	緑密	1/10	難泉系				
236	灰胎1	灰陶器	TP-2	6分	(3.3)	小さい立ち上がりは内傾し、縁部は丸く付ける。短い受け脚は上方方に廻ら。	横ナゲ 横ナゲ	灰白N7/ 黄灰SRP5/1	粗、鉛跡を含む。 良好	細片				
237	灰胎1	灰陶器	TP-1	1	(6.9)	底部で大きく底曲し、口縁部は丸く付ける。底面内面に、粘土を厚く重ねて輪郭。	横ナゲ 横ナゲ	灰白N7/ 黄灰SRP5/1	粗、鉛跡を含む。 良好	細片				
238	灰胎1	灰陶器	TP-1	身	(1.7)	内側を下給高台を付する。	ヘラ削り、ナゲ 凹輪ナゲ	灰白N8/ 灰白N7/	毛、中～細砂を含む。 良好	直形 底部ハゲ凹輪調整				
239	灰胎1	上縁器	TP-2	小皿	(8.1)	(1.1)	(6.4)	底部からやや内側へ開く。口縁部は薄く仕上げる。	ナゲ ナゲ	灰白10YR8/2 5YR7/6	やや粗、中～細砂を含む。 やや不良	1/3	高部未切	
240	灰胎1	灰陶器	TP-2	小皿	(9.2)	(1.5)	(6.4)	底部から、やや長めの口縁が背筋的に上昇する。方に開く。堆積はよく土上げる。	横2.5YR8/6 5YR7/6	やや粗。細砂を含む。 良	1/4	高部未切		
241	灰胎2	牛牛	TP-2	左牛	(15.0)	(4.0)	底部から緩やかに外反し、口縁部は丸く仕上げる。口縁外側に多条状施釉(複数7条)が施される。口縁部内側にキズがある。	ナゲ ナゲ、ハケ	灰白1.5YR7/3 5YR7/6	やや粗。見え、チャート、中～細砂を多く含む。	1/8			
242	灰胎2	牛牛	TP-3	善	(9.1)	(4.3)	底部から緩やかに外反し、口縁部は丸く仕上げる。底部外側に多条状施釉(複数4条)がある。	ナゲ ナゲ	5YR7.3YR7/3 5YR7.3YR7/3	やや粗。中～細砂を多く含む。	1/6			
243	灰胎2	牛牛	TP-3	善	(8.6)	(5.3)	底部から緩やかに外反し。口縁部は丸く仕上げる。口縁外側に小さなキズがあり。底部外側に多条状施釉(複数12条)がある。	ナゲ ナゲ	5YR7.3YR7/3 5YR7.3YR6/3	粗、見え、チャート、中～細砂を多く含む。 良	1/16			
244	灰胎2	牛牛	TP-3	善	(4.9)	内傾する肩部から縁やかに立ち上がる。先部を點付し、大きめの目字を入れる。開口部の上(複数2条)と(身)に多条状施釉がある。	ナゲ ナゲ、脂頬止	5YR7.3YR7/3 5YR7.3YR7/2	やや粗。チャート、中～細砂を含む。	1/3				
245	灰胎2	牛牛	TP-2	善頭皿	(11.0)	(7.9)	頭部から肥厚させた口縁が緩やかに外反し。頭部は横ナゲして薄く仕上げる。外縁部と口縁部に複数の底凹孔に浮文を貼付し、右側から横ねじ。浮文下に取扱方向への指掛け跡を有す。	ナゲ ナゲ	5YR4/ 5YR4/	粗、チャート、奥石、鉛跡を多く含む。	1/3			

()は復元及び現存値

遺物観察表12 (246～264)

No.	出土地	器種	法長(cm) 幅高 厚高 底径	形態・施文	調整(外側) (内面)	色調(外曲) (内面)	出土 地城	残存 率	備考
245	試掘2 TP-3	弥生 壺	(14.4) (2.0)	口縁は外傾して開き、端部付近に半状のもので割れ、貫通させる(複合3)。口唇は施磨削し、細部状に込み、周縁にナメを施す。	ナデ、縦ハケ ナデ	灰白10YR8/2 灰黄褐10YR6/2	やや粗、中～細妙を多く含む れ。 良	1/16	
247	試掘2	弥生 TP-3 壺		横方向に6条の平行実縫を施し、その上下に二重式器の内形容を施す。	ナデ	に近い黄褐10YR7/3 に近い黄褐10YR7/3	やや粗、中形を含む。 良	粗片	
248	試掘2	弥生 TP-3 壺		外底にヘラ彫き+重疊様の円形文(本葉文)を施す。	ナデ	明褐色2.5YR8/6	やや粗、中形を含む。 良	粗片	
249	試掘2 TP-3	弥生 壺	(13.6) (1.8)	縦やかに内萼する。器底に二列の到着文を施す。横方向に6条の平行実縫を施し、その上下に二重式器の内形容を施す。	ナデ、横ハケ、 ナデ	に近い褐2.5YR6/4 に近い褐2.5YR6/4	やや粗。粗～中形を含む。 良	1/6	
250	試掘2 TP-3	弥生 壺	(26.8) (1.2)	ねじれ近で大きく外反する。口唇は施磨削し、縦ハケ 一帯の沈没、内側にキザを施す。	縦ハケ	に近い黄褐10YR7/3 に近い黄褐10YR6/2	やや粗。中～細妙を含む。 良好	1/16	
251	試掘2 TP-2	弥生 壺	(23.1) (0.8)	横方向に4段に亘り開き、口縁は縦磨削し、縦ハケ 付して肥厚させ、内腹から垂状のもので割れ し貫通する(複存6)。その下に二重の小さな V字切欠を施す。口唇は外傾して田巻 状に込み、外側にキザを施す。	縦ハケ	に近い黄褐10YR7/4	やや粗。中～細妙を含む。 良好	1/12	
252	試掘2 TP-3	弥生 壺	(18.8) (2.5)	縦やかに内萼して開き、口唇は表面に施 薄款に込み、外底にキザを施す。	ナデ	褐2.5YR8/1	やや粗。粗～中形を含む。 良	1/6	
253	試掘2 TP-3	弥生 壺	(7.1) (13.3)	薄方作いで、縦線で大きく外反する。外底 口縁部付近に断面三角形の小さな突起を 盛り出す(複存6)。	ナデ、縦ハケ ナデ	褐7.5Y2/1 褐7.5Y2/1	やや粗。粗～中形を多く含む れ。 良	1/6	
254	試掘2 TP-3	弥生 壺	(4.2) (5.5)	平らな底から外縫に立ち上がり、後に若干 外反する。	縦ハケ ナデ	に近い褐2.5YR5/4 褐2.5Y5/1	やや粗。粗～中形を含む。 良好	1/6	
255	試掘2 TP-3	弥生 壺	(0.8) (0.6)	平らな底から外縫に立ち上がり、後に外反 する。	縦ハケ ナデ	褐2.5Y8/3 褐2.5Y8/3	やや粗。粗～中形を含む。 やや良	1/4	
256	試掘2 TP-1	弥生 壺	(41.7) (12.3)	内外両面とも機械溶接による縫を認め、口唇は 丸く仕上げる。外縫に粗度の突起を黏付する。 蓋の単位は11箇。	ナデ ナデ	灰10R5/6 灰10R5/6	やや粗。粗～中形を含む。 堅致	1/12	
257	試掘2 TP-1	萬葉2 内壺 ハマ	1.1 (0.6)	側面は表面なし、平面型シーナツ状の凹凸部 である。	未調査	褐2.5Y6/1 褐2.5Y6/1	第、半～細妙を含む。 良	1/4	上下面とも非常に 供應質
258	試掘2 TP-1	萬葉2 豪付	(1.4) (8.8)	断面三角形の蓋裏台を削り出す。高台内側 及び豊付け縫の日袖へが。豪付中央部は同 み、斷文である。	削出灰白SR	泥、 堅	1/6		
259	試掘2 TP-2	万葉2 刀部器	(2.7) 4.6	平らな底部から内萼して立ち上がる。型試造 の跡があり。外縫に數分厚巻。	回転ヘリカジ 回転ナガ	黄褐10YR3/1 灰10YR8/2	當、粗妙を若干含む。 やや不良、軟。	1/2	外縫にスス付着
260	試掘2 TP-2	萬葉2 縛縫	(22.6) (6.9)	内外両面とも縦磨削に凹面を認める。口唇は 丸く仕上げる。外縫に断面三角形の突起を認 めず。蓋の単位は14箇。	ナデ ナデ	に近い黄褐10YR4/1 に近い黄褐5YR4/4	やや粗。微～細妙を含む。 堅致	1/10	
261	試掘2 TP-2	萬葉2 体	(14.2) (4.8)	内萼して立ち上がり、口縫は直線的に縦く仕 上げる。	摩擦のため不規 則	に近い褐2.5YR7/4 に近い褐2.5YR7/4	やや粗。微～細妙を含む。 不良、軟	1/10	
262	試掘2 TP-2	土師器 高井	(5.4) (13.3)	刃部は外傾し、縫部で若干外反する。縫 跡で縫隙を残し、口唇上方に施す。内唇側は 上底部の底縫に縫を持つ。	横ナデ 横ナデ、ヘラ	褐5YR7/6 褐5YR7/6	やや粗。中～細妙を含む。 やや良	1/3	
263	試掘2 TP-2	土師器 肩縫	(15.3) (3.4)	口縫は外傾し、縫部で若干外反する。	回転ナデ 回転ナデ	に近い黄褐10YR7/3 に近い黄褐10YR7/3	やや粗。微妙を少含む。 やや不良	1/4	
264	試掘2 TP-4	土師器 壺	(22.3)	刃部は外傾し、肩縫で内萼する。縫部 外縫に断面三角形の突起を施す。指押さん。	回転ナデ 回転ナデ	泥、 泥	當。 良	1/8	

() は復元及び残存値

第3章 まとめ

今回の調査での出土遺物は、中世前期の12世紀から14世紀の範囲に収まるものが大半を占め、遺跡の存続時期もほぼその範囲であり、中心時期は13世紀代と考えられるが、試掘調査を含めると弥生時代前期から近世までの遺物が一定量出土している。そのため、ここでは大まかな時代別に概観していきたい。

第1節 弥生時代

今回の調査において出土した弥生土器(241~255)は、その全てが試掘調査2のTP-2及びTP-3の水成堆積層からであり、本調査対象地からの出土は一点もなかった。器面の多条絞線帯がヘラ描きの個体と櫛描きの個体と両方が見られることから、概ね前期末~中期初頭にかけての遺物と見られるが、TP-3出土の2点については中期中葉もしくは後葉に下がる可能性がある。

これらの弥生土器は全て流れ込みによる。当遺跡付近における河川(鏡川)の上流方向は北東~北方向と見られる。この方向に存在する当該期の遺跡としては、柳田遺跡と鴨部遺跡が想定される。249の壺胴部のような比較的大きめの破片も含まれることから、この両者のうち、より位置が近い鴨部遺跡(直線距離500m強)からのものである可能性がより高い。それ以外にも未知の遺跡が存在する可能性もあるが、今までの知見に基づく限りはこれ以上のこととはいえない。

第2節 古墳時代から古代

この時期の遺物のうちで、土師器は試掘調査2で出土した古墳時代の鉢(261)と高坏(262)の2点のみであり、いずれも流れ込みと考えられる。他の遺物は全て7~9世紀代の須恵器で、試掘調査での流れ込みと見られるものもあるが、本調査における包含層や遺構出土のものが一定量存在する。今回の対象地においては確実に古代の遺構と断定できるものはなかったが、今回の対象地からあまり遠くない場所に古代の遺跡が存在している可能性は高いと思われる。

第3節 中世

(1) 遺物

出土遺物が圧倒的に多く、今時調査の中心となる時期である。量的には中世土師器が最も多く、土師器に比べると量的には少ないものの、貿易陶磁、瓦器・瓦質土器、中世須恵器等の広域流通品も出土している。ここでは、まず広域流通品について概観してから、土師器について述べていきたい。

- 貿易陶磁 -

今回出土したものを可能な限り分類した結果は以下の通りである。

白磁碗(II類、IV類、V類、IX類)、III(IX類)、四耳壺(III-2類)

青白磁皿、龍泉窯系青磁碗(I-2類、I-3類、I-5類)、小碗

同安窯系青磁碗、皿

以上、中世前期の12世紀～14世紀代に位置づけられる遺物でしめられているが、その内でも13世紀代の陶磁器の割合が若干高い。青花など中世後期の貿易陶磁は見られなかった。

- 瓦器・瓦質土器 -

今回出土した瓦器碗には、在地産の可能性のある炭素の吸着が不充分な遺物も少なからず見受けられるが、基本的には和泉型及びその模倣品であると考えられる。224など12世紀代後半の搬入品と見られる遺物も見られるが、大半は13世紀代の遺物である。

瓦質羽釜(三足釜)については、胎土から見て明らかに搬入品と見られる164、225等は13世紀に位置づけられようが、焼成・調整等在地産と見られるものもあり、それらについては14世紀に下がる可能性もある。

- 陶器・中世須恵器 -

今回の出土品には備前焼の製品が全く見られない。中世後期の遺跡から出土する広域流通品では一定量を占めるはずの備前焼製品が見られないということは、貿易陶磁の出土傾向と同様に、当遺跡の存続期間の下限を考える上で、消極的ではあるが一つの根拠となろう。

東播系(片口)鉢については口縁部の残存する130、214は何れも12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。また、口縁部ほど確実な根拠とは言い難いが、底部のみが残存する個体についても、立ち上がり部内面の形態からみて、12～13世紀代の遺物と見られる。

- 土師器 -

これまでに見てきた広域流通品から考えると、当遺跡の存続期間は12～14世紀と見られ、土師器についてもほぼ同時期の遺物が主体であると考えられる。今回出土した小皿及び壺のうち、底径、器高、底径の全てを計測可能な個体(復元口径・底径を含む)は小皿89点(小壺を含む)、壺49点である。

底部の切り離しについては、壺・小皿の別なく、観察可能な遺物の全てが糸切りであり、ヘラ切りのものは全く見られない。また、底部の形態については円盤状高台(平高台)を持つものが散見される。小皿形態については、立ち上がりが垂直に近いという点のみであり、高台という呼称が必ず

しも適切ではないかもしれないが、坏形態については、平らな底部とは別に高台を明らかに作り込んでいるものも見受けられる。27、96、199等がそれで、9、65、109、197、198も前者ほどではないが、高台を意識して形成しているものといえよう。これらの個体は体部下部に丸みをもち、概ね池澤分類の坏K類〔池澤、2004-2〕にあたる。見込み部の渦巻状成形痕をナデ消さずに残すものが多く、ナデ消した個体においても、完全に消えずに残っていることから、前代の円盤状高台碗との間に直接の系譜的つながりはないものと考える。

次に、先の項で少し触れた内面見込みに残る渦巻状成形痕であるが、小皿形態については89点のうち成形痕の残るもののが13点存在する。坏形態については成形痕の残るもの23点、及びナデ消しが弱いため少し残るもの2点が存在し、ほぼ半数を占める。小皿形態において成形痕の残存する個体が量的に少ない理由としては、径が小さく、成型が難になりにくいため成形痕自体が残りにくくという側面と、成形後のナデ消しが容易であるという側面との二つが考えられる。

このような成形痕については、熊本県内の出土例についての論考がある〔美濃口、1994〕。そこでは、見込み部の調整を以下の四つに分類している。

- ・ a類 軽くナデるもの。成形が丁寧で元々渦巻状成形痕が殆ど生じていない段階。
- ・ b類 中心部の狭い範囲を強くナデるもの。渦巻状成形痕が周辺部に残る。
- ・ c類 見込み全体を一定方向に何度も強くナデるもの。渦巻状成形痕は生じているものの消されていると考えられる。
- ・ d類 未調整のもの。渦巻状成形痕がはっきり残る。

上の熊本県例では、12世紀後半までは全てa類で占められるが、12世紀末に大きな画期が見られ、c類主体に変化する。そして、13世紀初頭にb類、13世紀前半から中葉にd類が出現し、13世紀末～14世紀前半に至って、坏ではd類が主体、小皿においてもd類が増加し、a類と半々程度になる。

本遺跡の出土遺物に上の熊本県例をそのまま当てはめることは勿論できないが、細かい年代を別にして考えるならば、大まかな傾向は似通っていることが推察できる。本遺跡の出土遺物について比較的摩耗しており、見込みのナデ調整を細かく観察できていないが、渦巻状成形痕が残存している個体と、残存していない個体との間の移り変わりについて、以下のような大まかな傾向を想定することは許されそうである。

- ・ 坏 渦巻状成形痕のあるものとないものとがほぼ半々であり。本遺跡の存続時期を12～14世紀とするならば、その中間の時代の13世紀代に画期があるものと考えられ、それを境にして前半と後半に分けられよう。勿論、遺跡の存続期間の各時期を通じて、遺物が常に一定の割合で出土することは、あり得ないが、少なくとも12世紀以前や14世紀以降に画期がくるほどの大きな偏りは生じないとみてよかろう。ただし、このような変化は漸次的なものであると考えられ、ある時期には成形痕のある個体とない個体とが併存していたと考えられる。

- ・小皿 壺に比べて、渦巻状成形痕が残る個体の割合が少なく、この点において壺と異なっているが、少なくとも残存している個体については、後半の時期に属する可能性が高い。

土師器小皿・壺集計表（単位はcm）

		渦巻状成形痕のない個体			成形痕の残る個体			全 個 体		
		個体数	中間値	算術平均	個体数	中間値	算術平均	個体数	中間値	算術平均
小皿	口径	76	7.60	7.53	13	7.60	7.57	89	7.60	7.53
	器高		1.40	1.42		1.40	1.44		1.40	1.43
	底径		5.50	5.49		5.10	5.22		5.50	5.45
壺	口径	24	13.15	13.00	25	13.80	13.87	49	13.70	13.44
	器高		3.80	3.82		3.80	3.85		3.80	3.83
	底径		7.05	7.12		7.90	7.79		7.60	7.46
全体		100			38			138		

上に示した表は土師器小皿、壺の法量の集計表である。異常値の影響を少なくするために中間値を使用したが、念のため通常の算術平均も表示している。また、ナデ消しの痕跡を観察できる2個体については、便宜上ここでは成形痕の残る個体の方に分類した。また、小皿には観察表において小壺と記載した2個体も含めて集計した。

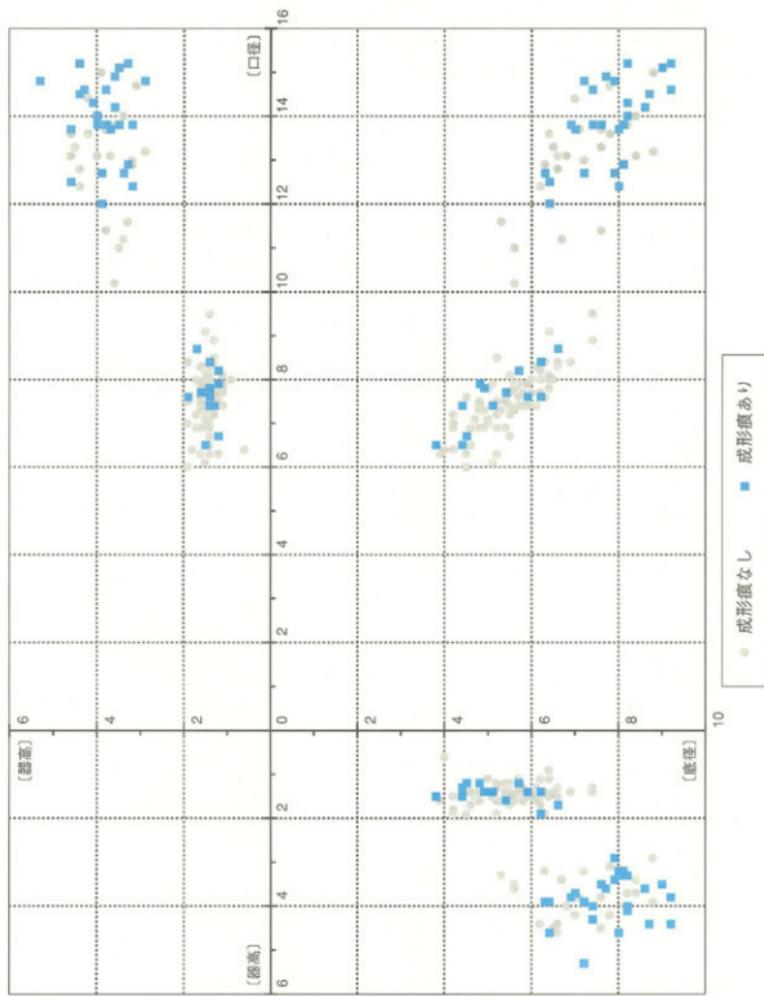
法量を比較してみると、まず、小皿形態においては、渦巻状成形痕の残る個体群と、残らない個体群との間で差のみられるのは底径のみであり、成形痕の残る個体群の方が0.4cm小さい(残らない個体群の93%の大きさ)。この結果だけを見ると、成形痕の残る個体は口縁の開きがやや大きいとも考えられる。しかしながら一方で、次ページの法量分布表を見る限りでは、分布域に殆ど差は見られないため、このような結論に結びつけるのはやや乱暴であると考える。従って、小皿に関しては、渦巻状成形痕の有無と法量との間に意味のある相関関係は認められないという結論になる。これは、時代が下っても両者が併存して存在し、完全には切り替わらないためであると見られ、成形痕の残る個体が優勢になることは、少なくとも本遺跡の存続期間中には最後までなかったものと見てよからう。

壺形態においては、低い円盤状高台を持つ壺Kの殆どに渦巻状の成形痕が残存しているため、集計ではその影響が若干出ている。高台のある分、集計では器高が高めに、底径が小さめになっているが、念のためそれらの個体を除いて集計しても、その変化の幅は0.1cm前後であり、結論に大きく影響を与えるものではなかった。

成形痕の残存する個体群と、そうでない個体群との法量を比較すると以下のような傾向が指摘できる。次ページに示した法量分布表においても、重なり合っている部分が存在するとはいえ、小皿形態の場合とは異なり、両者の分布域には明らかな偏りが存在している。このことから考えても、渦巻状成形痕の有無と法量との間には、ある程度の相関関係が存在するとみてよからう。

- ・口径・・・成形痕の残る個体群の方が0.65cm大きい(残らない個体群の105%の大きさ)。
- ・器高には殆ど差が見られない。

土師器环・小皿法量分布図（単位はcm）



・底径・・・成形痕の残る個体群の方が0.85cm大きい(残らない個体群の112%の大きさ)。

上記のような点から、坏形態においては、渦巻状成形痕の残る個体の特徴は、そうでない個体と比較してより扁平なプロポーションを持ち、体部から口縁部にかけての外傾が若干小さい傾向にあると考えられる。以上、本遺跡出土の土師器について、ここまで述べてきたことの結論は以下の3点である。

1. 見込み部の渦巻状成形痕については、その有無が時期差を反映し、それは坏形態においてより顕著であること。
2. 坏形態においては渦巻状成形痕の有無と法量との間にある程度の相関関係が存在すること。
3. 上の2点を総合して、坏形態においては、前半期から後半期にかけて器高の変化を伴わずに、口径・底径とともに増大し、より扁平になる傾向が見られること。

上記の3点の結論が、本遺跡と存続期間の重なるほかの遺跡においてもみられる普遍的な傾向であるかどうかということについては、時間的な制約もあり確実な結論を出すことができなかった。

(2)遺構

今回の調査においては、多くの遺構を検出したが、ピットや建物跡に関しては遺物量も少ないものが多く、特に建物跡の錯綜している部分で検出したSB5～SB8については図化できる遺物が存在しなかった。従って、全ての遺構についての時期区分は困難であり、ここでは比較的時期の判別しやすい遺構を中心に述べていきたい。また、出土遺物は概ね12～14世紀の間に分類できるが、検出遺構では確かに12世紀以前と判断できる遺構は存在しなかった。

井戸跡SE1は、SD2、SD3を壊して築成されており、今回の検出遺構では最も新しい時期に属すると考えられる。また、出土小皿の口径も小さく、14世紀中葉もしくはそれ以降の遺構であると考えられる。

各建物跡については、重なって検出されたものが多いため、本来は数時期に細分されようが、出土遺物も少なく、細かい時期区分は困難である。その内で遺物の出土した遺構に関しては、建物の中軸線方向が磁北に近いSB1、SB4、SB11（及びSB10）については、遺跡の存続期間の後半にあたる13世紀後半から14世紀頃の遺構、やや東偏するSB6、SB9についてはそれに若干先行する遺構であるとみられる。また、SB2、SB3については、出土遺物のみで考える限り他の遺構と大きい時期的な差は考えられないが、他の遺構とは中軸線方向が大きく異なるため、共存していたとは考えにくい側面がある。出土遺物から見て他より先行するとは考えられないため、本遺跡の存続期間では終末期に当たるSE1と同時期の遺構としてひとまず考えるべきであろう。

橋列については、軸線方向及び直行軸方向がほぼ同一のSA1、SA3については13世紀代の遺構と見られる。SA2については出土遺物も殆どないため確かなことは言い難い。

土坑・ピットのうち、遺物が比較的多く出土した遺構に関しては S K 3、S K 4、P 6、P 23 が13世紀代の遺構、P 3、P 29については13世紀後半～14世紀の遺構として位置づけられよう。

溝跡については、ほぼ13世紀代～14世紀初めに位置づけられようが、その中では中軸線がほぼ磁北方向の S D 3 がやや遅い時期であると思われる。S D 4 については出土遺物が認められなかつたため確実なことは言い難いが、中軸線方向からみると S D 3 と関連する可能性がある。S D 1 及び S D 2 については S D 1 の方が若干先行する可能性があるが、断定はしがたい。

第4節 近世以降

この時期の遺物は、本調査対象地で 2 点、試掘調査 2 の対象地を含めても 10 点以下であり、量としてはあまり多くないため、今時対象地のこの時期における人間の居住については否定的な結果といわざるを得ない。中世段階に存在した集落は場所を移し、耕作地として利用されるようになったと考えられる。

S B 10 から近世遺物が 1 点出土しており、そのまま考えると近世の遺構とすべきだが、後世の混入であるとみられるため、中世の項で扱った。

第5節 終わりに

最後に本遺跡の性格について述べておきたい。ほかの時代の遺物も出土しているとはいえ、遺物の出土傾向から考えて、中世前期の鏡川下流域の拠点的遺跡としてとらえるべきであろう。ただし、検出された遺構にはあまり大規模なものが見られないため、中心的な居館等の建物は付近に存在していたものと考えられる。また、この時期の神田地区については史料的な制約もあり遺跡を形成した主体についての具体像はつかみにくい。そのため、現時点で考えられる観点について以下のような若干の点を指摘するにとどめておく。

- ・ 遺構の存続時期がほぼ鎌倉時代に限定されることから、鎌倉幕府と結びついた在地勢力との関連性。
- ・ 古代の須恵器の出土も見られることから、古代からの莊園との関連性。これについては平安時代後半から院政期に位置づけられる遺物が殆ど見られないことが、否定的な材料になろう。
- ・ 南側の鷲尾山系を越えて、現在の春野町方面に至る峠道の北麓という交通の要所。交通の面については河川交通も考えに入れる必要があるが、当時の鏡川(及び神田川)河道の様相については想像の域を出ないため確かなことはいえない。

現在のところ、可能な推論については上記のようなものであり、それ以上の推論については今後の史料の増加を待ちたい。なお、現地付近は急速に都市化が進み、中世的景観の残滓は急速に失われている。機会を逃さず積極的な資料の収集が望まれる。

最後になるが、現地調査から調査報告書の発行までに10年弱の時日が経過してしまったことについて、お詫びを申し上げ、結びとしたい。

参考文献

- 橋本久和『中世土器研究序論』（真陽社、1992）
松田直則・廣田佳久・前田光雄『具同中山遺跡群 第1分冊』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集（1992）
美濃口雅朗『熊本県に於ける中世前期の土師器について』中世土器の基礎研究X、（日本中世土器研究会、1994）
森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会『太宰府陶磁器研究 森田勉氏遺稿集』（1995）
中世土器研究会『概説 中世の上器・陶磁器』（真陽社、1995）
中村浩『須恵器集成図録第1巻 近畿編1』（雄山閣、1995）
中村浩『須恵器集成図録第6巻 捕遺・索引編』（雄山閣、1997）
廣田佳久『上美多岐遺跡』佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集（1997）
出原恵三『四国地域の様式編年 5 土佐地域』弥生土器の様式と編年 四国編（木耳社、2000）
廣田佳久・岩本繁樹『野田遺跡I』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第73集（2002）
久家隆秀・今田充『千本杉遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第87集（2004）
池澤俊幸『土佐における広域分布品の様相』中世西日本の流通と交通（高志書院、2004-1）
池澤俊幸『四国における古代後期から中世の土器様相』中近世土器の基礎研究XⅦ（日本中世土器研究会、2004-2）

写 真 図 版



1. 試掘 1 及び本調査対象地全景（南から）

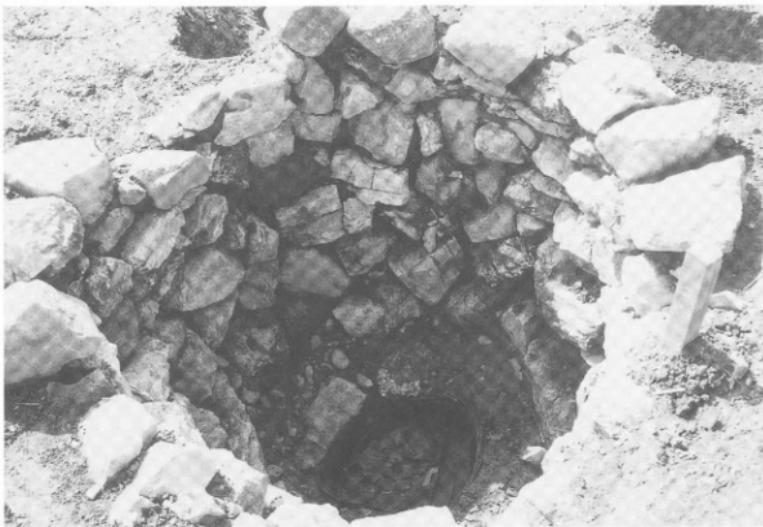


2. 試掘 2 調査対象地全景（南から）

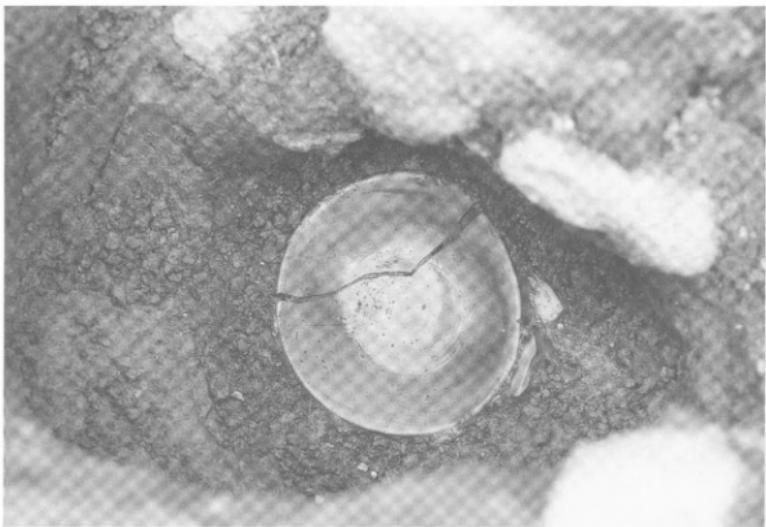
写真図版 2



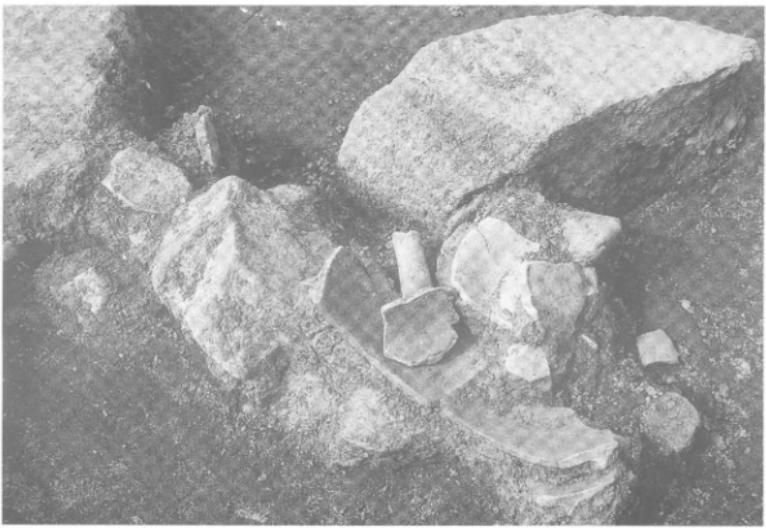
3. 溝跡完掘状況（南から）



4. S E 1 完掘状況（北から）

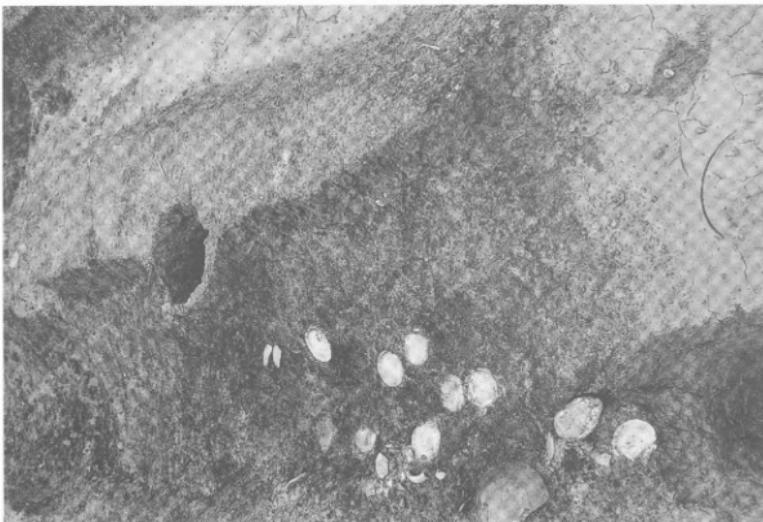


5. 遺物出土状況



6. 遺物出土状況

写真図版 4



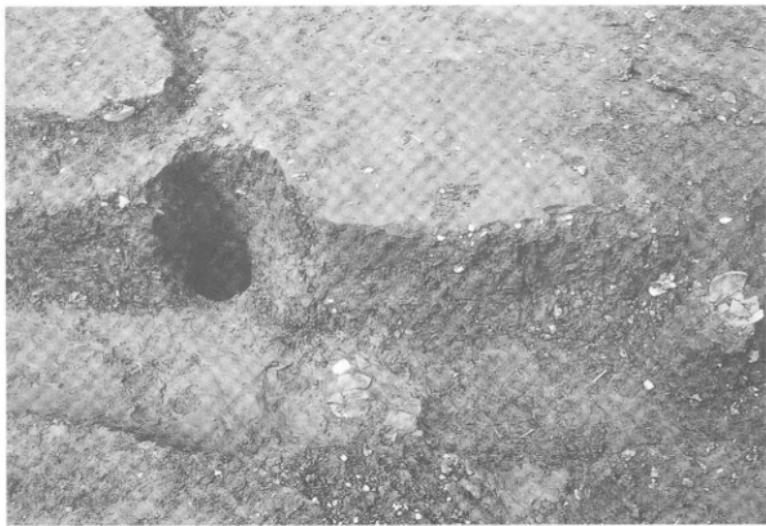
7. 遺物出土状況



8. 遺物出土状況



9. 遺物出土状況

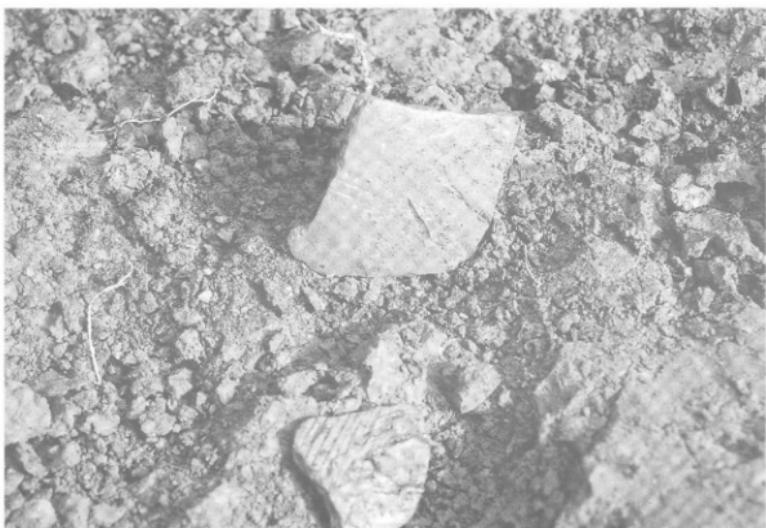


10. 遺物出土状況

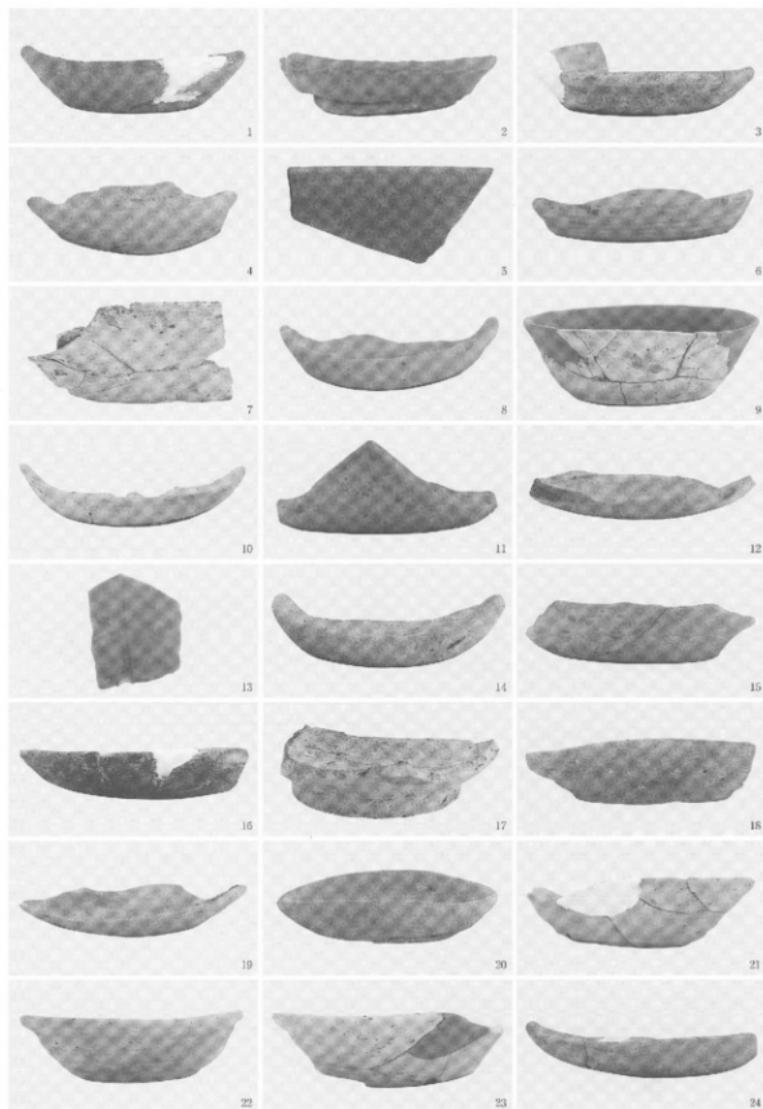
写真図版 6



11. 遺物出土状況

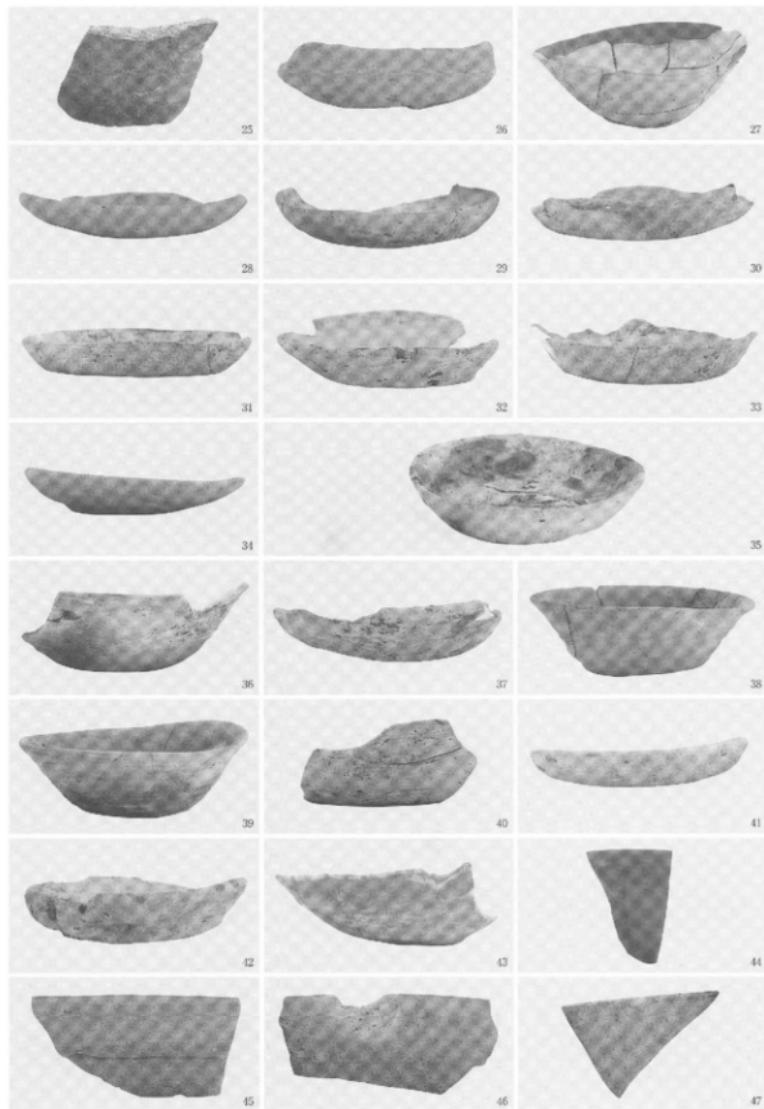


12. 遺物出土状況（試掘 2）

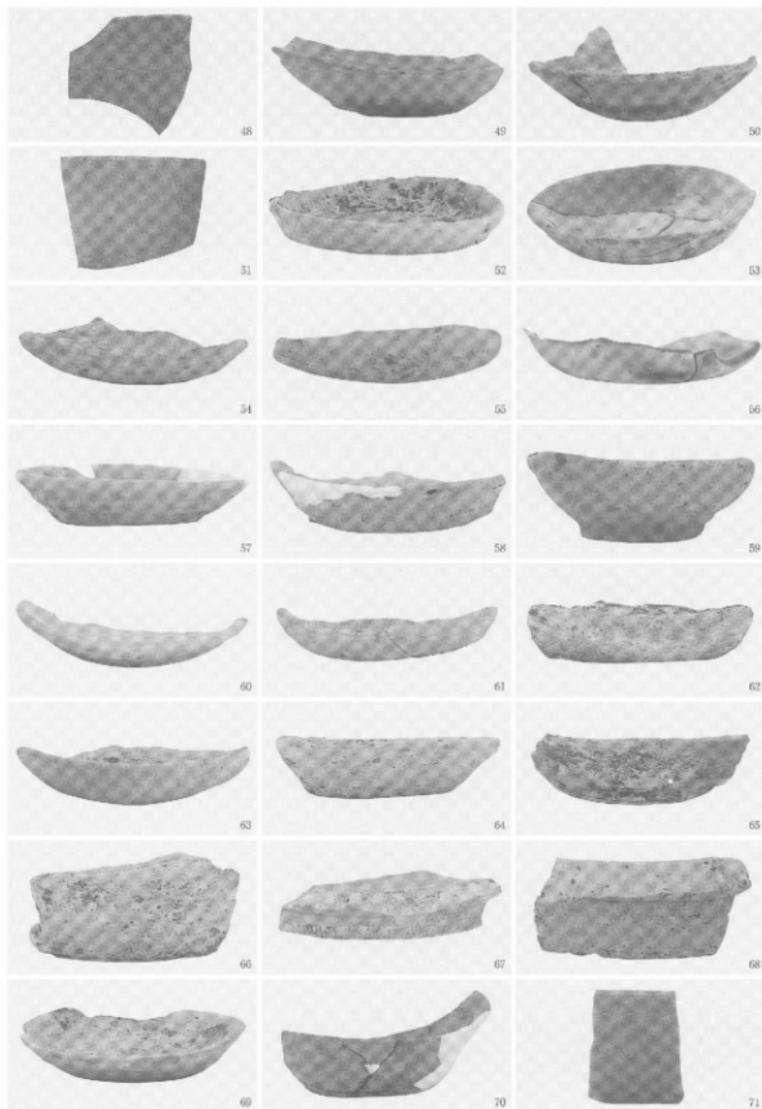


出土遺物 1 (1~24)

写真図版 8

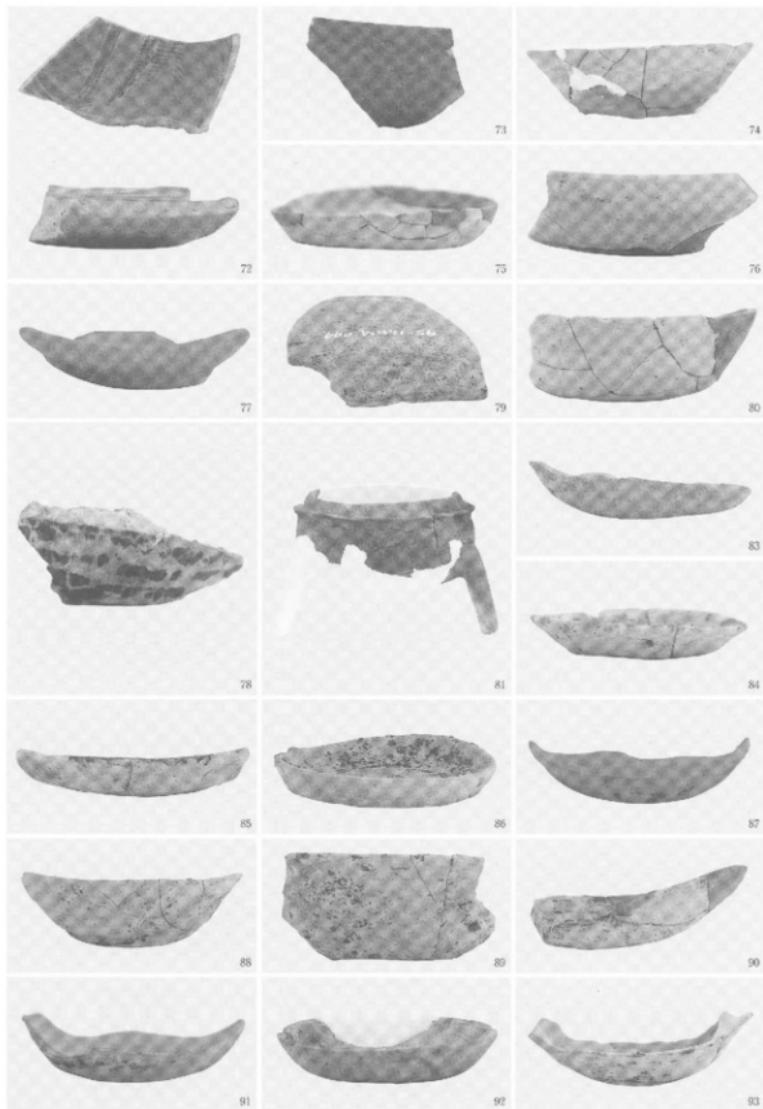


出土遺物 2 (25~47)

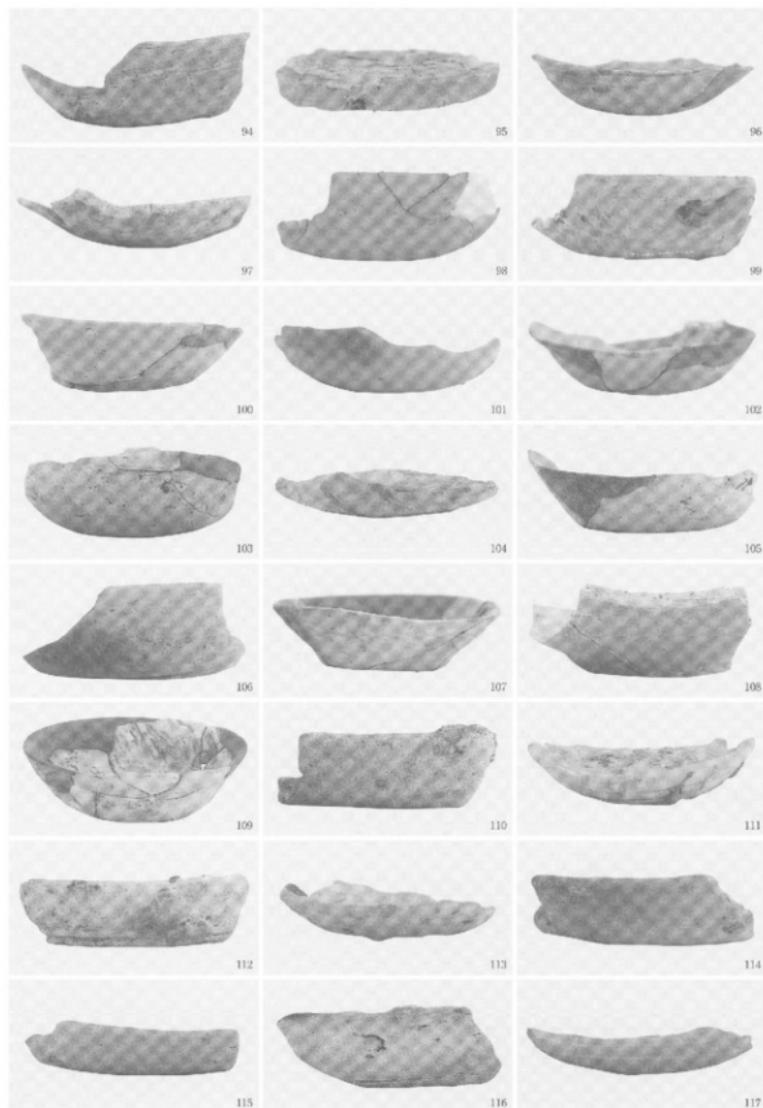


出土遺物 3 (48~71)

写真図版 10

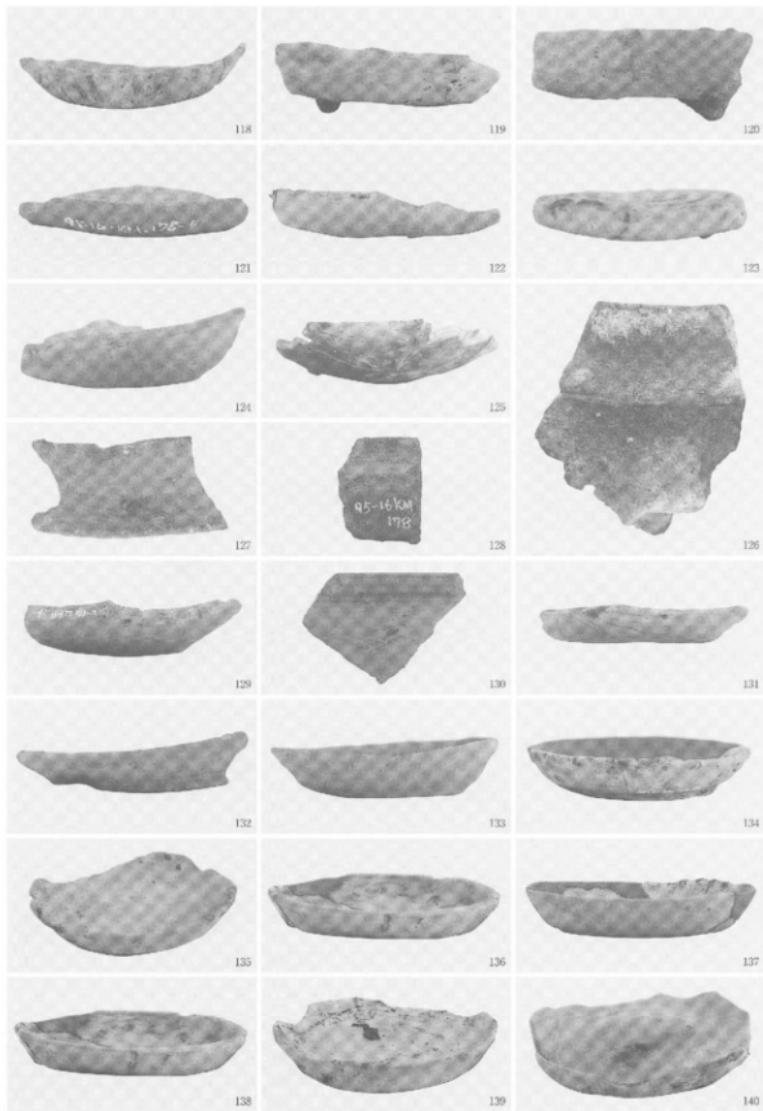


出土遺物 4 (72~93)

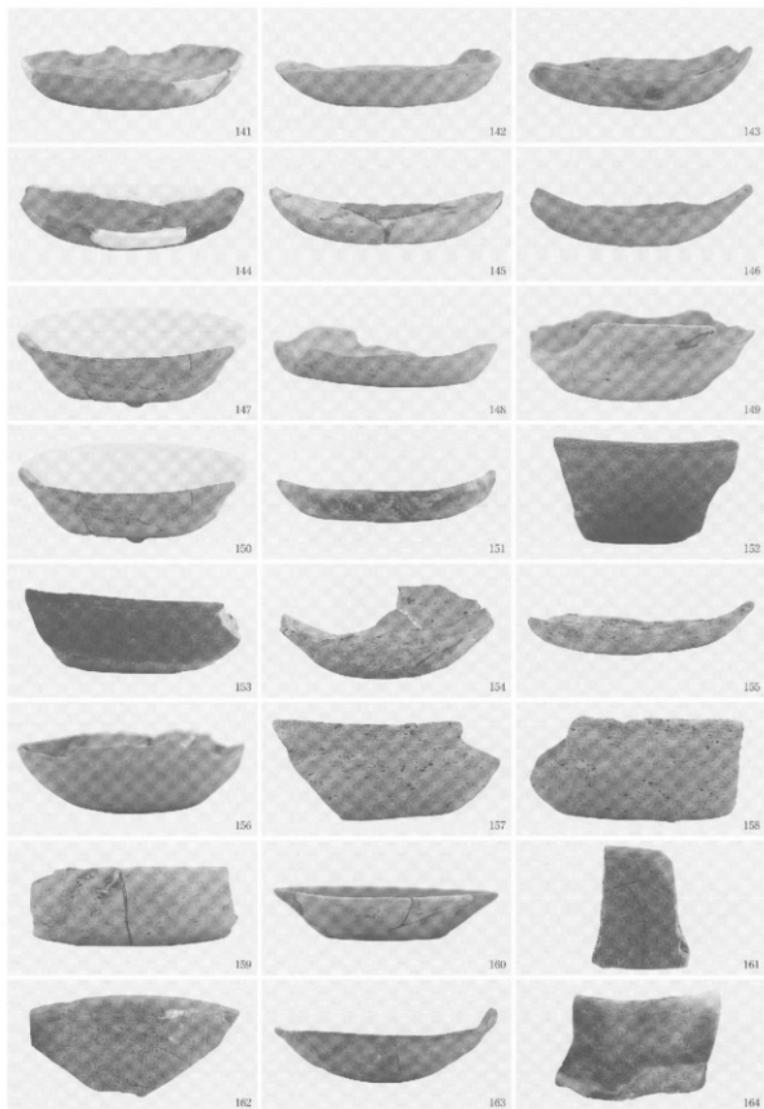


出土遺物 5 (94~117)

写真図版 12

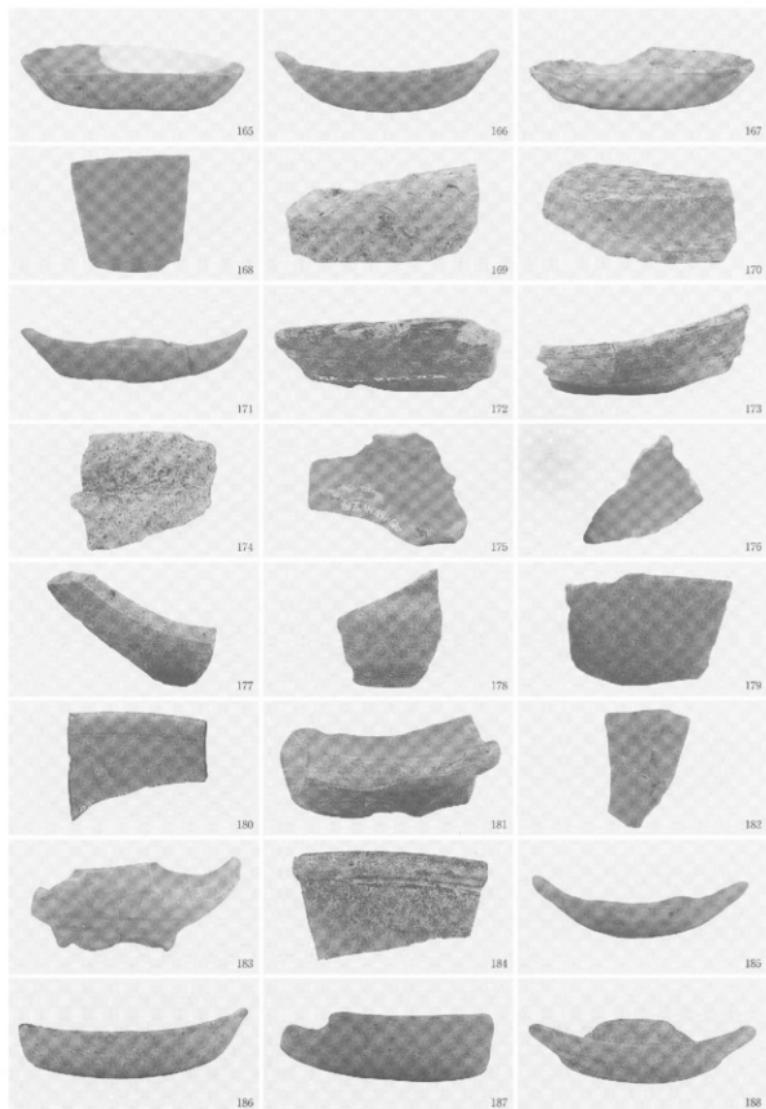


出土遺物 6 (118~140)

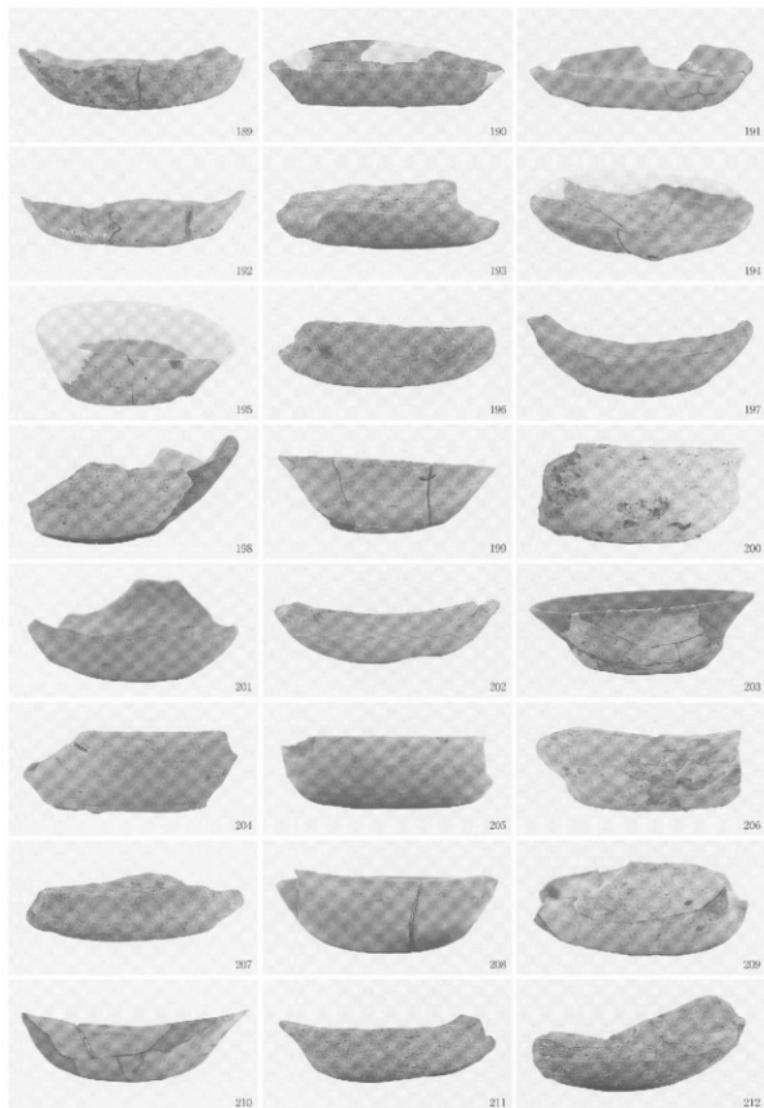


出土遺物 7 (141~164)

写真図版 14



出土遺物 8 (165~188)



出土遺物 9 (189~212)